

真理と摂理の働きをすべて学ぼう

「虹の掛け橋」第2巻

はじめに

私は「虹の掛け橋」が1章書きあがるごとに、周囲の身近な方々に配布し、読んで頂きました。読まれた方々からはいろいろな質問を頂きました。即答できたものも在れば、できなかったものも在ります。できなかった質問は私の課題とし、神仏（自然界に存在するあらゆるもの）に問い掛けながら答えを探って参りました。そして私なりに辿り着いたと思った答えを吟味した上で、質問をしてくださった方々にお答えしました。

「第2巻」では、頂いた質問に対してどのような過程を経て答えに辿り着いたのかを中心に、たとえ話を織り交ぜながら綴りました。

なお、デリケートな問題を抱えているテーマについては、重複文章が連なることをお断りいたします。

また「宇都宮市」は皆様がお住まいの都道府県庁所在の大都市名に「栃木県」は都道府県名に読み替えてください。

この本が皆様にとって少しでも参考になれば幸いです。

2020年3月30日

（著者） 宇都宮 大地

真理と摂理の働きをすべて学ぼう

「虹の掛け橋」第2巻 目次

はじめに.....	1
第11章 誰もが宇宙の中心に立っている.....	5
1 川の水と雨.....	5
2 ^{みちなか} 道半ば.....	7
3 ^{しきそく ぜくう くうそく ぜ しき} 色即是空と空即是色.....	9
4 ^{ぶつしょうらいはい} 仏性礼拝.....	10
5 出版.....	11
6 ペンネームの由来.....	13
7 虹はいつどこに現れるの？.....	15
8 100の差.....	19
第12章 優しい心で満たす.....	23
1 ^{とげ} 刺抜き地藏.....	23
2 真理を花に託す.....	25
3 表紙の ^{ず がら} 図柄.....	27
4 安らかな境地.....	27
5 区別が付かない.....	29
6 見返りを求めない布施.....	32
7 病気の苦しみから逃れたい.....	34
第13章 太平洋のすべての水をコップに注ぎ入れる.....	38
1 仏との対話.....	38
2 一瞬の中に無限の時間を入れる.....	45

第 14 章	仏は衆生を救いたいとの思いで法を説く	54
1	十二分	54
2	仏の説法	60
3	右手と左手	65
第 15 章	許し合って仲良く天国に入る	67
1	ほんの一部	67
2	法華經 ^{ほ け きょう}	71
3	ノアの箱船を人に譲れますか？	77
第 16 章	見返りを求めない善行	86
1	達磨大師 ^{だる ま だい し} がダルマさんに目を入れる	86
2	怒りが残っているのでは？	96
第 17 章	最も苦しいときに実践する	101
1	大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲れますか？	101
2	すべての人を許せますか？	107
3	強い愛情ほど良く物を燃やす	109
第 18 章	互いに支え合い、慢心 ^{まんしん} を抑え合う ^{おさ}	112
1	宇宙の中心に位置する神仏はいるの？	112
2	安全なところと危険なところ	119
3	楽な環境、厳しい環境	121
4	仕事を選ぶ	123

第 19 章 罪を背負う	127
2000 年の初夢	127
第 20 章 後にいる者が先になり、先にいる者が後になる	148
1 南泉和尚、猫を斬る	148
2 形が違う	153
3 ブラックホール	155
4 「ぶどう園の労働者」のたとえ	157
あとがき	165

第 11 章

誰もが宇宙の中心に立っている

1 川の水と雨

U さんと V さんの会話です。

U 私の家には 5 歳になる犬がいます。名前はワンと言います。ワンは散歩に連れてゆくととても喜びます。特に川に連れてゆくととても喜んで水の中に入って泳ぎ回ります。ところが雨が降ると、散歩に連れ出そうとしてもとても嫌がるのです。川の水も雨も同じ水ですし、川に入って泳ぐことも雨に打たれることも濡れることでは同じなのに、
どうしてワンは川に入って濡れることは喜んで、雨に濡れることは嫌
がるのでしょうか？

V それは、人間の目を見た「川の水と雨」がワンの目を見たそれとは異なるからです。私たち人間は両者が同じ H_2O という物質からできていることを知っていますので、本質的には同じものと捉えがちです。一方ワンは中学校も高校も出ていないため両者が同じ成分だと知りませんので、違うものと映っている筈です。

もし川の水と雨は同じものですか？ と質問を受けたら、その答えは同じものとも違うとも言えるのです。答えは受け手（たとえば「生物の種類」）によって異なるのです。

このことを踏まえ本題について考えて参ります。まず、ワンの立場になることが必要です。ワンは泳ぎたいから川に入るのです。泳ぐことが快感なのです。濡れるために川に入っているのではないのです。川に入って濡れたとしても、体をブルンブルンと振れば乾かすことができます。濡れたときの不快感からは一瞬で解放され、泳いだときの快感の方が不快感を上回って心に残るから喜んで川に入るのです。

一方雨は、ワンが体を濡らしたいときに都合よく降ってくるものとは限りません。雨が降ると気温は下がりますから、誰しも濡れて、これ以上体を冷やそうとは思わないのです。私たち同様、濡れた体をブルブルンと振って乾かそうとしても、次々に降ってくる雨粒によって濡れた不快感が継続してしまうため、ワンは雨の日に散歩に出るのを嫌がるのです。

このことは、次のようなことを教えているのです。

見た目が同じ要素からなる状態 W と $WW \cdots W$ があったとします。 X さんは W という状態がとても好きだったとします。この場合私たちは、 W が継続する $WW \cdots W$ の状態も好きであろうと考えがちです。しかしこのような考え方は反真理的世界に繋がっているため、やがて X さんを苦しめることになることを知るべきなのです。

具体的な例でお話しします。 Y さんは数学、物理学、生物学、医学、気象学、文学、芸術、スポーツ、政治、経済に関し超一流の知識（と技能）を身につけているため、全国の様々な団体から依頼を受け、年に 366 回ほどの講演を^{こな}熟している方です。受け取る報酬は、宿泊費及び交通費と地元名産を素材にした 3 食（朝昼夕）の料理でした。



日本蕎麦

shutterstock 16552666

そして Y さんには、食後「^{うま}美味かったです」と言う口癖^{くちぐせ}がありました。

ある日、受講生から「好きな料理は？」と聞かれ「日本^{そば}蕎麦」と答えました。

その日から講演の主催者たちが用意した 3 食は、各地名産の日本蕎麦になりました。食後 Y さんは口癖の「美味か

ったです」を連発します。このため 3 食の日本蕎麦を 1 年間食べ続けることになりました。つまり WW・・・W の状態になった訳です。やがて Y さんは日本蕎麦を食べることが耐えられなくなるほど苦痛になり、主催者が用意した食事をキャンセルし、近く中華料理店に入ってチャーハンと餃子ぎょうざと小籠包しょうろんぼうと春巻きと杏仁豆腐あんじんを食べたのです。つまりこのような食地獄から自ら脱出し、1 年ぶりに日本蕎麦以外のものを食したのです。

U 笑えますね。

V 確かに。でもワンの気持ちが理解できない人は、このような反真理的過ちを犯す可能性があるのです。

U うーん。他人ひと事でなくなります。講演の主催者の取った行動を笑うことは己を笑っているようなものですね。

V Y さんの事例はとても大切な戒めを説いているのです。

U それはどんな？

V 妻や夫や子どもに対する愛情が深ければ深いほど、WW・・・W 状態を作ってしまうと言う反真理的過ちです。この過ちの存在を知ることがイコール円満で、かつ、いつまでも新鮮味のある家族愛をはぐくみ続けるコツなのです。しかもこのことは世界中の人々に愛を注ぐときにも注意事項なのです。吠えながら自分の名前を語れるほ只者ただものでないワンが法を説いていたのです。

U なるほど。参考になります。

2 みちなか 道半ば

Z さんは仏の悟りを求めてこれに至る 1000り里の修行の道を歩み始めました。一步踏み出したところで、仏が現れ次のように言いました。

「この一步は悟りを求める大切な第一歩です。これをはつ ぽ だいしん発菩提心と言

ます。この一步がなければ、誰も悟りに到達することはできないのです。この一步は 1000 里の修行の道半ば（500 里）に相当する価値があるのです」と。

Z さんが修行を始めて 5 年が経過しました。修行の辛さに身も心も疲れ切っていました。Z さんは次のように思いました。「修行はもう十分行った。しかし、私は仏の悟りには到達できそうにない。身も心も疲れ切った状態で、これ以上の修行は命取りで無理だ。修行はもう止めることにしよう」と。そのとき、Z さんの前に立派な城が姿を現しました。Z さんが中に入ると、そこは綺麗な花々が咲き、美しい音楽が流れ、世界中のご馳走が用意されていました。仏が姿を現し、Z さんに言いました。「Z さん良くここまで修行を続けてきました。ここは 1000 里の修行の道半ば（500 里）に相当する地点です。ここで今までの疲れを癒してください。ここで修行を諦めたらこれまでの苦労はすべて水の泡です。残りは 500 里です。頑張ってください」と。Z さんは十分疲れを癒し、再び仏の悟りを求めて歩み始めました。

Z さんが修行を始めて 9 年が経過しました。修行ができることが次第に喜びに変わってきました。自然界の法則と真理と摂理の法則を速やかに理解できる靈力を身につけ、今や仏の一步手前の菩薩の境地に至っていると自覚するまでになっていました。そのとき仏が姿を現し、Z さんに言いました。「仏の悟りの全体像が見えていないのに、仏の一步手前の菩薩の境地に至っていると考えるのは慢心です。この慢心が在る限り仏の悟りには到達できないのです。1000 里の修行の道は 900 里辿り着いて道半ばなのです。残りの 100 里は今までの 900 里と同じほどの苦行が含まれているのです。災いは感謝と謙虚さを忘れたときにやってくると言う反真理を知るべきです。心してください」と。

Z さんが修行を始めて 10 年が経過しました。仏が姿を現し Z さんに言いました。「Z さん。とうとう 1000 里の道を登り切り仏の悟りに

辿り着きましたね」と。

すると、Zさんは静かに次のように語りました。「1000里の道は1000里辿り着いて道半ばなのです」と。これも大切な真理です。

3 色^{しき}即^{そく}是^ぜ空^{くう}と空^{くう}即^{そく}是^ぜ色^{しき}

蝶は一生を「卵→青虫→蛹^{さなぎ}→蝶→卵」と送ります。蝶の一生から色即是空と空即是色を考えてゆきます。

卵は静^{せい}、青虫は動^{どう}、蛹は静、蝶は動と観ることができます。つまり、蝶の一生は、静と動が交互に現れ、静から動、動から静へ向かってゆくことがわかります。

動から静へ向かう働きは「色即是空」、静から動へ向かう働きは「空即是色」と観ることができます。このような働きの中に「あらゆるものは常に変化する」と言う「無常」の永久運動や、「静や動の一方だけの状態に偏^{かたよ}らない」と言う「中道」の働きを観ることもできますので、釈尊の教えの真髄はどれも繋がっていることがわかります。つまり神仏（＝万教）の教えを要約すると「無窮^{むきゆう}の過去から無限なる未来に亘^{わた}って全宇宙・生命を活動成らしめている、無限なる永久運動のエネルギーは、より調和と秩序を目指した世界を創造するために活動している」と言う実相・真理を理解できるだけの靈力^{れいりよく}を身につけ、かつ1人ひとりがこの永久運動のエネルギーと同化した実践を行うことを促^{うなが}している」のです。1人ひとりが実践できたとき地上天国が実現するのです。

話を元（色即是空と空即是色）に戻します。

静寂^{せいじゃく}な中であっても、生を育み、やがて活発に動き回ったり飛び回ったりするための準備がなされているのです。静寂さの中に活動的な能力が潜在^{せんざい}していると観ることができます。一方、活発な動きの中で

あっても、静かなときを^{むか}迎える準備がなされているのです。活発な動きの中に、静寂さが潜在していると観ることができます。これらは、反作用によって生み出される真理と摂理の働きです。蝶が法を説いているのです。

4 ^{ぶっしょうらいはい} 仏性礼拝

法華經第 20 章「^{じょう ふ きょう ぼ さつほん}常不輕菩薩品」に、釈尊が前世、常不輕菩薩として修行されていたことが書かれています。

教典では、まずこの菩薩の名前の由来に関して説明がなされています。これによるとこの菩薩は「すべての人には、修行を続けてゆけばやがて必ず仏になることができる魂（仏性）が備わっている」と確信して出合うすべての人の仏性を礼拝してゆきます。この菩薩は黙って礼拝するのではなく「皆様は修行を成就して、やがて、必ず仏になることができます人ですから、私は皆様を尊敬いたします」と言いながら礼拝するのです。菩薩に礼拝された人の中には、怒って菩薩に石を投げたり、^{つえ}杖で^{たた}叩いたりする人もいたそうです。すると菩薩は走って逃げ、木の陰からちょこんと顔を出し、もう一度大きな声で「皆様は、修行を成就して、やがて、必ず仏になれる人ですから、私は石を投げ付けられても、杖で叩かれても皆様を尊敬いたします」と言いながら礼拝したそうです。このような目に浮かぶ光景が、実にユーモラスに法華經に描かれているのです。この菩薩＝前世の釈尊ですから、釈尊はとても茶目っ気のあった方のように、偉大な人ほど遠い存在ではなく、とても親しみ^{やす}易い方であると言う真理の存在が^{うかが}窺えます。

すべての人を常に尊敬する、つまりこの菩薩は誰も^{けいべつ}輕蔑^{かろ}しない（輕んじない）ことから「常不輕菩薩」と呼ばれるようになったそうです。

この菩薩こそ私の理想像の 1 つで、修行の目標です。しかし私はこ

の菩薩のように声に出して「皆様は、修行を成就して、やがて、必ず仏になれる人ですから、皆様を尊敬いたします」と言いながら 1 人ひとりの仏性を礼拝することは恥ずかし過ぎてできません。

ではどのようにして、理想である常不輕菩薩・釈尊に近づこうとしているのかと申しますと、私も「すべての人には仏性が備わっている、つまりすべての人の後ろには仏が立っている、そして心の中にも仏が存在している」と確信していますから、相手の仏性に聞かれても恥ずかしくない言葉で話し、観られても恥ずかしくない行いをし、観詰められても恥ずかしくない心の紋様でいるよう心掛けています（なかなか成就できませんけど）。この修行が私の行っている仏性礼拝です。

5 出版

仏が次のように私に語り掛けてきました。

仏 「虹の掛け橋」をできれば 10 章ごとに一冊いっさつの本に纏まとめて出版してください。これを世に出すときが訪れたのです。

私 仏さん。お言葉ですが私としては、これを周囲の身近な人に配るだけに留めたいのですが？

仏 「虹の掛け橋」はあなただけのものではないのです。霊界と宇宙で共有すべき財産ですから、真理と摂理の働きによって、あなたの意志でどうこうしようと言って自由にできるものではないのです。しかもあなたがこれを配ろうとしている人たちは、全く信仰を持っていないか、持っていて自分も学んでいる宗教宗派の教えが第 1 であると考え、他の教えを積極的に聞き入れようとしない方々です。残念ながらこの両極のタイプの方々が「虹の掛け橋」を読んでも、書かれている内容が実を結ぶことは絶対に絶対に絶対にないのです。

私 仏さん。そんなに力りきんでは、血圧が上がりますよ。でもそれはど

うしてですか？

仏 聖書の中の言葉を使って説明します。イエスが次のように語っているところがあります。

『種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥がきて食べてしまった。他の種は、石だらけで土の少ないところに落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。他の種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆い塞いだので、実を結ばなかった。また、他の種は良い土に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは 30 倍、あるものは 60 倍、あるものは 100 倍にもなった。』

種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。道端のものとは、こう言う人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンがきて、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。石だらけのところに蒔かれるものとは、こう言う人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起これば、すぐに躓いてしまう。また、他の人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆い塞いで実らない。良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は 30 倍、ある者は 60 倍、ある者は 100 倍の実を結ぶのである』と。

このたとえ話のように、信仰を持たない人が「虹の掛け橋」を読んでも、サタン（煩惱）によって邪魔されて書かれている教えが理解できなかつたり奪い去られたり、あるいは、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、目に見えるほどの御利

益^{やく}がないと、すぐに躓^{つまず}いてしまうのです。

また、信仰を持っていたとしても、自分が学んでいる宗教宗派の教えが第1であると考えて他の教えを積極的に聞き入れようとしない方々が「虹の掛け橋」を読んでも、書かれている教えに一応は耳を傾けるが、自分の学んでいる宗教宗派が第1であると言う茨が「虹の掛け橋」を覆い塞いでしまうために実らないのです。

仏との対話は「6 ペンネームの由来」へ続きます。

6 ペンネームの由来

私 わかりました。出版することにします。

仏 ペンネームは「宇都宮大地」としてください。

私 え！ どのような理由からですか？

仏 あなたの名前は広い海の真ん中に、ちょこんと存在する島です。溺れる者にとって安らぎの島です。この島を広げてゆく意味で、名字の中を大に、島を地に変えて、名前を大地とし、名字を宇都宮とするのです。ペンネームは一般的に著者のためのものですが、このペンネームは読者のためのものです。つまり読者が次の①～⑦のような人になってくださいと言う私（仏）からのメッセージ・願いです。

① 大地のように、多くの人に安らぎを与えることができる人になって欲しいのです。

② 大地のように、誰よりも頭^{こうべ}を低く垂れている縁^{えん}の下^{した}の力持ち的な存在になって欲しいのです。

③ 「高天^{こうてん}に 跼^{せくぐま}り、厚地^{こうち}に 踏^{ぬきあし}す」と言う諺^{ことわざ}があります。これは「高い空の下であっても背^{かが}を屈め、厚い大地の上を歩くときであっても抜き足で静かに歩く」と言う意味です。読者にはこのような謙虚な心の紋様になって欲しいのです。

④ 大地の偉大な機能の 1 つは、汚れを浄化する能力です。汚れた世界に身を置いても、このような浄化能力を発揮して欲しいのです。

⑤ 虹は天国・悟りの世界へと続く道のようなものです。しかし残念なことに人間の目ではこの虹を常に見ることができないのです。神仏の心・目をもって初めて観ることができるのです。つまり、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲り続けた者が、この虹を観て渡ることができるのです。だから、虹はこのような心の紋様になった者が渡れると言う、天（神仏の世界）と大地（地上世界）を繋ぐ契約であると知って欲しいのです。

⑥ そして天に辿り着いたと思ったとき「頭を垂れる実った稲穂が描かれている 5 円玉」を心に描き、有頂天になっている己を戒めて欲しいのです。

⑦ 宇都宮の宮とは神の^{やしろ}社を表します。この社を広げて行って欲しいのです。つまり宇都宮→栃木県→日本→世界（地球）→太陽系→銀河系→宇宙と言うように、徐々に神仏の愛・教えを宇宙の隅々にまで広げて欲しいのです。

世界中で戦争や経済紛争などの争いが絶えないのは、自国の利益を互いに優先しているからです。これでは世界の平和は訪れません。世界の平和を最後まで^{はば}阻んでいるのは、個人のエゴ、家族のエゴ、地域のエゴ、国のエゴです。21 世紀は、これらのエゴのない社会を作り上げて欲しいのです。

多くの人は自身のエゴ・利益、家族のエゴ、地域のエゴ、国のエゴを捨てて、好ましい方を他に譲ると、自分は損をするのではないかと心配します。でも自然界の摂理は、何の見返りも求めずに己のエゴを捨てた者にこそ、膨大な福德が^{もたら}齎されるように働くのです。なぜならこの結果、社会の秩序が戻ってくるからです。

ではこのような摂理が、銀河系（宇宙）の営みの中で、本当に働い

ているのかどうか確認してみましょう。

銀河系は始め1つの塊^{かたまり}だったのです。やがて、物質の密度が均一に成ろうとする摂理の働きによって、塊は無なる空間へ物質を放出してゆき、1000億個もの恒星が銀河系全体に広がるように形成され、銀河系の中心には反作用の摂理によって、大きなブラックホールが形成されます。このことは、中心から物質が放出される以上に、周りから中心に向かって物質が流れ込んでいることを示しています。このブラックホールで起こっている現象について「物質」を「愛」に置き換えて考えると、次のように表現できます。

「生まれたばかりの銀河は、塊と言う土の鬼のような心であるエゴが支配していましたが真理に目覚め、このエゴを捨て、身を削りながら愛を周りの星々・空間に注いでゆきます。この愛を受け取った星々は恒星へと成長し、やがて受けた恩・愛を、感謝を込めて銀河系の中心へ返し始めます。この感謝は、銀河系の中心から注がれている愛を上回っているのです、ここにブラックホールが形成されたのです」と。

このように、何の見返りも求めずに己のエゴを捨てた者には、膨大な感謝と言う福德が周りから贖され、そこが（この者が立っているところが）ブラックホールのように愛の集まる銀河系の中心の宮になることを大宇宙自ら法を説いて示しているのです。

私は「読者1人ひとりが立っているその場所が、神仏たちが集まる宇宙の宮（宇都宮）となって欲しい」という願いを込めて、このペンネームをあなたに使って欲しいのです。

7 虹はいつどこに現れるの？

AさんとBさんの会話です。

A Bさん「第1巻 あとがき」のところで「虹は常に私たちの周り

に存在していることを知ったのです」と書かれています。私には虹を常に見ることができないので、この箇所の意味が良くわからないのです。Bさんは常に虹を見ることができますか？

B ホースで水を左・右に撒^まけば、そこに虹が現れます。そして、プリズムを前・後に置けば、そこに虹が現れます。虹はこの空間に一杯詰まっていて、常に私たちの周りに存在していることは理解できます。

しかし、最初に「虹の掛け橋」を読んだ時点では、私も実際には虹を常に見ることはできませんでした。もしかしたら「虹の掛け橋」の著者も虹を常に観ることは不可能なのではないかと思いました。

でも、何度も読んでいるうちに、この著者には常に観えるのではないかと思えるようになったのです。そしてこの虹は人間の目では見えないものであり、また目の見えない人でも観ることのできるものであると気付いたのです。

次第に私もその虹を観たいと思うようになりました。そこで、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲る修行を通して心を浄めました。そして遂^{つい}に常に虹を観ることができるようになったのです。

A 説明を聞いても良くわかりません。その虹は美しいのですか？

B とても美しいです。

A そうですか。私にも観えるようになりますか？

B 必ずなります。

A それでは、心を浄める修行をしてきます。

1年が経過し、AさんはBさんのところへきました。

A 全く虹は観えません。私には決して観えないのではないかと思います。

B そんなことはありません。いつか必ず観えるようになります。

A 不謹慎^{ふ きんしん}かも知れませんが、これはアンデルセン童話の「裸の王様」

ではないかと思えるのです。観えた観えたと言う人は実は正直者を装^{よそお}った嘘つき者で、本当は決して観えないものだから「見えません」と言う者が本当の正直者ではないかと思えてならないのです。

B 実は私もそう思った時期がありました。でも、この課題は神仏が私の前に落とした汚れた藁^{わら}で、これが拾えるかどうか神仏から問われていると思いました。そして私にもいつか必ず観えるようになると信じて行^{ぎょう}じていったのです。

A わかりました。私も信じて修行を続けることにします。

更に1年が経過しましたが、Aさんには常に虹を観ることはできませんでした。一生行じて自分には、この虹を観ることはできないのではないかと思い、諦^{あきら}めかけていました。そこへ仏が姿を現しAさんに語り掛けました。

仏 良くここまで行じました。「虹はいつどこに現れるのか？」これを考えてください。これがわかれば虹を観ることができます。もう一歩です。頑張れジャンヌ。いや、頑張れAさん。

Aさんは仏に励まされ、更に修行を続けました。虹を観るための修行を始めてから3年が経過していました。この間「仏から頂いたヒントが何を意味しているのか？」を考えながら行じてきました。そして遂^{つい}に「常に虹を観ることができる」とはどういうことなのかを悟るきっかけとなる出来事に出合ったのです。

それは1999年4月29日「自然に感謝する」という主旨で定められた国民の祝日である「みどりの日」（当時は4月29日）に、東京の空に現れたのです。何が現れたのか？ 大きな虹が2つ現れたのです。腕時計を観たら午後6時を指していました。長針と短針が天と大地を貫^{つらぬ}く時刻に、恰^{あたか}も天と大地の掛け橋となるような虹が現れたのです。しかも重なるように。人知を超えた神仏の働きが存在していることを

Aさんは感ぜずにはいられませんでした。そして、この虹が毎日新聞（の東京版）で翌日、1面で掲載されたのです。

このとき、Aさんは仏から頂いたヒントである「虹はいつどこに現れるのか？」の意味を理解できたのです。

Aさんは地方出身者です。東京にきてもう何年にもなりますが、虹を観た記憶があまりありませんでした。前回観たのも何年前だったのか思い出せないほどでした。

田舎に^{いなか}住んでいた頃は、雨の上がった後には必ずと言って良いほど虹は良く出たものです。東京と田舎の違いは何か？ それは大気(空)の汚れの違いです。4月29日に東京の空に虹が掛かったのは、その10日ほど前から雨の日が続いたお^{かげ}蔭なのです。雨が東京の大気の汚れを洗い流してくれたお蔭で澄み切った空になり、そこに太陽の光が^さ射して虹が現れたのです。

「虹はいつ現れるのか？」答えは「雨で洗われて澄み切った空になり、そこに光が射したとき」です。汚れた空の状態では虹は現れないのです。つまり、心の汚れが洗われ、そこに神仏の光や教えが射してきたときに虹が現れるのです。大自然が法を説いていたのです。

「虹はどこに現れるのか？」答えは「心の中に現れる」のです。しかもこの虹は、肉眼で見える7色だけで構成されているのではないのです。虹が2つ重なるように現れたことから虹の隣に、また虹が続いているように、心の中に現われる虹は無限の広がりを持っているのです。

光には^{ガンマ}γ線のような短波から電波のような長波まで様々な波長が存在しています。人間の目で見える（可視）領域はこの中の非常に狭い領域なのです。大部分は見えないのです。つまり肉眼で捉えた虹は、光の波長のほんの一部ですから、5円玉を立てて上から見た狭い範囲です。

しかし心が浄められて、そこに神仏の光や教えが射し込んだときに

そして A さんは、遂にこの虹を常に（毎日）観ることができるようになったのです。つまり A さんは、観たり聞いたり触れたり出合ったりする日常の何気ない現象・風景の中に、無限に広がる光り輝く神仏の教えが幾重にも重なる虹のように存在していること（たとえば、桜の花が美しい理由など）を観てとることができるようになったのです。

C'さんと D'さんの会話です。

100 (分子)

で極微ですから、両者は等価です」と答えています。

19

D' 私は C さんと D さんは、等価であると観るべきだと思います。

C' わかるように理由を説明して頂けますか？

D' この「虹の掛け橋」は、出合う現象をどのように受け取ったら良いかと言う観点で書かれたものです。したがって「数学的な差を感じなくなるように受け取るべきだ」と説いていると思います。たとえばで説明します。

ここに大きな風呂敷^{ふろしき}が 2 枚並んで置かれていたとします。それぞれの風呂敷に千円札が 1 枚ずつ置かれました。右側の風呂敷にだけ 100 円玉が置かれました。つまり左側の風呂敷には 1000 円、右側の風呂敷には 1100 円置かれています。C'さんはどちらの風呂敷を選びますか？

C' 右側の 1100 円の方を選びます。

D' では、それぞれの風呂敷に 1 万円札が 1 枚ずつ置かれました。右側の風呂敷にだけ 100 円玉が置かれました。つまり左側の風呂敷には 10000 円、右側の風呂敷には 10100 円置かれています。C'さんはどちらの風呂敷を選びますか？

C' 右側の 10100 円の方を選びます。

・ (1 時間後)

・ (2 時間後)

・ (3 時間後)^{じょうだんですよ}

D' では、それぞれの風呂敷に 1 万円札が 1 億枚ずつ置かれました。右側の風呂敷にだけ 100 円玉が置かれました。つまり左側の風呂敷には 1 兆円、右側の風呂敷には 1 兆 100 円置かれています。C'さんはどちらの風呂敷を選びますか？

C' 次第にどちらでも良くなりますね。確かにこうなると差は感じなくなるものです。D'さん。もう 1 つ質問して良いですか？

D' 良いですよ。

C' 世の中には億万長者もいれば、非常に貧しい人もいますよね？

この両者も等価と観るべきなのですか？

D' 「虹の掛け橋」は「神仏の目から観ればこの両者も等価であると観るべきだ」と説いている筈です。

C' わかるように理由を説明して頂けますか？

D' 世の中には、耳・目・鼻・口（歯・舌・顎・喉）・腕（手・指）・足（膝）・肩・腰・皮膚・心臓・肝臓・腎臓・膀胱・脾臓・肺・食道・胃・腸・膀胱・子宮・骨・筋肉・神経・血液・免疫・脳などの病氣・障害を抱えた方が居られます。これらの方が、もしも、お金を積んで治るのであれば、可能な限りのお金を用意されると思います。つまり、体に値段を付けるとすれば、無限大の金額になります。ですから億万長者の持っているお金は仏の目から観れば、1兆円の隣に置かれた100円玉程度ですので、億万長者も非常に貧しい人も等価であると観るべきだと思います。

C' なるほど。良くわかりました。ところで、D'さんはこのようにいつも「すべては等価である」と観ているのですか？

D' 人は2つのものを見ると必ず、どちらが優れているかとか、好ましいかとか、都合が良いかとか、数学的な足し算や引き算を行って判断してしまいます。つまり必ず2つの間の差を見出して・計算してしまいます。私もそうです。ですから「すべてのものは等価である」と捉えるくらいで丁度良いのだと思います。

私 ここで、私の経験を、お話しさせてください。

神仏の教えに出合ってから、どれが最も得かを計算してしまったときは、可能ならば、あえて損をする道を選択するよう実践・訓練してきました。たとえば、お店が、1倍、2倍、5倍、10倍の、ポイント還元セールをしていたときは、お店と従業員とその家族の繁栄を願って、1倍のときに買い物をしました。この行為は、大きい方、好ま

しい方、楽な方を人に譲る修行とイコールでした。10年 20年 30年、
ひたすら実践を続けました。やがて、天から健康と言う膨大な福德が
プレゼントされたのです。人の幸せを願って、己が損をする道を選択
(=自己犠牲)すると、得(私の場合は、医療費等の失費がほぼゼロ)
と徳(魂の成長)と幸せが齎されるように、宇宙ができあがっている
ようです。なぜなら、その結果、調和と秩序が形成されるからです。

第 12 章

優しい心で満たす

1 棘^{とげ}抜き地藏

巣鴨^{すがも}にある棘抜き地藏は、参拝者が、体の悪いところと、洗い観音の同じ箇所を洗ってあげると、お礼にその悪いところを治してくれるご利益^{りやく}があることから、大勢の人たちが参拝に訪れています。

以下は参拝者（E さんたちの心の紋様）と地藏（又は観音）菩薩の対話です。

E お地藏さん。私はお腹の中に悪い出来物ができてしまいました。お医者さんからは、後△△年の命^{あと}だと宣告されました。私には、夫と、年を取った両親と、まだ小学生の子どもが 2 人います。私が死ねば家族は路頭^{ろとう}に迷ってしまいます。後△△年で、私が死ぬわけにはゆかないのです。どうか、お腹の中の出来物を取り除いてください。

地藏 病気のあなたが、遠いところからここまでくるには、大変な苦労があったことでしょう。あなたが救われたいと言う真剣な思いは良くわかりました。

これまでも家族のために一生懸命働き、これからも家族のために働ける体になりたいと言うあなたの思いは神仏の思いと同じです。必ずあなたの願いは叶えられると信じて、出合うすべての人が私（地藏）であると思って、その人のお腹（腹黒い・醜^{みにく}い・意地悪^{いじわる}な心を含む：以下同じ）を綺麗^{きれい}に洗ってあげるような優しい気持ちで接してください（腹黒い心などに耐える・受け入れる・許すことを含む：以下同じ）。

行^{ぎょう}じた分だけお腹の出来物は小さくなってゆきます。

F お地藏さん。小学生の息子のお腹の中に悪い出来物ができてしま

いました。お医者さんからは、後◇◇◇年の命だと宣告されました。たった1人の息子は私たち夫婦の宝物です。息子が死ねば生きる望みは消えてしまいます。それに息子が苦しんでいる姿を見るのは、親としてとても耐えられません。どうか息子のお腹の中の悪い出来物を取り除いてください。もしも私が身代わりになることで息子の命が救われるのであれば、どうかそのようにしてください。

地藏 あなたが子どもを救いたいと言う真剣な思いは良くわかりました。家族の健康を願い、苦しむ家族の身代わりになりたいと言う思いは神仏（私）の思いと同じです。必ずあなたの願いは叶えられると信じて、出合うすべての人が私であると思って、その人のお腹を綺麗に洗ってあげるような優しい気持ちで接してください。家族全員で、このような思いで行じた分だけ、息子さんのお腹の出来物は小さくなってゆきます。

G お地藏さん。脳に障害を持つHさんを治してください。目の病を持つIさんを治してください。耳の病を持つJさんを治してください。鼻の病を持つKさんを治してください。口と性格の悪いLさんを治してください。腕を怪我したMさんを治してください。足を怪我したNさんを治してください。心臓の悪いOさんを治してください。肝臓の悪いPさんを治してください。・・・・・・を治してください。

地藏 自分のことや家族のことは願わず、周りの人の健康を願って、私の全身を綺麗に洗ってくれた人はあなたが初めてです。観たところあなたには、お馬鹿なお頭の^{つむ}悩みがあるようですが、良くなりたいと言う願いはないのですか？

G 正直言って、このお馬鹿なお頭で生まれたときから苦しんでいますから、良くなりたいと言う気持ちはあります。しかし私は、お利口な妻と息子（次男）の知恵を借りてそれなりに生活できています。これ以上望むのは罰当たりだと気付いたのです。H～Pさんたちの苦し

みは深刻です。お地蔵さん。まず彼らの病を治してください。私は最後に治して頂ければ良いのです。

地蔵 私の目には、あなたのお頭の深刻さが、Hさんたちのそれよりも決して軽いものとは思えませんが、まず、周りの人たちの幸せを祈る思いは神仏の思いと同じです。神仏は「自分は最後で良いと言う心境になった者」をまず救いたいのです。私はあなたのこの思いに偽りはないことを観てとることができました。あなたのお頭を最初に治してあげます。

X お地蔵さん。参拝者の病が治るのは、お地蔵さんが代わりにその病を背負ってあげるからなのでしょう？ だから皆から抜いてあげた棘は、お地蔵さんの体の中にあるのですよね。痛いでしょうね。お地蔵さんの体の中にある棘を、今度は私に背負わせてもらえませんか？

Xさんの心の紋様を観てとった地蔵菩薩は一粒の涙を流しながら語りました。「棘抜き地蔵の棘を抜くあなたこそ、本当の棘抜き地蔵です」と。

2 真理を花に託す

QさんとRさんの会話です。

Q Rさん。「第8章 3 ^{せしゅう}世襲制度」のところで「^{かざ}釈尊が言葉に表現できない真理を花に託し、これを翳したとき釈尊の言わんとすることを理解したのは^{かしよう}迦葉だけだった」と書かれています。釈尊が花に託した真理とは何ですか？

R これについては「第26章 2 桜の花」で解説されますので、楽しみにして頂いて、ここではこれがわかったら迦葉と同じ悟りの境地

であると申し上げます。つまり釈尊の後継者となることができる方なのです。しかもこれは釈尊が言っているように「言葉では表現できない」のです（ここは「虹の掛け橋」の著者の見解とは異なります）。ですから、たとえ私がわかったとしても、正確に言葉で解説することはできないと思います。

しかしこの話と同じようなことが「虹の掛け橋」の別なところで書かれています。

Q それはどの箇所ですか？

R 「第7章 7 天地不書の教典」のところです。ここに「今まで、教典（文字）に書き記^{しる}すことのできなかつた教えを、天地・大自然・宇宙・目の前に訪れる現象から学び取りなさい」と書かれています。

これを参考に釈尊が花に託した真理は何かを私なりに考えますと、釈尊は弟子たちに様々なたとえ話を駆使^{くし}しながら法を説いてきたのですが、生涯説き続けても言葉に表すことのできない真理を語り尽くすことはできないと思い至り、後は修行者自ら、大自然から学び取りなさいと言いたかつたのではないのでしょうか？

一輪の花の中にも仏の教えが無限に存在している、つまりこの花の中に、釈尊が今まで説いて来た法話のすべてが存在している、だからこの花が語り掛けている教えを学び取りなさい。

そして花に託した真理とはこの部分ではないかと思うのですが、行じた程度に応じてしか、大自然が語る法を理解できませんので、迦葉が花から何を悟ったのかは私には窺^{うかが}い知ることはできません。

おそらく迦葉は、花が説いている（人の生き方に通じる）真理、正確に表現するならば、花とそれを育^{はぐ}む環境＝宇宙が説いている（人の生き方に通じる）真理を悟ったのだと思います。ですからその内容を書き記すとすれば、1冊の本では収^{おさ}まらないと思います。7冊くらいになりそうです。

3 表紙の図柄^{ず がら}

私が最後に出版する本は、次のような表紙にしたいと思っています。

『法衣を纏^{まと}ったふくよかな仏が立っています。右手を斜めに上げ、左手を斜めに下げています。右手には実った稲穂が握られています。その稲穂の先から虹が、左の掌^{てのひら}へ向かって下りています。

仏の左の掌は地上世界を表します。人々がこの虹を地上世界から稲穂のある上方へ向かって登ってゆきます。

虹の中腹には立派な城が建てられています。城は休息所です。人々は登ることに疲れて何度も諦めようとします。そんなとき、仏は人々の前に城を現すのです。人々はここで今までの疲れを癒^{いや}します。癒された人々は城を出て再び虹を登り始めます。

人々はやがて虹の頂上に辿り着きます。そこが悟りの世界で天国です。そこでは人々は、蝶のように羽を持って自由に飛び交^かっています。何人かは虹を下りて、これから登ってこようとしている人々のお手伝い（接待）をしています。

良く観るとこれらの人たちには、皆光り輝くリングが頭上に付いています。そのリングには、仏の握っている、たわわに実り頭を垂れる稲穂が映^{うつ}り慢心を抑えています』。

4 安らかな境地

SさんとTさんの会話です。

S Tさん。「安らかな境地」とはどのような境地なのでしょう？

T 私の思ったことを答えて良いですか？

S 勿論^{もちろん}、それで結構です。

T 私たちはある意味では、この安らかな境地に辿り着くために心の修行を行っていると言っても良いと思います。少なくとも私はそうです。私はすぐに、カーッと頭に血が上るタイプで、人から^{いかずち}雷と呼ばれていたのです。つまりすぐ^{かみなり}雷を落としたからです。

人を怒った後は実に不愉快なものです。怒ってスーッとするとするのは嘘だと思います。怒られた人も不愉快でしょうし、これを観ている周りの人も迷惑を感じるでしょうから、怒りは皆を「安らかな境地」とは反対の「地獄の世界」に引き込んでしまうと思います。

S Tさんにも、すぐにカーッと化した時期があったのですか。今のTさんからはとても想像できないです。よほどの修行をされたのでしょうかね。

T 心の修行を始める前と今を比較すると、頭にくる現象に出会う^{ひん}頻度は今の方が多いかも知れません。

S そうですね。私はTさんが怒っているところを観たことがありませんので、Tさんが出合う現象は、すべてTさんの心の紋様と同じような^{おだ}穏やかなものだと思っていました。

T そのようなことはありません。しかし私は、出合う現象のすべてが、私を^{きた}鍛えるために神仏が用意してくれたものと受け取れるようになって、以前であればすぐに怒ってしまって、その怒りによって自分の身を^こ焦がしてしまっていたであろうと思われる現象に出合っても、その怒りを消すことができるようになったのです。

S さん。私たちの人生は、陸上競技のハードル競走のようなものだと思うのです。ゴールを目指して走り出しても、そこには乗り越えなければならない幾つものハードル（障害）が神仏から用意されているのです。このハードルが私たちの心を磨いてくれる神仏からの慈悲なのです。

ハードル競走のオリンピック選手は、ハードルの存在を感じさせる

ことなく流れるように駆け抜けてゆきます。それは、ハードルを飛び越えるとき、頭の高さを一定に保ち、体のバランスを崩さないからです。スタートからゴールまで、頭の高さは一定なのです。こうすることによって視界はゴールまで広がり、コース全体の状況を把握し、状況に適応した動きを瞬時に取ることができるのです。

ハードル競走のオリンピック選手とは誰か？

あらゆる障害を乗り越えることのできる人生の達人・神仏です。しかしオリンピック選手も人生の達人も、ここに至るまでには相当の練習・修行を重ねてきた筈です。最初から上手く跳べる人はいないので、最初は誰でもハードルの高さに応じて頭を上下させ、バランスを崩しそうになりながら跳んできたのです。何度もハードルと言う障害にぶつかって、心を鍛え、その修行を経て頭が上下しない、動揺しない心に辿り着いたのです。

「安らかな境地」とはどのような境地なのか？

それは、周りの環境（状況）が安らかなときに訪れる境地ではなく、怒りや悲しみを強く感じるような環境に身を置いても、動揺しない冷静な心を得たとき訪れる境地を言うのです。これも真理です。

5 区別が付かない

明るい部屋に置かれたとても透明なガラスビンがあります。ここに無色透明な水を注いでゆきます。やがて満水になったとき、この状態を初めて見た人にとって、このビンが「空っぽ」なのか「満水」なのか区別が付きません。

天体望遠鏡で夜空を観察したとき、真っ暗な空間があったとします。この空間は「空っぽ」で星が全く存在しないのか、あるいは「星が満ちていて」とても重い星団を形成しブラックホールとなっているため

真っ暗に見えるのか区別が付きません。

このように、光の世界でも闇の世界でも「空^{くう}」なのか「満^{まん}」なのか区別できない両極が存在するのです。

ここで言う光の世界とは、観えたり聞こえたり五感で感じ取ることのできる世界を表します。一方、闇の世界とは、五感では感じ取ることのできない世界、つまり窺^{うかが}い知ることのできない相手の心の中の世界を表します。

私たちは、日々大勢の人たちと接しています。接する人たちが見せてくれる行為、聞かせてくれる言葉があります。同じ行為・言葉が天使のような優しさを持ったものとして受け取れることもあれば、悪魔のような意地悪さを持ったものとして受け取ってしまうこともあります。つまり、出合う現象が人々の優しさから発したものか、意地悪さから発したものか区別できないことがあります。

ちょっぴり余談^{よ だん}ですが、同様に、アヒルの湖だと思っていたら白鳥^{はくちょう}の湖だったとか、「湯^ゆの湖^こ」ってお湯の湧いた温^わかな湖だ^{あた}と思っていたらむしろとても冷たい湖だったとか、オアシスに美女だと思っていたら近づいてチューしたら（蜃気楼^{しん きろう}の）砂漠^{さばく}の中の棘^{とげ}のある月下美人^{げつ か び じん}（サボテン）だったとか（いたた！）、鉄製の井^{どんぶり}だ^{まぐろ}と思っていたら鮪^{あか み}の赤身が乗った井だったとか、馬と鹿だと思っていた私がお馬鹿だったとか、中学生の頃まで「新犯人」だと思っていたら「真犯人」だったとか、「土曜の牛の日」だと思っていたら「土用^{どよう}の丑^{うし}の日」だったとか、旅行がかかったクイズで「諸行無情^{しよぎよう む じよう}」と書いたら「諸行無常^{む じよう}」が正解「ああ、この世は無情だ」とか、馬と私の耳に念仏？（南無阿弥陀仏^{な む あ み だ ぶつ}ってなーに？）とか、やっと動き出したと思ったら隣の電車の方だったとか、向上心が低いと思っていたら探求心のある人だったとか、罪が軽いと思っていたら重かったとか、警察官だと思っていたら泥棒だっ

たとか、真^ま面^じ目^めな宗教法人だと思っていたら行^{ぎょう}事^じの度^{たび}にお金^{さいそく}を催促する詐^さ欺^ぎ教団だったとか、国民^{けっそく}の結^け束^{そく}を高める体制だと思っていたら差別や格差^{つな}に繋^あがる悪^あしき反真理的体制だったとか、趣味は写真^{さつえい}撮影だと思っていたら登山だったとか、役に立たない夫だと思っていたらそうでもなかったとか、暗く小さな星だと思っていたら巨大な恒星だったとか、音痴^{おん ち}だと思っていたら歌が上手だったとか、狼^{おおかみ}男^{おとこ}だと聞いていたけど肌^{はだ}はつるつるだったとか、簡単な公案で解けたと思って答えを読んだら超難問でびっくりしたとか、無事だと思っていたらあの世だったとか（南無阿弥陀仏、アーメン）、天国に入れると思っていたら2号さんを作ったために地獄に落ちたとか、（昼寝^{ひるね}して）朝6時だと思って起きたら夕方の6時だったとか、トイレだと思っていたら布団^{ふ とん}の中だったとか、夢^{ゆめ}幻^{まぼろし}だと思っていたら現実だったとか、北極（の熊・写真）だと思っていたら南極だったとか、夕食^{さそ}に誘^{うし}おうと後ろから声を掛けたら妻だったとか（ひえーえ！ こわー！・・・・・・、いや、ある意味、妻は今でも好みの女性だった？・・・・・・でも、妻の審判^さは避けられない、南無阿弥陀仏、アーメン）⇒「許してくれていた」と、ずうーっと思っていたけど「あなたと一^{いっしょ}緒^{はか}のお墓^{はか}は死んでもいや！」と言われ「妻より長生きするしかない」と思ったとか、他^ひ人^と事^{ごと}だと思って安心して笑って読んでいたら自分の身に降りかかってきて慌^{あわ}てたとか、と言う話を時々耳にします。

話を戻して、人生は「空」「満」「善想念」「悪想念」等々、どちらなのか区別できない現象に良く出合います。ですから、この対応を一步間違えると出合う人々の心を傷付け兼ねないのです。

区別できないことは自分の考えで区別してはいけないのではないかと思います。何事も相手の善意から発した行為であり言葉であると解すべきだと思います。

なぜなら、こう思えば、相手を傷付けることはないからです。「傷付くのは自分である方が、心が背負う荷物は軽い」と言う真理の世界に繋がっているからです。

6 見返りを求めない布施

UさんとVさんの会話です。

U Vさん。「虹の掛け橋」には、良く「見返りを求めない布施が尊い(真理)」と書かれています。理屈はわかるのですが、実践するのは不可能である気がします。Vさんはどう思いますか？

V 正直言って布施をするとき「幸せになれますように」とか「今度自分が困ったときには助けてもらえますように」とか「これが100倍になって戻って来ますように」とか見返りを求める気持ちが、心の奥底に^{ひそ}潜んでいることは事実だと思います。

相手が怪我をした小鳥だったり、子犬だったりした場合は、その怪我を治してあげても、小鳥や子犬に見返りを求めることはないと思います。しかし相手が^{つる}鶴や^{うみがめ}海亀や人となると、^{とたん}途端に見返り・^{おんがえ}恩返しを求めてしまいます(反真理的行為)。これが人間の^{さが}性と言うのでしょうか。だから「見返りを求めない布施を実践する」のは、とても難しいと思います。

でも、なかなか実践できないからこそ、実践できない・限界の自分を見つめる良い修行になるのだと思います。おそらく、これが実践できたら悟りの境地に到達したのと同じではないかと思います。

U なるほど。良くわかります。修行を積まれたVさんでもなかなか実践できないとすると、私には一生掛けても実践できそうにありません。

V そんなことはないです。いつか必ず実践できる時がくると信じ

て行じてゆけば、やがてできるようになると思います。

私も、未だに「見返りを求めない布施」を实践できていませんが、どのような行為が「見返りを求めない布施」に相当するのかは知っているのです。

U え！ それはどのような行為ですか？

V ノアの箱船である命の綱を人に譲る行為です。この行為（布施）こそが「見返りを求めない布施」に相当します。なぜなら、命の綱を譲ってしまえば、自分に訪れるのは死であり絶望であり苦しみです。このような苦しみを自分が背負ってでも人を救いたいと思ってする行為が、ノアの箱船である命の綱を人に譲る行為と言えます。命の綱を譲った（死）後は、人から恩返しを受けることのできる自分（肉体）は存在しない訳ですから、このような布施は見返りを求めているのです。

U 命の綱を譲る布施ですか。話を聞いて、なおさら私には实践できそうにありません。

V 「虹の掛け橋」には、命の綱を譲る布施とはどのような布施なのか、具体的に書かれているところがあります。たとえば、次の①～⑥のような布施です。

① 積んだ徳分をすべて人に譲ること。

② 救命ボートを人に譲ること。

③ トンネルの中に閉じ込められたとき、自分の持っているまんじゅうを出し、これを皆で分けて食べること。

④ 「第3章 8 旅人と藁^{わら}」に登場する旅人が、出会う人々から求められた物を譲ってゆくような行為。

⑤ 「第12章 1 棘抜き地藏」に登場するGさんのように、苦しみを持ちながらも、周りの人たちの幸せを祈り、自分は最後に救われれば良いと言う心境になること。

⑥ 同節に登場する X さんのように、棘抜き地蔵の棘を自分が背負いたいと言う心境になること。

これらは、すべて、神仏の目から観れば命の綱を譲る行為に相当します。

U なるほど。②の救命ボートを人に譲ることは今の私にはとてもできそうにありませんが、①の積んだ徳分を人に譲ったり、⑥の「棘抜き地蔵の棘を抜いてあげますよ」と言ったりすることは私にもできそうです。何となく命の綱を譲る布施、つまり見返りを求めない布施が私にもできそうな気がしてきました。

V U さん。そう簡単ではないのです。

U え！ それはなぜ？

V 積んだ徳分を人に譲ったり、棘抜き地蔵の棘を抜いてあげたりすり行為が、命の綱を譲る布施であると知った途端に人は、この布施をすることによって膨大な福德を呼び込むのではないかと言う期待を心の奥底に抱いてしまうからです。

V うーん、なるほど。確かにそうですね。話を聞けば聞くほど、私には見返りを求めない布施はできそうにありません。

U 私は思うのです。誰でも初めは見返りを求めた布施から徳積みを開始したのではないかと。だから、見返りを求めた布施を何度も続けていって初めて無意識のうちに、見返りを期待しない布施ができるようになるのではないかと。

7 病気の苦しみにから逃れたい

W さんは、現在の医学では治癒^{ちゆ}困難な病気にかかってしまい、入退院を繰り返す日々で、精神的に疲れ切った状態でした。この苦しみが

ら何としても逃れたいと強く思い、医学が駄目ならば仏に救ってほしい、そう強く念じて3年が経過しました。

その思いが遂に仏に通じ、仏が病室のベッドで横になっている W さんの前に姿を現しました。

W 仏さん。どうかこの病気の苦しみから私を救ってください。

仏 いつか必ず仏が救ってくれると信じ続けたあなたの願いは、本物であると観ることができました。あなたをすべての苦しみから救って差しあげます。私を信じて、これから私の言うとおりに動いてください。そうすれば、やがてすべての苦しみから逃れることができます。

W わかりました。

仏 WW・・・W さん。いや、W さん。窓を見てください。



天井

shutterstock_2132345203

窓の外の草木を見てください。草木の向こうにある山を見てください。目を病室に戻してください。天井と天井を見てください。床と床を見てください。両親

を見てください。先生を見てください。看護師さんを見てください。見舞いにき

てくださった方を見てください。同じ病室に居る患者さん方を見てください。鏡に映った可笑しい顔を見てください。コップの水を飲んでください。昼食の天井を食べてください。ベッドの手すりに触れてください。ドアのノブに触れてください。音楽を聞いてください。本を読んでください。人と話をしてください。ベッドに横になり静かに目

を閉じてください。

5分ほど静寂^{せいじやく}な時が流れ、再び仏がWさんに語り掛けてきました。
仏 Wさん。やさしい思いでゆっくり目を開いてください。やさしい思いで窓を観てください。やさしい思いで窓の外の草木を観てください。やさしい思いで草木の向こうにある山を観てください。やさしい思いで目を病室に戻してください。やさしい思いで天井と天井を観てください。やさしい思いで床^{フロアー}と床^{ベッド}を観てください。やさしい思いで両親を観てください。やさしい思いで先生を観てください。やさしい思いで看護師さんを観てください。やさしい思いで見舞いにきてくださった方を観てください。やさしい思いで同じ病室に居る患者さん方を観てください。やさしい思いで鏡に映った可笑しい顔を観てください。やさしい思いでコップの水を飲んでください。やさしい思いで夕食の天井を食べてください。やさしい思いでベッドの手すりに触れてください。やさしい思いでドアのノブに触れてください。やさしい思いで音楽を聞いてください。やさしい思いで本を読んでください。やさしい思いで人と話をしてください。やさしい思いでベッドに横になり静かに目を閉じてください。

Wさん。やさしい思いで観て、人と接し、味わい、触れ、聞いて、読んで、話すことは、仏の目・心で接する真理的行為なのです。そして、このやさしい思いで心を満たすことによる、摂理の働きにより、
治癒力^{ち ゆりよく}と生きる希望を無尽蔵^{む じんぞう}に生み出すことができ、これが病や悩みなどのすべての苦しみ・負の要因・反真理的世界から逃れる方法・真理なのです。

その日からWさんは仏の言葉を信じ、周囲の人たちから屈辱^{くつじよくてき}的な仕

打ちを受けても、どんな苦難に出合っても、常にやさしい心を保つよう努めました。痛みから時々顔を^{しか}顰めてしまうこともありましたが、すぐに仏の言葉を思い出して、笑顔に戻しました。

神仏の目から観て、病気を一生背負って味わう苦しみに^{ひってき}匹敵する、血と涙の苦難に耐える修行でした。

3年が経過しました。Wさんはとても^{にゅうわ}柔和な顔に変わっていました。仏の目と心を得て、すべての^{すべ}苦しみから逃れる術を身につけたのです。そして気が付いたら病気が治っていました。

第 13 章

太平洋のすべての水をコップに注ぎ入れる

1 仏との対話

A さんたちの会話です。

A B さん。「第 10 章 9 仏との対話」のところで書かれている「仏から授けられたヒントが、なぜ 5 円玉でなければならなかったのか？」という問い掛けに対して、私は 2～3 分考えただけで答えを読んでしまったのです。読んでから思ったのですが、これは 1～2 年掛けても自ら答えを観付けるべきだったと。答えを読んでしまっただけでは、答えを得たときの爽快感そうかいかんも「虹の掛け橋」の醍醐味だいごみも味わえませんよね。

この問題と同等の課題、つまり、これを解けば同じような爽快感を味わえる課題・公案はありませんか？

B A さんには体の悩みや、家庭や職場での悩みはないのですか？
これらの悩みは、この問題の答えを得る以上の課題であると思います。
そして、これらの悩みを克服したときには、この問題の答えを得たとき以上の爽快感を味わうことができると思います。

A お陰様で今のところとても健康です。家庭も職場も円満です。今はこのような問題を解いて、スカッとするような爽快感を味わってみたいのです。

B A さんがそこまでおっしゃるのであれば、著者から聞いた次の公案を解いてください。

「このコップに太平洋のすべての水を注ぎ入れてください」。

A えー！ これが公案ですか？ B さん。コップの容積はわずか 200cc くらいですよ。どうして、この小さいコップの中に太平洋の水が全部入るのですか？ いくら骨のある公案を解いてみたいと言って

も、不可能な公案では、何年掛かっても解けないじゃないですか。

B これは公案なのです。仏が与えた問題であると理解してください。この公案は人間の頭・知恵では解けないのです。仏の目・心・知恵をもって探って初めて答えに辿り着けるのです。

A この公案には答えがあるのですか？

B 公案に決まった形の答えはないのです。

A それじゃ、答えに辿り着いたかどうかわからないじゃないですか。

B 答えは修行者の心の紋様に応じて存在するのです。ですから、Aさんが納得した答えが、公案の答えなのです。

そして、答えがわかったとき、Aさんは必ずスカッとするような爽快感を味わえると、私が保証します。

A そこまでおっしゃるのであれば、この公案にチャレンジします。

読者の皆様も Aさんと一緒に、考えて頂ければと思います。

答えがわかったと思われる方は、以下を読み進めてください。

それから Aさんは、この公案を解くために心を浄める実践を行いながら、様々な教典を読み始めました。

1年が経過しました。Aさんは「この公案は私には難し過ぎて一生掛けても解けないのではないか」と思い始めました。そこで Aさんは Bさんを訪ねました。

A この公案は私には難し過ぎて答えがさっぱりわかりません。何かヒントを頂けないでしょうか？

B 実はこの公案はとても難しいから、ヒントがなければ恐らく誰も解けないと思います。私もヒントを得て答えが私なりにわかったのです。

A それじゃ、Bさんが頂いたヒントを私にもください。

B この公案は仏との対話、つまり大自然と対話しながら解くのです。ですから、私が頂いたヒントは大自然から頂いたのです。それを私の口から A さんに教えるのは簡単ですが、これを聞いて解けたとしても、スカッとするような爽快感を味わうことはできないと思います。

A そうですか。それじゃ、自分で工夫しながら修行して答えを観付けるしかないのですね？

B そうです。

再び A さんは、この公案を解くために心を浄める実践をしながら様々な教典を読み始めました。

更に 1 年が経過しました。しかし答えはさっぱりわかりませんでした。A さんは「やはりこの公案は難し過ぎて一生掛けても解けない。もう諦めよう」と思いました。そのとき、仏が A さんの前に姿を現しました。

仏 A さん。ここまで良く修行を続けてこられましたね。この公案はすぐには解けないのです。神仏の教えを深く理解して初めて答えがわかるのです。だからこれが解けたならば森羅万象^{しんらばんしょう}を理解できるのです。もう一歩です。諦めずに何としても答えに辿り着いてください。

A 仏さん。私の体力はもう限界です。これ以上、修行を続けられそうにありません。

仏 そうですか。それではヒントを授けます。

「この公案が解けたとき、A さんの視野はこれまでとは比べようもないほど広がっています」これがヒントです。

再び A さんは、このヒントを頼りに心の修行を続けました。

更に 1 年が経過しました。しかし答えはさっぱりわかりませんでした。ヒントが何を意味しているのかさえも理解できませんでした。

Aさんは「やはりこの公案は難し過ぎて一生掛けても解けない。今度こそ本当に諦めよう」と思いました。そのとき、仏がAさんの前に姿を現しました。

仏 Aさん。もう一歩です。諦めずに何としても答えに辿り着いてください。

A 仏さん。私の体力はもう限界です。これ以上の修行はとてもできそうにありません。

仏 そうですか。それでは2つ目のヒントを授けます。『仏教の維摩経ゆい ま きょうの中に「不可思議解脱ふ か し ぎ げ だつ（如何なるものにも捕らわれない境地）と言う法門が説かれています。この法門を体得たいとくした者は、自由自在に、須弥山しゆ み せんのような大きな山を小石の中に入れることができる」と説かれています。つまり一微塵いち み じんの中に全世界を入れることも、一瞬の中に永劫えいごう（無限の時間）を入れることもできると説かれているのです。

このことを理解できたとき、太平洋のすべての水をコップの中に入れることができます。これが2つ目のヒントです。

再びAさんは、このヒントを頼りに心の修行を続けました。

更に1年が経過しました。しかし、答えはさっぱりわかりませんでした。一微塵の中に全世界を入れたり、一瞬の中に無限の時間を入れたりすることなど常識では考えられないからです。

Aさんは「常識では考えられないような公案を仮に解けたとしても、これが何の役に立つのだろうか？」と疑問に思い始め修行を止める決心をしました。

そんなときでした。Aさんの職場に今年採用されたCさんが配属されて来ました。Cさんはどんな人にも深々と頭を下げて礼拝するので、まるで常不軽菩薩じょうふきょうぼさつ（=釈尊）のようでした。

Cさんの言動が菩薩の振る舞いと全く同じであったので、Aさんは

手元にあった「虹の掛け橋」を C さんに読んでもらいました。すると案の定 C さんは一読ただけでそこに書かれている実相の世界を理解することができました。A さんは「C さんは仏が私の元に送り込んでくれた菩薩に違いない」と思い、今まで解けなかった公案を C さんに相談しました。すると翌日 C さんは A さんのところへきて言いました。

C 私是一日も早く仕事を覚えたいので、入社時に次のような目標を設定したのです。A さん、目を通してもらえませんか？

そこには、月ごとの目標が次のように書かれていました。

- ・ 4 月：世界の情勢を理解する。
- ・ 5 月：日本の情勢を理解する。
- ・ 6 月：産業界の情勢を理解する。
- ・ 7 月：会社がどのような仕事をしているのか、その全体像を理解する。
- ・ 8 月：部ではどのような仕事をしているのかを理解する。
- ・ 9 月：課ではどのような仕事をしているのかを理解する。
- ・ 10 月：係ではどのような仕事をしているのかを理解する。
- ・ 11 月：自分の担当している仕事に責任を持って対処する。

A さんは、これを読んだ瞬間に公案の答えを悟ったのです。縁あったか、その日は 7 月 20 日の「海の日」だったのです。

仕事の覚え方には、大きく分けて 2 つあります。1 つは、まず自分の仕事を理解し、次に係ではどのような仕事をしているのかを理解すると言うように次第に視野を広げてゆきながら、最終的に会社や産業界全体を理解する方法です。もう 1 つは、C さんのように全体を理解してから、次第に視野を身近なところに絞ってゆき、最終的に自分の仕事が全体の中でどのような位置にあるのかを理解する方法です。

どちらから仕事を覚えたら良いのかは一概に言えませんが、2つの方法があつて、状況に応じて使い分けできることが大切です。

Cさんが掲げた目標を読んで、Aさんがなぜ公案の答えを悟ったのかに話を戻します。

Cさんは「産業界や日本や世界のことや、会社全体・部・課・係のことを理解しなければ、自分の担当している仕事に責任を持って対処することができない」と言うことを伝えたかったのです。つまり「自分の担当している仕事に責任を持って対処できている人は、係・課・部・会社全体・産業界・日本・世界のことを理解していると言えます（真理的世界）」と言っているのです。言い方を変えるならば「自分の担当している仕事に責任を持って対処できていない人は、係・課・部・会社全体・産業界・日本・世界のことを理解していないからです（反真理的世界）」と言うことです。

このことは何を意味しているのか？

「世界・日本・産業界の情勢や、会社全体・部・課・係のことを理解するために必要な要素・知識は、すべて自分の担当している仕事の中にも入っている・要求される」と言うことを意味しているのです。

ここで言う「世界の情勢」とは何か？

それは公案の中の「太平洋のすべての水」を表します。

ここで言う「自分の担当している仕事」とは何か？

それは「太平洋の1滴の（海）水」を表します。

つまり仏の目をもって観るならば「太平洋の1滴の水の中に、太平洋のすべての水に匹敵する要素が含まれている」と観ることができるのです。

「コップに太平洋のすべての水を注ぎ入れる」と言う公案の答えは「コップに太平洋の水1滴を落とす」ことなのです。

このように受け取ったとき、Aさんは仏が授けたヒントの意味を理解することができたのです。「この公案が解けたとき、視野はこれまでとは比べようもないほど広がっています」と言うヒントは「1滴水を太平洋全体にまで広げる視野を身につけることができる」ことを意味していたのです。この公案は「1滴水の中に太平洋全体を観ることができますか？」と言う仏の問い掛けであったのです。

「須弥山のような大きな山を小石の中に入れることができる」と言うヒントは「須弥山を形成しているあらゆる要素が小石の中にも存在している」と言うことを意味していたのです。

「一微塵の中に全世界を入れることができる」と言うヒントは「原子核の周りを電子たちが回っている極微の世界の中に、恒星の周りを惑星たちが回っている姿や、銀河系の中心の周りを恒星たちが回っている広大な宇宙の姿を重ねて観ることができる」ことを意味していたのです。

Aさんが公案を解くための修行を始めて4年の年月が流れていました。行じて行じて、体全体で悟ったのです。そしてこの公案が解けたとき、Aさんは言葉では表せない爽快感を味わうことができたのです。

しかも、この公案が解けたことによって、Aさんは小さな世界の中に大きな世界の要素がすべて含まれていると言う真理が「色即是空、空即是色」の真理へ繋がっていることや、釈尊が翳^{かざ}した花の中に釈尊の教えのすべてが含まれているのを観てとることができた迦葉の悟りや、1人（国）を救うことがすべての人（国）を救うことに向かっている・繋がっていることなどが理解できるようになったのです。

ものには量と質の側面があります。コップの中に太平洋の全水量を注ぎ込むことができないことは誰の目にも明らかです。釈尊が説いた8万4000もの教典のすべての文字を憶えることができないことも明らかです。

この公案は質の側面を注ぎ込むことを問うていたのです。釈尊の教えの真髓と言う質がすべて注ぎ込まれた花を理解できるかどうかと言う問い掛けに、迦葉だけが理解できたのです。

Aさんは今、茨城県の阿^あ字ヶ浦^{じがうら}海岸に立っています。子どもの頃に良く父に連れられて泳ぎにきたところです。水戸市の大学時代にも良く友人たちと遊びにきたところでもあり、夏休みに近くでアルバイトしていたときにも良く泳ぎにきたのです。Aさんはなぜこの場所に強く引き付けられたのか、その理由が今になってわかったのです。

Aさんは生まれたときから仏と同行二人で行じていたことを確信したのです。仏に導かれて、知らず知らずのうちにここにきていたのです。仏と共にこの海岸に立って空と海が交差する水平線を観詰めながら、真言密教の奥^{おう}義^ぎの1つである阿^あ字^じ観^{かん}を学んでいたのです。

Aさんはゆっくりと身を屈^{かが}め、打ち寄せる波に手を触れました。手から落ちる滴^{しずく}をもう一方の掌^{てのひら}で受け止めました。この滴^{しずく}を翳^{かざ}し、顔を近づけました。Aさんの目には、きらきら光る滴を通して、太平洋が観えました。この滴の中に太平洋があり、世界中の海があり、地球があり、宇宙があるのです。今、Aさんは全身で阿字観の奥義を体得したのです。

2 一瞬の中に無限の時間を入れる

Dさんたちの会話です。

D Eさん。「第13章 1 仏との対話」のところで、仏から出されたヒントに「一瞬の中に永劫（無限の時間）を入れる」とありますが、どう言う意味なのでしょう？

E これ自体公案のようなものです。ですから、返ってくる答えは人によって異なると思います。

D Eさんはどう考えますか？

E 私は「一瞬の中に無限の時間が存在している」ことを知ることだと思います。

D 具体的にはどう言うことでしょうか？

E 太陽が地球に光を注いでいます。光の当たっているところが昼で、当たっていないところが夜です。今この時点で、日の出を迎えたところもあり、日の出から1時間が経過したところもあり、真昼を迎えているところもあり、日の入りを迎えているところもあり、日の入りから1時間が経過したところもあり、真夜中を迎えているところもあります。このように観ると、この一瞬の中に1日が存在しているのです。

D なるほど。Fさんはどう考えますか？



春の富士山

Shutterstock_446355274

F 今、日本が春だったとします。このとき、南半球の同じ緯度のところでは秋です。赤道付近では夏で、日本より緯度の高いところでは冬を迎えている筈^{はず}

です。この一瞬の中に世界のどこかで春を、どこかで夏を、どこかで秋を、どこかで冬を迎え

ていますから、一瞬の中に1年が存在しているのです。

D なるほど。Gさんはどう考えますか？

G 世界に視野を広げたとき、今生まれたばかりの赤ん坊がいます。1歳の誕生日を迎えた子もいます。10歳の誕生日を迎えた子もいます。100歳の誕生日を迎えた人もいます。学校に入学 or 入所した人もいます。学校を卒業 or 中退 or 退学した人もいます。入社 or 退職 or 転職した人もいます。結婚（再婚）or 離婚した人もいます。愛し合って妊^{にん}

娠させた or 妊娠した or 出産した人もいます。・・・・・・。死を迎えた人もいます。ですから、この一瞬の中に人生が存在しているのです。

D なるほど。Hさんはどう考えますか？

H 今芽を出したばかりの草花があります。今花を咲かせた草花があります。今枯れた草花があります。今生まれたばかりの昆虫がいます。今羽化して成虫になった昆虫がいます。今死を迎えた昆虫がいます。今生まれたばかりの魚がいます。今成魚になった魚がいます。今死を迎えた魚がいます。今生まれたばかりの鳥がいます。今大空を飛べるようになった鳥がいます。今死を迎えた鳥がいます。このように捉えようと「 Σ （地上の生物の一生・寿命）＝無限」です。

D なるほど。Iさんはどう考えますか？

I しばらくは、生々しい光景が続きますが、読者の皆様に知って頂きたい内容ですので、耐えて聞いてください。1,000 人の乗客を乗せた電車を、ある人が故意（自殺あるいは他殺など）又は過失によって 3 時間止めてしまったとします。乗客 1,000 人が受けた影響は 3 時間 $\times$ 1,000 人 = 3,000 時間です。

正常なダイヤに戻すために動いた職員や JR から東京メトロへの乗り換え客の切符を精算する作業におわれた職員や現場検証の警察官等々が 200 人いたとします。これらの方が受けた影響は 3 時間 $\times$ 200 人 = 600 時間です。

この電車が 3 時間停車したために、後続の電車 100 本が 3 時間遅れた（あるいは運休した）とします。乗客数は合計 10 万人で、これらのダイヤを正常に戻すために動いた職員や関係者が 1 万人いたとします。これらの乗客、職員及び関係者が受けた影響は 3 時間 $\times$ (10 + 1) 万人 = 33 万時間です。

これらの電車に受験生が 1000 人乗っていたとします。この中の 10 人が遅刻して受験できずに 1 年間の浪人生活を強いられたとします。

この受験生の家族及び関係者が 50 人いて、共に 1 年間、生活が乱されたとします。これらの方々が受けた影響は $1 \text{ 年} \times (10 + 50) \text{ 人} = 60 \text{ 年}$ です。

これらの電車に、今日手形を^{けっさい}決済しなければ倒産してしまう方が 1000 人乗っていたとします。この中の 10 人が間に合わずに倒産してしまい、残りの人生 50 年が乱されたとします。この方の家族と、社員及びその家族、関連会社の社員及びその家族が、合計 1 万人いて、共に残りの人生 50 年が乱されたとします。これらの方々が受けた影響は $50 \text{ 年} \times (10 + 10,000) \text{ 人} \div 50 \text{ 万年}$ です。

倒産に追い込まれた方の関係者の中で、生活苦に耐えられず 10 人が犯罪に走ってしまったとします。被害者とその家族等関係者が受けた影響は時間で計ることができないほど無限の時間に相当します。

これらの電車に、今日手術を担当する医師が 100 人乗っていたとします。この中の 1 人が間に合わず不幸にして患者が死亡したとします。患者とその関係者が受けた影響は時間で計ることができないほど無限の時間に相当します。

駅構内と周辺は、立ち往生の人たちで^{あふ}溢れ、携帯電話で関係者と連絡を取っています。

- ・「会社の将来を^か賭けた大切なプレゼンに間に合わない。どうしよう、どうしよう」と。
- ・「会社の面接試験に間に合わない。どうしよう、どうしよう」と。
- ・「1 人娘（あるいは友人）の結婚式に間に合わない。（友人代表のあいさつを私の代わりにしてくれる人を急いで探してー）」と。
- ・「幼稚園に残っている子どもを迎えにゆけない。どうしよう、どうしよう」と。
- ・「病院の予約時間に間に合わない。どうしよう、どうしよう」と。
- ・「母親の死に目に間に合わない。どうしよう、どうしよう」と。

・「飛行機が飛び立った時刻ね。あなた、新婚旅行は諦めましょう」と。

電車での移動を断念した人たちがバス停へ向かいます。バスは最初
のバス停ですでに満員。この状態で出発したバスは、バス停を次々に
「満員通過」。いずれのバス停も取り残されたお客で長蛇の列。真夏
の強い日差しの中、あるいは真冬の酷寒の中、何人かの方が倒れ救急
車で病院に搬送されます。ケースによっては亡くられる方や、深刻
な後遺症を背負うことになる方もおられます。

様々な職種の方が目的地を目指して電車に乗っている訳ですから、
電車を止めたことによる影響は次第に世界中に広がってゆき、影響を
受ける人数はやがて無数です。

仮に電車を止めた時間が1分であったとしても、この影響を受ける
人数はやがて無数になるわけですから、失われた貴重な時間も膨大な
ものとなります。これが実相・反真理の世界です。

このように観ると、一瞬の中に世界中の人々にとって貴重な時間が
無限に存在しているのです。

(以下は気分を新たにしてお読みください。著者より)。

Dさんは、Eさんたちから「一瞬の中に無限の時間を入れる」とは
どう言うことなのかを教えてもらい、何となく理解でき掛かっていま
した。しかし、これらはあくまでもEさんたちの悟ったことを基に理
解しただけであるため、Dさんの血となり肉となるような悟りではあ
りませんでした。

そこで、Dさんも自分なりに悟ろうと決心し、心の修行を始めまし
た。

やがてDさんの心の中に悟りが芽生え始めてきました。Dさんは次
の①と②のように考えました。

- ① 地球が 1 秒を刻めば、地球上のすべての生命が 1 秒を刻む。つまり地球が刻む 1 秒は、 $1 \text{ 秒} \times \text{地球上の全生命} = \text{無限の時間}$ である。
- ② 宇宙に目を向ければ、この瞬間に、誕生している星もあれば盛年期を迎えている星もあり死んでゆく星もある。星の寿命は数十億年であるから、一瞬の中に無限の時間が存在していると言える。

しかしこれらはあくまでも「一瞬の中に無限の時間が存在している」ことを知っただけで、仏のヒントである「一瞬の中に無限の時間を入れる」こととは違うのではないかと D さんは考えました。つまり「一瞬の中に無限の時間を入れる」ことを悟る上で「一瞬の中に無限の時間が存在している」ことを知ることは必要であっても、これでは不十分であると思ったのです。



天女

Shutterstock_87151624

このように思い悩んでいたら、空から優しく微笑んだ天女が下りてきました。

D さんは天女に尋ねました。

D 天女さん。「一瞬の中に無限の時間を入れる」とはどういう意味なのですか？

すると天女は、微笑みながら衣で D さんの頬を優しく撫でて再び空へ舞い上がって行って、やがて姿が観えなくなっていました。

D さんはしばらくボーッとしていましたが、やがて笑いが込み上げてきました。

「一瞬の中に無限の時間を入れる」ことの意味を悟ったのです。悟って観れば当たり前のことなので、可笑し

くって笑いが止まらなかったのです。悟った内容は次のとおりです。

Dさんは天女に優しく頬を撫でられてとても心地良い気分を味わっていたのです。衣が頬に触れたのはほんの一瞬です。しかしDさんはこの心地良さの中で永遠に過ごしたいと思ったのです。このときDさんは悟りました。一瞬のでき事を捉える心の中に無限の時間が存在することを。

人はとても嬉しいでき事を一生忘れない思い出として執着してしまいます。同じように人はとても悲しいでき事や怒りや恨み^{うら}を一生忘れないでき事として執着してしまいます。これらはいずれも神仏の教えに反する反真理的行為です。それはなぜか？ 執着するこれらの思いは、どちらも心の自由を奪い、人を決して幸せにしないからです。

したがってとても嬉しい一生の思い出も、一生忘れられないほど怒りを覚えたでき事も、執着することなく一瞬の中に入れるべき、つまり忘れるべきなのです。

そして、生まれて1時間ほどの短い人生だった子どもの命の中に、無量寿^{むりょうじゅぶつ}仏（阿弥陀仏）の永遠^{いのち}の生命を生きた姿を観るべきなのです。なぜなら、お母さんのお腹^{なか}の中で、人類に至るまでの数十億年^{わた}に亘る進化の過程を過ごすからです。この子は数十億年と1時間を生きたのです。これが実相・真理の世界です。

この公案は「一瞬の中に無限の時間が存在している」ことを知るだけでは不十分なのです。「一瞬の中に無限の時間を入れる」ことが大切なのです。入れるとは実践することだったのです。

つまり「一瞬の中に無限の時間を入れる」とは、「日常の生活の中で時間を大切に使う生き方を実践することであり、有頂天になるようなでき事にも非常に悲しいでき事にも心を奪われることのないよう、常に心を整えられるよう実践すること」だったのです。

悟って観れば当たり前のことばかりなのです。仏はヒントを通して

実践することの大切さを教えていたのです。

Dさんは「第13章 1 仏との対話」を読んだときに、公案を解いたAさんがどうして公案を出したBさんのところへ行って「解けました」と、コップに太平洋の水を1滴落として見せなかったのかと言うことと、阿字ヶ浦海岸に立ったAさんは、どうしてコップではなく掌に太平洋の1滴の水を落としたのかがわかりませんでした。

しかし「一瞬の中に無限の時間を入れる」ことの意味を知った今、この疑問が解けたのです。「コップに太平洋のすべての水を注ぎ入れる」の「入れる」も実践することを意味していたのです。ですから、この公案は（すべての公案にも言えることですが）1滴の水の中に太平洋のすべての水の要素が含まれていることを知るだけでは不十分で、日常生活の中でこのように視野を広げて観る実践を行って初めて「注ぎ入れた」ことになるのです。

ですから、もしAさんがBさんのところへ行って「解けました」と、コップに太平洋の水を1滴入れて見せた時点で、Aさんは、この公案の最も大切な部分である「注ぎ入れるとは実践することである」ことを理解していないことになりますので、これでは公案を、100点満点中50点しか解けていないのです。この公案は、日常生活の中で実践する姿を通して、Bさんに解答するべきであることをAさんは知っていたのです。ですから、AさんはBさんのところへ行って「解けました」と言わなかったのです。

それにAさんは、どうしてコップではなく掌に太平洋の1滴の水を落としたのか？

この公案は実践することが大切であることがわかれば、コップはなくとも良いことになります。

掌は地上世界、つまり現世を表しているのです。^{てのひら}掌を目の高さまで掲げて行ったと言うことは、この現世で実践して心（=^{たなごころ}掌）を向

上させてゆくことを表していたのです。

そのような実践を経て、やがて本当に 1 滴の水の中に太平洋が輝いて映^{うつ}るのだと、A さんは言いたかったのだと言うことを D さんは知ったのです。

第 14 章

仏は衆生を救いたいとの思いで法を説く

1 ^{じゅう に ぶん} 十二分

J さんには救いたい人がいます。その人の名前は K さんと言います。K さんは 30 年ほど前に同じ小学校で学んだ同級生です。小学校時代の K さんはビートルズの音楽を好み、田舎の学校では一際目立つほど都会的な^{ふうぼう}風貌でとても明るく J さんにとっては頼もしいお兄さんのような存在でした。

ところが K さんの真面目さが災いしたのか、実家のお寺を継ぐためにお坊さんになるための修行を始めた頃からノイローゼになり、今では家に閉じ籠^{こも}りがちになってしまいました。

人に会っても「仏教とはね」と言う話題ばかりを繰り返すために周囲の人にも K さんから遠ざかってゆき、K さんも更に自分の殻に閉じ籠^{こも}ってゆく悪循環でした。

J さんは K さんが小学校時代の明るかった頃に戻ってくれることを願い、仏に救いを求めました。強く念じてから 1 年が経過しました。仏が J さんの前に現れ次のように語り掛けてきました。

仏 J さん。どうしたのですか？

J K さんを救いたいのです。でもどうやったら救えるのかわからないのです。仏さん。どうか K さんを救える知恵を私に授けてください。

仏 わかりました。それでは、ノイローゼで苦しむ K さんを救う方法を説いて差しあげます。

J よろしくお願いします。

仏 J さん。まず K さんの味方になって差しあげることです。K さんは自分の姿を知っているのです。最も苦しんでいるのは K さん自身で

あることをあなたが理解してあげることがとても大切です。このことを心に留め置きながら優しく彼に接することです。彼が語ろうとする「仏教とはね」ということについても、優しい心で聞いてあげることです。

J Kさんは禅の修行を10年間続けてきた方です。一方私には仏教に関する知識が全くと言って良いほどありません。こんな私でもKさんの話を理解できるのでしょうか？

仏 仏教とは仏の教えです。仏の教えは実は誰にでも理解できるほど簡単なものです。

J そんな簡単なものであれば、Kさんが10年間修行する必要も頭を悩ますこともなかったのではないですか？

仏 その通りです。JさんはKさんを救うための答えを今自分で語っているようなものです。

J え！ 仏さん。私には良くわかりません。どうかわかるように話してください。

仏 そうですか。では、Kさんと仏教について対等に話すことができるよう、まず「仏教とは？」という質問に関して学んでゆきましょう。

僧侶であれば誰でも知っている、次のような有名な話があります。当然彼も知っている筈です。

＊

木の枝の上で坐禅をすることから鳥の巢^{ぜんじ}禅師と呼ばれている僧侶がいました。詩人で政治家としても知られる白^{はくらくてん}樂天が、その僧侶に「仏教とはどんな教えですか？」と問います。これに対して鳥の巢^{ぜんじ}禅師は次のように答えます。「諸々の悪いことをなさず、良い行いをする。そうすることによって心は浄められてゆく。これが仏の教えです」と。

すると、白樂天は「そんなことなら、3歳の子どもでも知っているよ」と言います。

これに対して鳥の巣禅師は次のように答えます。「3歳の子どもでも知っていることであっても、実践するのは人生経験を積んだ80歳の老人でも難しいことなのです」と。

＊

Jさん。仏教とはこの物語に説かれているとおりのことです。「悪いことをしない。良いことを行う」ことなのです。大切なのは実践することなのです。そしてどんな高僧であっても、これ以上に仏教を端的に表現できないのです。このことを知っていれば十分 Kさんと仏教について語り合うことができる筈です。

J 仏さん。何となーく、私でも Kさんの話し相手になれそうな気がしてきました。でも、話し相手になっていれば彼のノイローゼが治るのですか？

仏 これだけでも症状はかなり改善すると思います。しかし Kさんを救うにはもう一步踏み込んだ、知恵と慈悲心が必要です。それをこれから説明します。

J 仏さん。よろしくお願いします。



和食（日本の朝食の一例）

shutterstock_1189667986

仏 あなたのためにここに朝食を用意しました。ご飯と味噌汁と焼き魚と卵焼きと納豆とお新香などです。これらはすべてあなたの大好きな物ばかりです。これ

を全部食べてください。私は明日またあなたの前に姿を現します。そこで Kさん

を救う知恵を授けます。

翌日になって仏は再び J さんの前に姿を現しました。

J 仏さんから頂いた食事をありがたく頂きました。

仏 J さん。食べた物はすべてあなたの血となり肉となったと思いますか？

J 感謝しながら残さず頂きましたので、すべて私の血となり肉となったと思います。

仏 そうですか。それでは、ここで息を吸ってください。もう一度、大自然に感謝しながら息を吸ってください。更にもう一度、大自然に感謝しながら息を吸ってください。どうですか？ 吸った空気はすべてあなたの体で利用されましたか？

J 仏さん。吸った空気と同じくらい、息を吐き出してしまいます。

仏 そうです。空気の中に含まれている約 2 割の酸素を利用しているだけです。^{きのう}昨日食べた朝食もこれと同じです。一見するとすべてが血となり肉となりそうな、ご飯や味噌汁や焼き魚や卵焼きや納豆やお新香であっても、人はこの中の 2 割程度しか利用できないのです。後は利用できずに便や尿やオナラとなっているのです。

あなたたちが良く聞いた音楽も同じです。強く心に響く音は 2 割程度です。これがメロディーとなって響くのです。後は心・耳に響かないほど非常に弱い音、あるいは音として感じるができない部分です。これらが実相・真理の世界です。

釈尊が説いた 84,000 もの教典も、イエスが説いた教えも、どれもが素晴らしいためにすべての教えが読んだ人の血となり肉となると思います。勿論、^{もちろん}教えのどの箇所を取っても必ず誰かの役に立っていますから、どの教典も誰かしらの血となり肉となっていると言えます。

しかし、1 人が活用できるのはこの中の 2 割程度なのです。残りの

8割は活用できないのです。それはなぜか？ これらはあくまでも釈尊やイエスの悟りであるからです。つまり K さんや J さんの悟りではないのです。もし活用できると主張される方がおられたら、その方は、自分は釈尊やイエスと同等の悟りを得ていると言っているようなもので慢心です。

K さんがノイローゼになったのは、釈尊の教えのすべてを吸収し釈尊と同等になろうとしたからです。釈尊の十大弟子の中に「多聞第一」と呼ばれた阿難^{あなん}がいます。阿難は 25 年間釈尊の身の回りの世話をしながら仕え、釈尊の入滅^{にゅうめつ}にも立ち会った人で、他の誰よりも釈尊の説法を聞いた人です。しかし、釈尊の説法をたくさん聞き過ぎたが故に、他の仏弟子たちがすでに悟りの境地に到達していたと言うのに、阿難は釈尊が入滅したときにはまだ悟りの境地には到達していなかったのです。阿難は、釈尊の説法を次から次へと聞いているうちは悟れなかったのです。物事には上限があるのです。

皮肉なことに、釈尊が入滅して説法を聞くことができなくなってから阿難は悟ったのです。何事もほどほどが良いのです。

J さん。十大弟子の阿難でさえ、釈尊の教えをすべて吸収しようとしてもできなかったのです。かえってすべて吸収しようとしたが故に悟れなかったのです。仏弟子の阿難自身が、事例を示して教えてくれているのです。

吸った空気をすべて利用しようとして吐き出さなければ、やがて胸が破裂してしまいます。食べた物をすべて利用しようとして便や尿やオナラを出し惜^おしんでしまつては、やがてお腹^{なか}や膀胱^{ぼうこう}やお尻が破裂してしまいます。釈尊の教えをすべて利用しようとして、自分では利用できない教えを吐き出すことをしなければ、頭が破裂してノイローゼになってしまうのは当然です。

釈尊はあくまでも釈尊なのです。イエスはあくまでもイエスなので

す。そして K さんはあくまでも K さんであれば良いのです。釈尊やイエスになる必要はないし、又、なれないのです。

鳥の巣禅師から仏教のなんたるかを学んだ白樂天は大自然を師として学びます。やがて次のように悟るのです。「柳は^{みどり}緑。花は^{くれない}紅」と。

ありのままで、自然の姿のままで調和していることを悟るのです。柳は紅になろうと努力してはいないのです。つまり花になろうとはしていないし、又、なれないのです。柳はあくまでも柳の姿でしっかり生きてゆけば良いのです。

花も柳になろうとはしていません。花はあくまでも花の姿で尊いからです。

K さんは世界中で唯一人です。ありのままで尊いのです。大自然が法・真理を説いているのですから。

J さん。K さんには次のように伝えてください。「人は教えを^{じゅうに}十二聞いた^にら、そのうちの二を理解すればそれで十二分です。なぜなら、1 人が 1 つの事柄であっても完全に吸収することはできないからです。

完全を表す 10 割の割と言う文字の大部分は害の文字から構成されているのです。大部分は害、つまり利用できないのです。利用できるのは右側の 12 分の 2 割程度ですよと、割と言う文字が法・真理を説いているのです」と。

大自然や文字が説くこれらの実相・真理の世界を K さん自身が納得する形で悟ったとき、ノイローゼの長い苦しみから徐々に解放されてゆきます。

J 仏さん。最後に 1 つ質問しても良いですか？

仏 良いですよ。

J 空気中の酸素の存在比を 2 割としたのは仏さんですか？

仏 違います。創造主です。

2 仏の説法

L さんと M さんの会話です。

L 「第 14 章 1 十二分」のところで、仏は「人は教えを十二聞いた
ら、そのうちの二を理解すればそれで十二分なのです」とおっしゃっ
ていますが、これが誰にでも当て嵌^はまる真理とはとても思えないので
す。M さんはどう思いますか？

M L さん。この言葉は何事にも一生懸命学び取ろうとしてノイロー
ゼになってしまった真面目な K さんを救うために話された言葉です。
仏の慈悲^{じ ひ}による方便^{ほうべん}です。この言葉自体は真理の一側面に過ぎません。
K さんを救おうとした仏の働き・摂理が永遠の真理です。

ですから、仏は怠^{なま}け心のある人に対しては「一を聞いて十を知るよ
うになるまで努力しなさい」と叱責^{しっせき}するのではないかと思います。

L そうですね。仏は人の気根^{きこん}に応じて法を説き分けるのですよね。
でも、いろいろな説法を聞くと、かえって、私たちは仏が何を言いた
いのかわからなくなってしまうそうです。まるで釈尊の教えを聞き過
ぎた阿難のように。

M 私は最近思うのです。仏が何を説こうとしているのかを知ろうと
することは、さほど重要ではないのではないかと。なぜならそれを知
ろうとして説法をたくさん聞けば聞くほど相反するような説法に出合
うのです。これでは私たちも先ほどの K さんと同じようにノイローゼ
になってしまい兼ねないと。

大切なのは「どうして仏は法を説くのかを知ること」ではないかと
思うのです。これがわかれば仏が何を説こうとしているのかも自^{おの}ずと
観えてくるのではないのでしょうか？

L 私にもわかるように詳しく説明して頂けますか？

M アインシュタインは、

L ちょっと待ってください。いきなりアインシュタインですか？

できるだけ簡単をお願いしたいのですが。

M わかりました。できるだけ簡単に説明します。でも、理解して頂くためにはここから始めないとならないと思うのです。

L そうですか。それでは **M** さんに一切お任せします。

M アインシュタインは、この宇宙で起こる現象は、すべてある法則に基づいていると考えていました。そしてこの法則を表すことのできる究極の物理方程式が存在し、この方程式は非常に単純でかつ美しいもので、この中にこそ神が存在すると信じていたのです。この方程式を探し出すことが彼のライフワークだったわけです。

彼はすべての場^ばに存在する現象、あるいは法則を 1 つの方程式に統一しようと試みたのですが、残念ながら成し遂^とげる前に亡くなってしまったのです。

しかし彼は、独創的な思考実験を繰り返しながら特殊相対性理論や一般相対性理論^{ていしょう}を提唱し、これらから、時間と空間は切り離すことのできないもので、かつ物質が存在する周囲の空間は歪^{ゆが}むことを導き出したのです。

つまり「 $R_{ij} - (1/2)g_{ij}R = -KT_{ij}$ 」と言うアインシュタイン方程式です。この方程式によって、宇宙に存在する数多くの現象を説明できるようになったのです。

そしてこの方程式を解くと宇宙が膨張していることや、既存の方程式と組み合わせて計算すると、宇宙の起源は今から 138 億年前であることがわかるのです。ところがここに大きな問題が生じてしまうのです。

L どんな問題ですか？

M 宇宙は膨張しているわけですから、138 億年前の宇宙は非常に小さな一点から始まったことになります。この時、物質の質量は 0 となり、一方エネルギーは無限大となってしまうのです。つまり何も無い

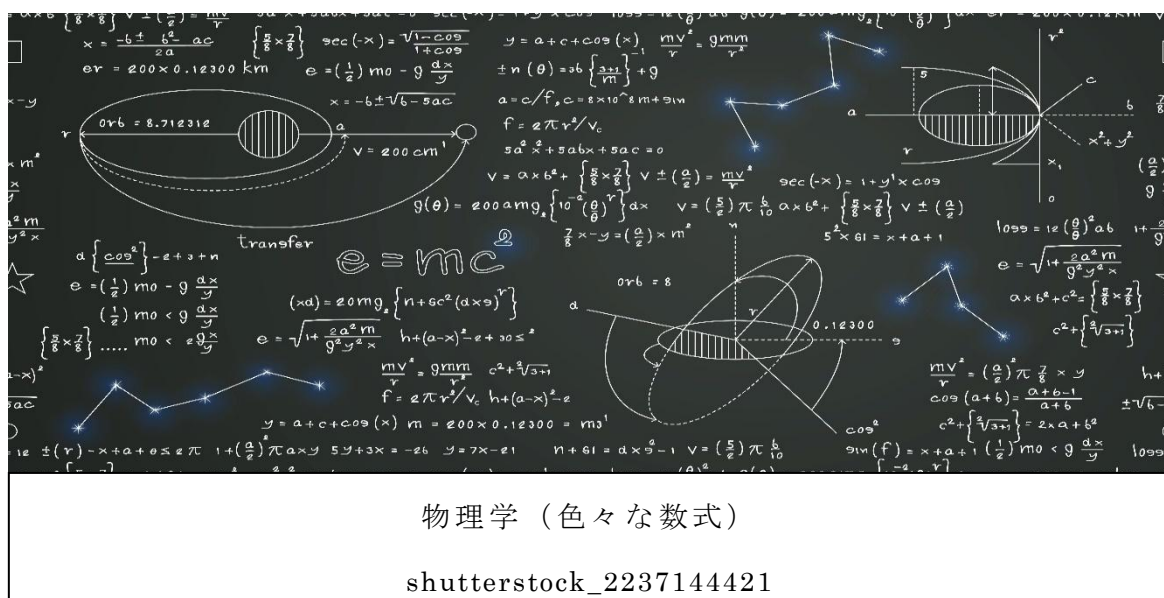
ところに無限大のエネルギーが存在することになり、アインシュタイン自身が導き出した、物質・質量＝エネルギーであると言う「 $E=mc^2$ 」の方程式と矛盾し、ここでは物理方程式が破綻してしま^{はたん}うのです。

これが物理学者を悩ませている「特異点の問題」と言われているものです。

L 段々面白くなってきましたね。

M 私は、物理学は素人ですから「特異点の問題」を解くことはできませんが、この問題の中に神仏が介在しているような気がしてならないのです。

L どう言うことですか？



M 物理法則では物体が右から左に動くとき、これを動かす力が必ず働かなければならないのです。つまり、右から押す力か、あるいは左から引っ張る力が働いたことになるのです。でも物理法則で説明できない運動もあると思うのです。

L たとえばどんなときですか？

M 綺麗なお姉さんが荷物を持ってないで困っていました。その右側にちからもちの N さんがいて、これを観ていたとします。気の毒に思った N

さんはお姉さんの方へ近づき、代わりに持ってあげたとします。この N さんの動きを説明できる物理法則はないのです。

なぜなら N さんを押した右からの力も、引っ張った左からの力も存在しないからです。

N さんを動かしたエネルギーは何か？ それは N さん自身の心・感情です。つまり ^{ほとけごころ} 仏心 と言う愛（または恋愛感情）が動かしたのです。

このような感情、つまり愛が作り出すエネルギーは、どんなに物理方程式を ^{くし} 駆使しても表現できないのです。

私は、この宇宙に存在する全エネルギーは、物質の持つエネルギーと仏心のような愛が作り出しているエネルギーの総和ではないかと思うのです。しかも、物質の持つ総エネルギー（ ΣmC^2 ）は宇宙に存在するエネルギーのほんの一部で、^{あたたか} 恰も 5 円玉を立てて上から見た狭い領域に相当する程度で、大部分は神仏の愛が作り出しているエネルギーではないかと思うのです。

したがって、物質が存在しない特異点であっても神仏の愛が作り出している膨大なエネルギーが存在することと、神仏の愛は最も貧しいもの・弱々しいもの・小さいものへ注がれますから、物質（重量）が 0 に近づけば近づくほど神仏が注ぐ愛のエネルギーは無限に大きくなってくると思うのです。

L なるほど。何も無いところに無限大のエネルギーが存在することになる宇宙の始まりの「特異点の問題」も説明できるわけですね。でも、このことが「どうして仏は法を説くのかを知ること」と結び付いてくるのですか？

M 気圧の高いところから低いところへ風が流れ気圧を一定にしようとする愛が働くように、私は宇宙が始まった・生まれたときから、このような愛が満ちていたのではないかと思うのです。この愛の働き・作用が神仏であり、宇宙の法則であり、真理であると思うのです。

ですから「どうして仏は法を説くのか？」と言う問いの答えは「仏は人間も動物も植物も山も川もすべてのものを漏らさず救いたいため」^もと思うのです。このように理解すると、仏が何を説こうとしているのかも自然に観えてくるのです。

L 具体的な事例で説明して頂けませんか？

M 仏の説法の中に「中道」「空」^{くう}「無常」の教えがあり、これらについて「虹の掛け橋」の中で神仏の目線・愛の働きで、次のように解説されています。

「中道」は、自信のないときには「自分はすでに 5 円玉を正面から大きく捉えている」と^{はげ}励まし、自信過剰のときは「自分は未だ 5 円玉を立てて上から^{のぞ}覗いた狭い世界しか知らないのだ」と^{いまし}戒め、自身で心を整え生活のリズムを^{つか}掴みなさいと教えているのです。

「空」は、非常に悲しみ落ち込んだとき「そのような思いは空であり実体は存在しないものであるから、この悲しみに^{なが}永く捕らわれてはならない」と励まし、有頂天になって踊り出しているとき「そのような現象の実相は空であり実体は存在しないものであるから、有頂天になっていつまでも踊っていると足を踏み外して^{けが}怪我をするよ」と戒め、自身で心を整え生活のリズムを掴みなさいと教えているのです。

「無常」は、とても大きな不幸や苦しみに出会ったとき「この苦しみも必ずいつかは終わるときがくるからもう少しの辛抱です」と励まし、とても愉快的な出来事に出合ったとき「この楽しさも必ずいつかは終わるときがくるから、そうなったときに困ることがないように努力することを怠ってはならない」と戒め、自身で心を整え生活のリズムを掴みなさいと教えているのです。

このようにこれらの神仏の愛の働き（励ましと戒め）を観ると、衆生を救いたいとの思いで仏は法を説き、その教えは「落ち込んでいるときには励まし、有頂天になっているときには戒め、自身で心を整え

生活のリズムを掴みなさい」と教えているのです。だから仏の教えは、元を辿ればこの一点に繋がっていると言えるのではないかと思います。

3 右手と左手

Q さんと私の会話です。

Q 仏教では右手が仏で左手が衆生であると言われています。同様にイスラム教、ヒンズー教、ユダヤ教でも右手は清浄で左手は不浄であるとされています。多くの宗教が右手と左手を差別しているのです。宗教や国によっては、左手で人に物を渡したり、握手を求めたりするのは相手を侮辱^{ぶじよく}したことになり喧嘩^{けんか}になり兼ねないほどです。

神仏はすべて平等に観ているのではないかと思うのですが、神仏の教えを説く宗教が右手と左手を差別して良いのでしょうか？

私 迷信に捕らわれたとても悲しむべき行為で、かつ社会の平和と調和と秩序を滅茶苦茶に破壊する反真理的行為です。神仏は右手と左手を差別していません。なぜなら「右も左も五画で互角です」と神仏が法を説いているからです。Qさんもし私に握手を求めるならば、当分の間、両手又は左手を差し出してください。私は両手で握手を返します。右手のみを出された場合は申し訳ありませんが、平和と調和と秩序を守るために当分の間握手は拒否する可能性がありますのでご理解ください。

Q わかりました。では「第12章 3 表紙の図柄^{ずがら}」のところで「仏は右手を斜めに上げ、左手を斜めに下げています。右手には実った稲穂が握られています。その稲穂の先から虹が、左の掌へ向かって下りています。

仏の左の掌は地上世界を表します。人々がこの虹を地上世界から稲穂のある上方へ向かって登ってゆきます」と書かれています。

これは、右手が仏で左手が衆生であると見て差別していることと同じなのではないでしょうか？

私 最初にこの図柄を思い描いたとき、稲穂を握る手が右でも左でもどちらでも良かったのです。

Q ではなぜこのような構図に決めたのですか？

私 「右」と「左」の文字の違いは「右」には口^{くち}があり「左」にはエ^{こう}があることです。エは二（川）の向こうの彼岸（悟りの世界）へ橋渡しをしている光景を思い浮かべることができます。また、エの下^この線は大地（地上世界）を表し、上の線は天（悟りの世界）を表し、「^{こん}」はそれを繋ぐ虹を表していると観ることもできます。構図で虹に触れているのは^{てのひらがわ}掌側ですから、左手を、地上世界を表す掌としたのです。

Q なるほど。右手に稲穂を握らせた理由もあるのですか？

私 稲は種^{なえ}から苗、そして成長して花を咲かせ実を結んでゆきます。頭が垂れるほど実って初めて口に入れることができますから、稲穂を握る手は右手である方が構図に^{かな}適っていると感じたのです。

Q うーん。笑い話のようですが、そうでしたか。

私 て、言うよりも「第4巻」まで読んでくだされば理解 and 納得して頂けると思っているのですが「第12章 3 表紙の図柄」などの構想を基に、愛と知恵と勇気と希望の善想念で「右」「左」「口」「エ」の文字が創られたのです。

Q へーえ。……。誰によって？

私 そうぞ……。今は、これ以上は言えません。

Q えーえ！

第 15 章

許し合って仲良く天国に入る

1 ほんの一部

R さんはホットミルクティーを飲みながら「虹の掛け橋」を読んでいます。「第 13 章 1 仏との対話」のところで「1 滴の（海）水の中に太平洋のすべての水の要素が含まれていることを知り、このような広い視野で物事を観ることが大切です」と書かれていました。

確かに 1 滴の水を調べれば、太平洋の海水中のイオン成分や化学物質の濃度がわかります。また、1 滴の水の中に数多くのバクテリアや植物プランクトンや動物プランクトンが生息し、食物連鎖の生態系を形成している様子も観察できます。1 滴の水の中に、水が持っている水素結合やこれが^{もたら}す表面張力を観ることもできます。

そして現に私たちは「1 滴の水から太平洋全体を観る」と同じことを、実生活・社会の中で応用しています。たとえば次の①と②のように。

① 入試では、太平洋ほどの広さのある英語の問題のほんの 1 滴ほどに相当する数十問のテストで、受験生の英語力全体を観ています。

② 入社試験の面接では、太平洋のほんの 1 滴ほどにしか相当しない 10 分程度の^やり取りで、その人の全体像（知識・思想・^{ひとがら}人柄・家庭環境など）を観ています。

しかし、R さんは『「1 滴の水から太平洋全体を観る」ことは真理を一方向からしか捉えていない。これでは不十分である』と直観しました。が、どこが不十分なのか、このときはわかりませんでした。

1 週間ほど経過して、R さんが何気なくテレビを^つ点けたら、1999 年

のカンヌ国際広告祭で S 国の T 航空会社が作成した「JAPANESE (日本人)」と言う CM が、日本人を侮辱^{ぶじょく}した内容の作品であるにも拘^{かかわ}らず金賞を受賞し、大変論争になっていると言うニュースが流れていました。CM の問題の部分とは次のようなものでした。

『S 国の飛行機の中でキャビンアテンダントから機内食を受け取った日本人男性乗客が、この中のサンドイッチをお絞^{しぼ}りとお勘違いしてしまい、これを広げて顔を拭いてしまいます。このため、サンドイッチの中に塗られていたピーナツバターがベツトリと顔に付いてしまい、これを見ていた周りの S 国乗客から笑われてしまいます。』

しばらくして、キャビンアテンダントはお絞^{しぼ}りを配り始めます。やがて、この日本人乗客のところへ訪れ、(本物の) お絞^{しぼ}りを渡そうとしますが、彼はこれをサンドイッチとお勘違いしてしまいます。先ほどサンドイッチで懲^こりたこともあって、彼は「お腹が一杯だから結構です」とジェスチャーをしながら断ってしまいます。それで、これを見ていた周りの S 国乗客から、再度笑われてしまいました。』

このニュースを読み上げていた日本人アナウンサーも不愉快そうに「このような下品で愚かな CM のどこが素晴らしいのか全くわからない」と言っていました。

R さんはこのニュースを観たとき「1 滴の水から太平洋全体を観る」ことの危険性・不十分さを悟ったのです。

1 人の無垢^{むく}で善良な日本人の失敗を日本国民全体の姿としてユーモラスに表現し笑ったり、S 国民の優位性を強調したり、このような CM に国際的な賞を与えたりすることは非常に嘆^{なげ}かわしく、かつ世界の平和と調和と秩序を滅茶苦茶に破壊する反真理的行為です。おそらく、この作品を制作した T 社も、これを見て笑った S 国民も、この作品を評価した審査員も皆お馬鹿さんであるが故に、自分たちが何をしているのかわからないのです。

人の失敗を笑えばやがて彼らが失敗したとき世界中から笑われると言うことと、人の失敗を笑うこのような、お馬鹿な行為こそが地獄（戦争・いじめ・差別）を作り出していることを知らないのです。

しかし Rさんは、この CM から多くのことを学び取ることができました。

もし日本人 1 人ひとりが「1 滴の水から太平洋全体を見る」捉え方でこの CM の関係者を見るとどうなるのでしょうか？

まず、このような下品でお馬鹿な CM を制作した T 社の社員全員の良識を疑ってしまいます。そして、下品でお馬鹿な映像を見て笑うような S 国民全員の良識を疑ってしまうでしょう。更に、下品でお馬鹿な作品を高く評価する審査員全員の良識を疑ってしまうことになります。

このような見方は、疑いから次第に怒りや憎しみを生み出しますから、非常に不幸なことです。したがってこのような見方もまた地獄の世界を作り出すお馬鹿な反真理的行為なのです。

もし日本人 1 人ひとりが「1 滴の水はあくまでも 1 滴の水で、太平洋全体を表すものではない」捉え方で CM の関係者を観るとどうなるでしょう？

まず「このような CM を制作したお馬鹿な社員はあくまでも T 社のほんの一部の社員で、大部分は良識を持った社員である」と受け取ります。そして「この CM を見て笑った人はあくまでも S 国民のほんの一部のお馬鹿な人で、大部分は良識を持った人たちである」と受け取ります。更に「この作品を高く評価したのは決定権を持ったお馬鹿な審査員長 1 人のみで、あとは受賞に反対した良識を持った審査員たちである」と受け取るようになります。

このように受け取ることが、世界中に平和を齎すのです。なぜなら、すべての日本人がこのように受け取ったとき、やがて T 社の社員も S

国民も審査員も皆「サンドイッチとお絞りを間違えるのは空想の世界の話で、この姿は日本人全体の姿ではない」と必ず観てくれるようになるからです。これが天国の光景に繋がる真理的行為なのです。

Rさんはこのように「1滴の水から太平洋全体を観る」ことは真理の一側面を表現している言葉ではあるが、時と場合によっては「1滴の水はあくまでも1滴の水で、太平洋全体を表すものではない」捉え方で物事を観ることも必要であることを悟ったのです。

そして、神仏の目をもってこれらを正しく使い分けることが最も大切なのです。

たとえば、1人の教師が罪を犯してしまったとします。これに対して、学校側は「罪を犯した教師個人の問題だから彼自身が罪を償えば良い。なぜなら他は善良な教師ばかりだから学校全体が問題になることはない」と「1滴の水はあくまでも1滴の水で、太平洋全体を表すものではない」と考え、一方父兄側は「罪を犯したのは1人の教師でも罪を犯す環境は学校全体に広がっている」と「1滴の水から太平洋全体を見る」と考えるのは、お互いに決して幸せな結果を招かない反真理的行為です。

このような場合むしろ、学校側は「罪を犯したのは1人の教師でも彼個人の問題として済ませるわけにはゆかない。彼が罪を犯す原因が学校側になかったか、或いは彼と同じような罪を犯す下地が他の教師にまで広がっていないか調査しなければいけない」と「1滴の水から太平洋全体を観る」と考え、一方父兄側は「罪を犯したのは1人の教師で、他は善良な教師ばかりだから学校側を信じてこれまでと同様、子どもを任せよう」と「1滴の水はあくまでも1滴の水で、太平洋全体を表すものではない」と考えた方が、お互いに幸せな結果を招く真理的行為です。

更に、学校側も父兄側も共に「罪を犯した彼は日頃は真面目な教師

だった。彼の心の大部分は善良な心で、罪を犯したのはきっと彼の心の一部に入り込んだほんのお馬鹿な出来心^{できごころ}に違いない。だから罪を犯した彼は本来の姿ではない。彼が罪を償い人生をやり直そうとしたとき、全面的に（全力で）支えてあげよう」と「1滴の水はあくまでも1滴の水で、太平洋全体を表すものではない」と考えたとき、このような人たちが集まる学校や社会が天国・真理の光輝に包まれた世界となるのです。

2 法華經^{ほけきょう}

U さんたちが「法華經は何を説いているのか？」について話し合っています。その光景を覗^{のぞ}いて観ましょう。

U V さん。法華經は何を説いていると思いますか？

V 諸法^{しよほう}の実相について説いていると思います。つまり仏の目をもって観るならば、この世の中のすべての物事や現象の真実の姿は、そのままの姿で尊いもので、かつ平等で自然界の中で互いに調和しながら存在していることを説いていると思います。

U W さんはどう思いますか？

W 諸法は無我^{むが}であると説いていると思います。つまりこの世の中のすべての物事は孤立^{こりつ}して存在するものではなく、互いに支え合い、そして影響し合いながら社会や自然界を作りあげていると説いていると思います。

U X さんはどう思いますか？

X 諸行^{しよぎょう}は無常であると説いていると思います。つまりすべての物事は止まることなく自然界の中でより調和のとれた姿になろうとして流れて・変化していると説いていると思います。

U Y さんはどう思いますか？

Y 私にはわからないのです。

U え！ あなたほど修行され、教典も読まれている方が、わからないと答えられるのは意外です。

Y 法華經を学ば学ばほどわからなくなったのです。

U どう言うことですか？

Y 法華經は「法華經」と言うとても深遠な真理が説かれた教典があって、これを保ち、その教えを実践したり、書写したり、人に説いたりしたならば、様々な神仏に守られ、素晴らしい功德が頂けると説く、不思議な構成をしている教典です。

それで単に「〇〇仏は△△^{しょうこう}小劫もの間、法華經を説いた」と書かれているのみで、これらの仏が説いた「法華經」の中身については最後まで語られていないのです。

U なるほど。そう言われればそうですね。面白い話ですね。ところでZさんはどう思いますか？

Z Yさんがおっしゃるとおり、法華經の中では何人もの仏や仙人^{せんニン}がいろいろな場面で「法華經を説いた」と書かれていますが「法華經」の中身については語られていませんね。

私は、これは「法華經」の中身については文字に書き表すことができないからだと思います。

U どう言うことですか？

Z 法華經の正式名称は「^{みょうほうれんげきょう}妙法蓮華經」です。妙法が説かれていると言うことです。

たとえば、小学校の入学式のときに校長先生が、これからの学校生活の心構えや、在校生が新入生にどのように接したら良いのかなどの話を通して、新入生や父兄の方々の不安を取り払い、楽しい学校生活を思い描かせることができたならば、校長先生は時に即した妙法である法華經を説いたと言えます。

また、先輩が後輩のため、あるいは妻が夫のために、適切な忠告をしている姿も法華経を説いていると観ることができます。

このように、時と場所あるいは聞いている人たちの^{きこん}氣根に即して説かれた妙法はすべて法華経であると解釈すべきです。ですから、法華経の真髓を語るバリエーションの無限性を保つために、釈尊は「具体的個別事例を引き合いに語ることは適当でない」と判断したのではないかと思います。

「法華経は何を説いているのか？」と言う U さんたちの話が一段落したところで、この一部始終を天上界から観ていた菩薩が^お下りてきて言いました。

菩薩 皆さんは「群^{ぐん}盲^{もう}索^{さく}象^{ぞう}」と言うたとえ話を知っていますか？

U さんたち 知りません。どんな話が教えてください。

菩薩 群盲とは目の見えない人たちの集まりで、ここでは心の目が開いていない人たちのことです。索象とは象を^な撫でながら調べることです。

本当かなーと疑ってしまい兼ねない話ですが、ある日、釈尊は象がどんな姿をした動物なのか全く知らない4人の弟子に^{めかく}目隠しをさせ、象の周りに立たせました。4人は目の前の象の体に触れて象がどんな姿をした動物なのか釈尊に報告します。

足を触った弟子は「象は太い木のようなものだ」と。耳を触った弟子は「象は薄い^{うちわ}団扇のようなものだ」と。腹を触った弟子は「象は大きな壁のようなものだ」と。^{しっぽ}尻尾を触った弟子は「象は細い^{むち}鞭のようなものだ」と。

4人の弟子の報告は部分的にはどれも間違っているとは言えませんが、象の姿を正しく語っているとはとても言えません。このたとえ話

は「一部分を見て理解しただけでは全体像を捉えることができない」ことを教えているのです。

「法華経は何を説いているのか？」と言う皆さんの話も、このたとえ話と同じなのです。皆さんの意見は部分的にはどれも間違っているとは言えませんが、残念ながら法華経の全体像を正しく語っているとは言えないのです。

U それでは菩薩さん。法華経は何を説いているのですか？

菩薩 法華経は、朝「おはようございます」と挨拶^{あいさつ}しなさいと言うことと「履物^{はきもの}を揃^{そろ}えなさい」と教えて・説いているのです。

菩薩のこの言葉を聞いて V～Z さんは「法華経は何を説いているのか」を悟ったようですが、U さんだけは、何のことやらさっぱり分からないようでした。

そこで U さんは菩薩に尋ねました。

U 私は法華経を隅から隅まで読んでいますが、そんな文言はどこにも書かれていませんよ。

菩薩 確かに書かれていません。しかし法華経はこのことを説いているのです。U さん。このことを理解するために禅の道場でしばらく修行してみませんか？

U わかりました。菩薩さんにお任せします。

菩薩 私の知っている禅の高僧（老師）にあなたを預けますから「禅とは何か」を知ること为目标に修行してください。これがわかれば「法華経は何を説いているのか」も同時にわかります。

U それではよろしくお願いします。

U さんが禅の高僧の元で修行を始めてから 3 年が経過しました。U さんは自分の中では「禅とは何か」がわかり掛けてきたと感じていま

した。つまり「禅とは、喜びや怒りを感じたときなどの高ぶった心を座らせるものであり、また、悲しみに喘^{あえ}いでいるときなどの沈んだ心を奮^{ふる}い立たせるものである」と。

Uさんはこの答えが正しいのかを伺おうと老師の部屋を訪ねました。すると部屋の中から声が聞こえてきました。どうやら先客がいるようでしたので、Uさんは先客が出てくるのを廊下^{ろうか}に座って待つことにしました。声から先客は兄弟子のAさんであることがわかりました。老師とAさんの会話がはっきりとUさんの耳に入ってきました。

A 私は老師の元で修行を始めて5年が経過いたします。しかし、これまで老師は私に一度も法を説いてはくさいませんでした。私はあと半年で故郷に帰って寺を継がなければなりません。どうかお願いします。禅の奥義^{おうぎ}を説いてください。

老師 私があなたに法を説かなかった日がありますか？ そんな日はないのです。

食事を運んでくれたときは「ありがとう」と言ったではありませんか。

外から帰ってきたときは「ただいま」と言ったではありませんか。

掃除をしてくれたときは「お疲れ様」と言ったではありませんか。

草が伸びたならば刈^かったではありませんか。

窓が汚れたならば磨いたではありませんか。

腹が減れば食べ、喉^{のど}が渴^{かわ}けば水を飲み、疲れたならば休み、可笑^{おか}しければ笑い、悲しければ泣き、自然を愛^めで、詩^{うた}を好み、友と語り、礼節^{れいせつ}を弁^{わきま}え、風のように吹き、雲のように散り（集まり）、水のように流れたではないですか。

すでに禅の奥義をすべてあなたに説いたつもりです。

老師の言葉を聞いたAさんも廊下で聞いていたUさんも「禅とは何

か」を悟ったのです。2人は流れる涙を止めることができませんでした。

老師の言葉には、次の①～⑥のことが説かれているのです。

① 大自然と一体となつてあるまゝに受け取り、運び、流し、そして物事が調和するように実践しなさいということから、諸法の実相について説かれているのです。

② 食事を運んでくれる人がいることや、出迎えてくれる人や、掃除をしてくれる人がおり、この世は助け合つて生きる場であることから、諸法は無我であることが説かれているのです。

③ 草が伸びれば刈る、窓が汚れたら磨くということから、諸行は無常で、物事は調和しようとしながら流れていることが説かれているのです。

④ これらの言葉で2人が悟ったことから、これは妙法であると言えます。

⑤ これらの言葉は、禪の一部分をそれぞれ説いていることから「群盲索象」であると言えます。

⑥ これらの言葉は菩薩が法華經は何を説いているのかを語った、朝「おはようございます」と挨拶をしなさいということと「履物を揃えなさい」と言う言葉と全く同じ内容なのです。

禪とは何か？ 法華經は何を説いているのか？ いや、仏教は何を説いているのか？ これらはすべて同じことを説いていたのです。なぜなら禪や法華經の全体像は仏教だからです。

老師のこれらの言葉は「日常生活(＝人生)のすべてが修行である。だから正しい日常生活をしっかりと送りなさい」と説いているのです。法華經も同じことを説いているのです。何も特別なことは説いていなかったのです。

法華經第4章の「長者窮子のたとえ話」にあるように、「私たちは億萬長者で、かつ覺者である仏の子であることに気付き（仏から受け継いだ）良心・仏性にしたがって正しい日常生活を送れば良い」のです。

奥義や悟りは、久遠の昔から常に私たちの脚下にあったのです。それを自覚すれば、そこが悟りの世界なのです。

3 ノアの箱船を人に譲れますか？

B さんたちの会話です。

B 「第1章 2 ノアの箱船（命の綱）」のところで「ノアの箱船を人に譲りましょう」と書かれていますが、私には実践できそうにありません。皆さんはどうですか？

C 私も譲れないと思います。真っ先に乗ってしまいそうです。

D ノアの箱船を譲れば必ず天国にゆける保障が頂けるのであれば譲れると思いますが、このような心掛けではいけないのでしょうか。となると、私も譲れる自信はありません。

E 「ノアの箱船を譲った者こそが本当・神仏のノアの箱船に乗ることができる」と言うのは真理だと思います。ですから、私個人としては「ノアの箱船を譲れば必ず天国にゆける」と信じていますが「ノアの箱船を譲りましょう」と積極的に呼び掛けることはできません。なぜなら人の命に関わる問題を含んでいますので、事が大き過ぎるからです。

B とところで、Eさんはノアの箱船を人に譲れそうですか？

E 譲れば天国にゆけると信じていても、そのときになって譲れないかも知れません。簡単に譲れないからこそノアの箱船であり、譲ったときの価値が大きいのだと思います。だから譲れるかどうかは、その

ときにならないとわからないと答えるしかありません。

天上界で B さんたちの話を聞いていた仏が姿を現し語りました。

仏 皆さん。「ノアの箱船を譲れるかどうか？」の問題を「タイタニック」と言う映画を観ながら考えましょう。この映画には神仏たちの思いが注がれているのです。この問題を考えて頂くために霊界の多くの魂が介入し、この映画が創られたとも言えるのです。

B 「この映画には神仏たちの思いが注がれている」と言うのは本当なのですか？

仏 本当です。皆さんには信じられないでしょうから、信じられるようにところどころに私が印を付けたのです。

B それはどんな印ですか？

仏 まずは一度皆で映画を観ましょう。

B さんたちは仏と一緒に「タイタニック」を観ました。

B 仏さん。この映画にどんな印を付けたのか教えてください。

仏 1998 年、宇都宮市内では「タイタニック」は 2 箇所で見られます。東宝とヒカリ座です。東宝は丸井のビルの中にあります。丸井のビルは^{まる い まる い}○ | ○ | と書かれています。丸い丸い東の宝とは太陽、つまり仏を表しているのです。ヒカリ座も光、つまり太陽である仏を表しているのです。「タイタニック」は光のない暗闇の映像から始まり、光り輝く映像で終わります。そして、最後のシーンがノアの箱船を譲った人たちが辿り着いた光り輝く天国の世界を表現しているのです。私は多くの人々を動かし、これらの印を付けてきたのです。

B なるほど。では仏さん。ノアの箱船を譲った人たちは必ず天国に辿り着けるのですね。

仏 必ずしもそうとは限らないのです。

E え！ そうなのですか？

仏 ノアの箱船を譲った人たちの心の紋様が大切なのです。

E ノアの箱船を譲ること自体素晴らしい心の紋様だと思います。これ以上、どのような心の紋様でなければならないのでしょうか？

仏 それを皆さんで考えて頂きたいのです。

B 仏さん。ノアの箱船を譲った人であっても天国にゆけない人がいるとすると、もしかして、ノアの箱船を譲らずに救命ボートに乗ってしまった人であっても天国に辿り着いた人がいるのですか？

仏 います。

E そんな馬鹿な。ノアの箱船を譲っても天国にゆけない人がいるケースがあるわけですから、譲らない人であれば、なおさら天国には辿り着けないのではないのでしょうか？

ノアの箱船を譲らずに救命ボートに乗ってしまった人は、溺れている人を見殺しにした人なのです。このような人がどうして天国に辿り着けるのでしょうか。どこか可笑しいと思います。

仏 Eさん。確かにノアの箱船を譲る心の紋様は美しいものです。しかし、その後の心の紋様も大切なのです。

一方、ノアの箱船を譲らずに救命ボートに乗ってしまって、溺れている人を見殺しにした人たちの心の紋様はとても汚れています。しかし、その後の心の紋様が大切なのです。

E どのような心の紋様でなければならないのでしょうか？

仏 ではもう1つの映画館で「タイタニック」を観ながら皆で考えましょう。

Bさんたちは仏と一緒にもう一度「タイタニック」を観ました。

仏 皆さんに質問します。「ノアの箱船を譲った人と譲らなかった人のどちらが先に天国に辿り着けるのでしょうか？」

E 仏さん。私に答えさせてください。

仏 皆さん。それで宜^{よろ}しいですか？

Bたち 結構です。おそらく私たちの答えは E さんと同じだと思います。

仏 では E さん。答えてください。

E この映画の内容は、1 回目では理解できなかったことが 2 回目に理解できたことが幾つかあります。そこから話をさせてください。

映画の主人公であるジャックがフランス人の女性をモデルにして書いた絵のスケッチブックを、ヒロインであるローズが 1 枚 1 枚捲^{めく}るシーンがあります。そこには美しい手は何枚も描かれています。ローズが尋ねます。「この女性を愛していたのね」と。ジャックが答えます。「いや、愛していたのは手だけ。足が悪いのです」と。

始めこのシーンを観たとき、神仏の思いが注がれている映画になぜこのようなシーンがあるのか疑問でした。なぜなら、この映画を観に来た人の中には足の悪い女性もいたのではないかと思ったからです。このような女性がこのシーンを見たとき、不愉快になるのではないかと思います。ですから、わざわざ足が悪いという言葉を加える必要はなく「いや、愛していたのは美しい手だけ」という言葉に留めるべきではないかと思いました。

足の悪い女性の人間性を主人公に否定させるのは、神仏のすることではないと思いました。おそらく B さんたちもそう感じたに違いないと思います。このシーンはとても不愉快なものとして私の心に強く残ったのです。

しかし、2 回目を観たとき、スケッチブックのモデルとなった足の悪い女性こそが、タイタニックに乗船している人たちの姿を代表していたことに気付いたのです。

主人公が描いたスケッチブックの絵は、生まれたばかりの赤ん坊か

ら始まって老婆で終わっています。これは、タイタニックに乗船している生まれたばかりの赤ん坊から死を迎える直前の老人までの、すべての人たちの姿がスケッチブックのモデルになっていることを表していたのです。そして、もし、これらのすべての乗員を仏の目で描いたならば、モデルの女性の姿に集約できることを表していると感じたのです。

モデルの女性の前後に描かれている赤ん坊と老人の絵は、これらのことを説くために仏が付けた印の1つであると思いました。

「なぜモデルの足が悪いのか？」

それは「手が美し過ぎるから」です。

「なぜモデルの手が美しいのか？」

それは「足が悪いから」です。

つまり、この船に乗っている人が持っている徳分は、仏の目から観れば皆同じなのです。1等室も2等室も3等室の乗客も乗組員^{のりくみいん}も皆同じ徳分なのです。

手が美しい人は足が悪いのです。つまりお金がある人は何かが欠けている筈なのです。

足が悪い人は手が美しいのです。つまりお金がない人は何か優れているところが必ずあるのです。ですから一見不愉快に感じたこのシーンの中に大切な仏の教えが含まれていたのです。

それは何か？

「人は人より優れているところと劣っているところを併せ持つてい
るということです。そして、それぞれ持っている長所と短所^{なら}を均すと
皆^{なんびと}（何人も）等価である」と言う真理の存在です。

同時に「人は善なる心と悪なる心を併せ持つてい
るということです。だから、仏の目から観れば、これらを均すと同じ霊格で、人を排除し
優先して救命ボートに乗ることができる資格を持つてい
る人はいない」

と言うことです。このことに気付けば仏さんの質問の答えはわかります。

「ノアの箱船を譲った人と譲らなかった人のどちらが先に天国に辿り着けるのか？」

答えは「同時です。正確に表現するならば、同時でなければ天国に辿り着けない」のです。

ノアの箱船を譲った人であっても、これを譲らなかった人を恨んだり、譲ったことを後悔したりしたのであれば、このような心の紋様では天国には入れないのです。

一方、ノアの箱船を譲らずに救命ボートに乗ってしまって、溺れている人を見殺しにした人たちであっても、後になって犯した罪の重さを知り、深く反省して罪を償い続け、そして溺れていった人たちが許してくれたとき、この人たちは天国に入れるのです。

ですから、ノアの箱船を譲り溺れ死んでいった人たちが、譲らずに救命ボートに乗ってしまった人たちを許し、かつこの者たちが心の底から懺悔したとき、彼らは共に（同時に）天国に辿り着けるのです。

仏　そうです。では、これらの基本的なことが理解できたところで「ノアの箱船を人に譲れるかどうか？」皆さんで考えてください。

B～E　凍てつくような海に投げ出されたとき、本当にノアの箱船を譲れるかどうか、この映画を観て更に自信がなくなりました。しかし「目の前で溺れている人たちを見殺しにすることはとてもできない、救いたい」という気持ちが湧き上るのも事実です。ですから、「譲れるかどうかは、そのときにならないとわからない」と答えるしかありません。

でも、気付いたことがあります。それは、私たちには「ノアの箱船を譲らず、溺れている人を見殺しにして自分だけ避難した人たちを非難することはできない」と言うことです。人を非難する人に限って、災難に出合ったとき、周りの人たちを見捨てて真っ先に避難してしま

うのではないかと思うのです。

仏 皆さんには、このことに気付いて欲しかったのです。イエスは聖書の中で次のようなたとえ話をしています。

＊

ある人に息子が２人いたが、彼は兄のところへ行き「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」と言った。兄は「いやです」と答えたが、後で考え直して出かけた。弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は「お父さん、承知しました」と答えたが、出かけなかった。この２人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか、と。

＊

ノアの箱船を譲るとは、ここで言う「ぶどう園へ行って働くこと」に当たります。ですから、このたとえ話は次のように読み替えることができます。

『神は、兄のところへ行き「ノアの箱船を人に譲れますか？」と尋ねた。兄は「譲れません」と答えたが、溺れている人の泣き叫ぶ姿を観て考え直し、ノアの箱船を人に譲った。神は弟のところへも行って、同じことを尋ねた。弟は「譲れます」と答えたが、水の冷たさを知ってノアの箱船から出なかった』と。

このたとえ話から学んで欲しいのです。「ノアの箱船を人に譲れますか？」と言う質問には意味がないのです。返ってくる答えに意味がないからです。

命を懸けますと言う人は命を懸けることはできないものです。命を懸けると言う思いを口に出すことを我慢できる人でなければ、本当に命を懸けることはできないものだからです。口から出る「命を懸けます」と言う言葉に命の重みはないのです。

映画の最後のところで、ローズが誰にも語らず身に秘めていたダイヤモンド（これはジャックとの思い出を象徴するものですが）を海に投げるシーンがあります。このダイヤモンドは、人が何年掛かっても引き上げたいと思うほど高価なものでした。値段は付けられないものであるとも言えます。

皆さんはこのダイヤモンドを抱えて一生誰にも打ち明けることなく、死ぬ間際になってこれを海に投げることができますか？

命を懸けるとは、これだけの我慢ができなければ決して実践できないものなのです。誰にも語ることなくダイヤモンドを身に秘めていたローズだからこそ、ジャックを命懸けで愛することができたのです。
金剛石（ダイヤモンド）のような堅^{かた}い意志がなければ、命を懸けることはできないのです。

人間にはイエスのたとえ話の兄と弟の心の両面が備わっているのです。これらの心は交互に訪れるのです。それが人間なのです。

タイタニックが沈んだとき、700 人が救命ボートに乗り、残りの1500 人が海に投げ出されました。この者たちの大部分はライフジャケットを身につけていました。ところが、ライフジャケットすら身につけていなかった人たちもいたのです。この人たちは、必死になってしがみつく物を探し求めます。中には、ライフジャケットを身につけている人に助けを求めしがみ付こうとします。しかしライフジャケットを脱いで人に譲ろうとした者は1人もいなかったのです。この姿は、仏の目から観れば、救命ボートを譲らなかった人たちの姿と全く同じなのです。

したがって、救命ボートを譲らなかった人を非難できる資格は、実は誰にもないのです。誰もがノアの箱船を譲らず、溺れている人を見殺しにする側になる心を持っているということです。ですから、互いに許し合う気持ちになることです。そうすれば、ノアの箱船を譲った

人も譲らなかった人も、共に天国に辿り着けるのです。

人は「ノアの箱船を人に譲れますか？」という神仏からの問い掛けに「譲れます」と答えながら結局譲ることができずに悩みます。しかし、これを何度も繰り返しながら、徐々に心を浄めて行った者には、やがて神仏の目から観て本当にノアの箱船を譲ったと言える日が必ず訪れるのです。こうして、心の修行が成就するのです。

第 16 章

見返りを求めない善行

1 達磨大師がダルマさんに目を入れる

F さんたちの会話です。

F 禅宗の始祖である達磨大師と梁の武帝の有名な問答があります。
内容は次のようなものです。

＊

仏教を深く信仰している武帝は、高僧の達磨大師がはるばるインドから中国に渡ってきたことを聞いて、喜んで宮廷に招き会見します。そして問います。

武帝 私はこれまでに、多くの寺や仏像を建て、多くの経を写し、多くの僧侶を育て、仏教を護持してきました。このような善行にはどのような功德があるのでしょうか？

達磨 無功德（功德など全くありません）。

武帝はこの言葉を聞いて非常に驚きます。なぜなら、彼の家臣や梁の僧侶たちからは「大きな功德が齎される」と言われていたからです。

しかも彼自身、仏典を学んでいましたから、これらの行為には大きな功德があることが仏典の中に書かれていることを知っていたからです。にも拘らず、彼が学んできた仏教と、正しいと思いながら一生懸命積み上げてきた善行が、梁の僧侶たちが遠く及ばないほどの高僧である達磨大師から「無功德」であると、否定されるとは予想していなかったからです。そこで、武帝は尋ねます。

武帝 それでは、釈尊（仏）の悟った第一義（根本的な真理）とは、どんな内容か教えてください。

達磨 ^{かくねん む しょう} 廓然無聖。(カラリと晴れ上がった悟りの境地。そこには聖なるもの(仏や、仏の教えや、悟り)すらありません)。

武帝は更に驚きます。なぜなら「釈尊の悟った安らぎの境地こそが仏の世界である」と教えられていたし、彼自身もそう思っていたからです。そしてそこは、寺や仏像が立ち並び、僧侶たちや多くの人々が仏の教えを学び、経を唱える、清らかな聖地であると考えていたのです。

ところが「その安らかな境地には仏(寺、仏像、経、僧)すらいない」と言われてしまったのです。となると、彼が寺や仏像を建て、経を写し、僧侶を育てて作ろうとしている仏の世界はどうなるのだろうか、という疑問が湧き上がってきました。そこで、武帝は尋ねます。

武帝 それでは、仏の第一義を悟り、仏の教えを説く僧侶のあなたは何者ですか？ 聖者(仏、経(法)、僧)ではないのですか？

達磨 ^{ふ しき} 不識(知りません)。

当初、武帝は達磨大師を梁に迎え入れ^{あつ}篤くもてなす考えでしたが、武帝は最後まで達磨大師の真意を理解できなかったために、これを取り止め不機嫌そうに会見を終えます。

達磨大師は梁の国を去り揚子江^{ようすこう}を渡って北の魏^ぎの国の少林寺に入り、そこで壁に向かって9年間坐り続けます。^{めんぺき くさい}面壁九歳と言われる坐禅です。

後日、武帝は側近の誌公^{しこう}に達磨大師との会見の模様を話し、意見を求めます。すると誌公は「達磨大師こそ仏の教えを梁に伝えにこられた観音菩薩です」と答えます。誌公にこのように言われた武帝は、達磨大師を梁の国に引き止めなかったことを深く後悔し「それでは、遣^{つか}いの者を送って早速^{さつそく}彼を呼び戻すことにしよう」と言いますが、誌公に「今となっては、誰が遣いに行っても戻ってくださらないでしょう」

と言われ^{あきら}諦めます。

＊

F 私には、武帝が行った善行には「功德など全くありません」と答えた達磨大師の真意がわかりません。もし、Gさんがわかっているのであれば教えて頂けませんか？

G これは公案になっているほど有名な物語で、私でさえも何回となく話を伺っています。ですから、^{もちろん}禅僧は勿論、仏道修行を志した者であれば一度はこの物語を聞いている筈です。

そして、達磨大師の真意を^{つか}掴もうと、この公案を解くために修行した経験を持つ人も多いのではないかと思います。

「無功德」と答えた達磨大師の真意は何か？ この答えは壁に向かって9年間坐り続けることのできた達磨大師自身に語って頂くしかないのではないかと思います。しかし残念ながら達磨大師はその真意を誰にも語ることはなかったのです。ですから、この公案は私たちには手も足も出ない難問だと思います。

私たちは、この物語を読んで、美しい絵画を^{かんしょう}鑑賞するように、ただただ味わうべきだと思うのです。

F Hさんはどう思いますか？

H これが公案である以上、仏からの質問だと受け取るべきです。ですから、この公案の壁に何度も挑戦して七^{ななころ}転び八^や起き^おの^き氣概^{がい}で臨めば、やがて自身で納得できる答えに辿り着けるのではないかと思います。

F なるほど。それで、Hさんはこの公案を解けましたか？

H 残念ながら未だに解けていません。

F それでは、禅を学んでいるIさんはどう思いますか？

I 私はこの公案に取り組んでから10年が経過します。Gさんが語った「達磨大師はその真意を誰にも語ることはなかった」という言葉がヒントになって、今ようやく解くことができました。Gさんに感謝し

ます。

G 私の言葉がヒントになったのですか？ 不思議なことが起こるものですね。Iさん早速公案の答えを教えてくださいませんか？

I どうでしょうか。皆さんも禅を学びながら、この公案が解けるまで頑張ってみませんか？ 私から答えを聞いても、それは私自身が納得する答えで、真に皆さんの血となり肉となる悟りにはならないと思うのです。

F 皆さんどうしますか？

G、H わかりました。答えに辿り着けるよう修行しましょう。

それから、3年が経過し、F～Hさんもこの公案の答えを自分なりに観付けることができました。Iさんを^{まじ}え4人が再び集まりました。

I こうして集まるのは3年ぶりですね。「達磨大師の真意は何か」について誰が最初に話すことにしますか？

F おそらく掴んだ答えは皆同じだと思います。ですから、誰が話しても良いと思います。

G それでは、3年前に「この公案には手も足も出ない」と言った私に^{ぜ ひ}是非話をさせてください。

F、H、I 良いですよ。

G ありがとうございます。では、話をさせていただきます。

多くの禅僧が経験したように、私も禅の修行を始める前は「山は山で、川は川」でした。ところがしばらく修行すると「山は山でなくなり、川は川でなくなり」ました。更に深く修行を進めてゆくと、元のように「山は山で、川は川」となりました。

つまり、修行前は誰もが山と見るべきものは、山であると言う固定観念に知らず知らずのうちに捕らわれ、山以外のものには見ることが

できませんでした。

修行を進めてゆくと次第に固定観念に捕らわれることなく物事の実相が徐々に観えてくるようになりました。

すると、山はときには明かり（噴火）であり、火（燃料・山^{やま}△事）であり、水（水源）であり、木であり、金（金山）であり、土であり、（動植物の）楽園であり、（食べ物や資源の）宝庫であり、家であり、村であり、町であり、父（男体山^{なんたい}）であり、母（女峰山^{によほう}）であり、息子（太郎山）であり、家族であり、（修行の）道場であり、観光地であり、道標^{みちしるべ}であり、迷路であり、平地（台地）であり、上り坂であり、下り坂であり、災害を^{もたら}齎すものであり、避難場所であり、（星や気象の）観測所であり、観測を邪魔する障害であり、暗闇であり、遺跡^{いせき}であり、文化であり、歴史であり、地層であり、時間であり、空間であり、緑（新緑）であり、赤（紅葉）であり、堆肥^{たいひ}であり、空気であり、熱であり、雪であり、氷であり、お湯であり、水蒸気であり、霧^{きり}であり、雲であり、風であり、音であり、力であり、動き（活動）であり、静寂^{せいじやく}であり、・・・・・・であると言うように、山は山と言うことに捕らわれなくなりました。

更に修行を深めてゆくと、山を山と言うことに捕らわれないと言う思いにも捕らわれない境地、つまり、山をあるがままの山と観る自由さを得たのです。

また、修行を始める前は、悲しいときには悲しみ、嬉しいときには喜びました。

修行を深めてゆくと、悲しいときでもくよくよすることなく、嬉しいときでも有頂天になることなく心を整えられるようになりました。

更に修行を深めてゆくと、悲しいときには悲しめば良い、嬉しいときには喜べば良い、そんな心の自由さを得たのです。

この境地に辿り着くまでに3年を要しました。このような境地で達

磨大師と武帝の問答を振り返ったときに「無功德」と答えた達磨大師の真意がわかったのです。

武帝は大きな功德を得ようと言う目的や見返りを求める心をもって、善行を行っていました。そして、行っている善行に対する周囲の者たちからの評価に^{いっきいちゆう}一喜一憂していたのです。取り分け、高僧の中の高僧である達磨大師から^{ぜ ひ ほ}是非お褒めの言葉を頂きたいと言う強い思いがあったのです。つまり武帝は功德を得ようと言う思いと、人から評価されたいと言う思いによって、自分自身の心を縛っていたのです。

このような心の紋様は仏の悟りの境地である、何ものにも捕らわれることがないカラリと晴れ上がった境地とはほど遠いのです。そこで達磨大師は「廓然無聖」と答えたのです。達磨大師は「功德にも捕らわれてはならない、聖なるもの（仏、仏像、経、僧）にも捕らわれてはならない、私（達磨）や私の語った言葉にも捕らわれてはならない」と教えていたのです。

武帝が達磨大師に「あなたは何者ですか？」と問うたときに、達磨大師は「不識」と答えます。達磨大師は「私はあなたが梁の皇帝であることにも自分が何者であるかにも捕らわれてはいないのです。ですから、あなたも私が何者であるかに捕らわれてはいけません」と教えていたのです。

達磨大師は、その真意をなぜ誰にも語る事がなかったのか？ それは、捕らわれの心を持った大勢の人が、達磨大師自身が語った真意と言う言葉に捕らわれてしまうからです。つまり、口をへの字に結んで真意を誰にも語らなかつたことによって、達磨大師が語ろうとした真意は何であるのかを「一切のものに捕らわれない自由な心」で1人ひとりの修行者に考えてもらおうとしたのだと思います。

F、H、I Gさん。私たちの辿り着いた答えも同じです。我々修行者は、修行を深めてゆくと、悲しみを乗り越え、そして有頂天になる心

を抑^{おさ}えられるようになります。このため、そのような心こそが完全なる自由を得た心であると思いがちです。

しかし、よくよく心の中を覗いて観ると、武帝のように知らず知らずのうちに、功德や仏や経や僧や浄土や悟りに捕らわれているのです。この捕らわれを除くことは非常に困難です。仏を信じて行ずる者ほど乗り越えることが難しい壁であると言えます。これが最後まで心を縛る執着で、達磨大師はこの壁に向かって 9 年間、いや、永遠に坐禅しているのです。

最も信ずるもの、最も愛するものにも捕らわれない・執着しない境地、これを得たとき心はカラリと晴れ上がり、清^{すがすが}々しくどこまでも広がってゆくのです。

G 私は修行に入る前から達磨大師と武帝のこの問答の物語を何度も聞いてきました。そしてこの物語を、美しい絵画を鑑賞するように味わっていたのです。修行して、達磨大師の真意は何かについて自分なりの答えを得た今、この物語はやはり美しい絵画であると強く思えるのです。

この絵画を描いたのは誰か？ それは神仏であると思うのです。私は、この物語には神仏の意志が働いていると思えるのです。

なぜなら、この物語を構成する、次の①～⑪の要素のどれ 1 つが欠けても、この物語は完成しないからです。

- ① 仏や経や僧を信じ一生懸命になって善行を行い功德を積もうとする武帝。
- ② 皇帝である武帝。
- ③ 「武帝の善行には大きな功德が齎^たされる」と言って褒め称える家臣や梁の僧侶たち。
- ④ 仏の教えを説くためにインドからはるばる中国へ渡ってきた高僧の達磨大師。

- ⑤ 2人が面会する宮廷。
- ⑥ 達磨大師に次々と質問する武帝。
- ⑦ 相手が皇帝であることに捕らわれることなく仏教の真髓を語る達磨大師。
- ⑧ 「無功德」「廓然無聖」「不識」が達磨大師によって語られる。
- ⑨ 達磨大師の真意を最後まで理解できなかった武帝。
- ⑩ 武帝の元を去り「面壁九歳」の坐禅^{ざんまい}三昧に入る達磨大師。
- ⑪ 達磨大師の真意を知り「達磨大師こそ仏の教えを梁に伝えにこられた観音菩薩である」と観抜いた武帝の側近の誌公。

更に、これらの構成要素を関係の深いもの同士、グループにして観ると次のようなことがわかります。

- ①③④から 家臣たちから褒め称えられながら一生懸命に功德を積もうとする武帝とインドからはるばる中国へ渡ってきた、後に禅宗の始祖となる達磨大師が出合って(初めて)この物語はスタートします。
- ②⑤⑦から 問答の相手が皇帝で、場所が宮廷であることで、これらが引き立て役となって、相手が誰であろうと、しかもどんな煌びやかなものを見せられても、いかなるものにも捕らわれない達磨大師の「廓然無聖」の境地を垣間^{かいま}観ることができます。
- ⑥⑧⑨から 達磨大師の真意を理解できないため、武帝は次々に質問を投げ掛けます。その結果「無功德」「廓然無聖」「不識」と言う禅(仏教)の真髓が語られることになります。この物語と言う絵画には、後世の我々のような凡夫^{ぼんぶ}の目線に立って、達磨大師のような仏に質問してくれる武帝が欠かせないのです。

武帝が達磨大師の真意を理解できなかったお蔭^{かげ}で、この美しい絵画を今、観ることが可能であるとも言えます。

これを公案として、禅とは何か、仏教とは何か、心はいかにあるべ

きかを悟った後世の修行者は数多く存在します。だとすれば、武帝はこの絵画の中で達磨大師の真意を理解できなかった役者として立派に役割を果たし、後世の大勢の修行者を悟りへ導いたと言えます。これこそが、武帝の積んだ最大の功德です。

武帝は功德を積もうとして一生懸命善行を行いましたが、これは功德と言う見返りを求めたものであったため、仏の目から観れば真の功德には繋がらなかったのです。皮肉なことに、達磨大師の真意を理解できなかった心の無明さから発した、質問すると言う行為がやがて膨大な功德を生むことになるのです。武帝自身も全く予想していなかった形で功德を積ませてもらえたと言えます。

この功德を積ませたのは誰か？ それは達磨大師と言う仏です。このことを通して、仏の悟りの世界には聖なるものも迷えるものもない。あるいは、聖なるものと迷えるものが共存する世界であって、どちらにも捕らわれることなく、神仏から与えられた使命・役割を一生懸命に行じてゆけば、やがては本人が知らないうちに自然に功德を積ませてくれることを、仏はこの絵画を描いて説いているのです。

⑩から 武帝の元を去った達磨大師は「面壁九歳」の坐禅三昧に入ります。もし、武帝が達磨大師の真意を理解し、彼を梁に引き止める力を持っていたならば、我々は達磨大師の「面壁九歳」の姿を観ることはできなかったでしょう。なぜなら、向学心旺盛な武帝のことですから、達磨大師を9年間そっとさせて置くことはなかったと思うからです。

達磨大師が武帝の元を去ったからこそ、禅の真髓が、慧可、慧能、馬祖、百丈、南泉、潯山、趙州、徳山、雲門、・・・・・・へと引き継がれ中国で見事に花開いたのです。

その種（禅や仏教の真髓）はやがて日本に伝えられ、栄西、道元、白隠、・・・・・・らによって大切に育てられ、やがて日本でも花開き

今日に至っているのです。私はここにも神仏の働きを感じます。

⑪から 達磨大師の真意を知り、彼が観音菩薩であることを観抜いた武帝の側近の誌公の存在もこの絵画には欠かせません。このような側近が居たことが重要なのです。

武帝は誌公の説く教えは何度も聞いていたのです。だからこそ、達磨大師から禅（仏教）の真髓を引き出せるような質問を投げ掛けることができたのです。

武帝の質問は禅問答としては第一級（の質問）です。単に達磨大師の真意を理解できなかった馬鹿殿様ではないということです。

武帝は達磨大師の言葉は理解できませんでしたが誌公の言葉は理解できたのです。言うことは武帝には誌公が丁度良い先生と言うことです。このことはイコール達磨大師の偉大さへ繋がっています。

F、H、I G さん。この物語は後世大勢の人々を悟りに導くために最も効果を発揮するように構成されていると思います。ですから、私たちもこの物語には神仏の強い意志が介在していると思います。

G 日本では、達磨大師は坐禅する姿を模して作られた張り子のダルマさんとしてお馴染みです。

人々はこのダルマさんに願いを掛け、それが叶ったとき目を書き入れます。



ダルマさん

Shutterstock_2286809823

私には願いがあるのです。それは、見返り（功德）を求めない善行を行うことです。しかしなかなかできません。心の奥底で、明るく楽しい未来が訪れま

すようにとか、死後は天国に入れますようにとか、つい祈ってしまうのです。

私には自分の力だけではとても見返りを求めない善行を行えそうにないのです。だから達磨大師の助けを借りるのです。

つまり、善行を行った後に、私は達磨大師に尋ねるのです。

「今行った善行にはどんな功德があるのですか？」と。

達磨大師は答えてくれます。「無功德」と。

仏である達磨大師がそう言ってくれたのですから、今行った善行には功德はないのです。

そこで、続けて同じ善行を行うのです。この 2 回目の善行は私にとっては、功德と言う見返りを求めずに行った行為なのです。

達磨大師は「無功德」という言葉で私に見返りを求めない善行を実践させ願いを叶えてくれたのです。つまり達磨大師が私の心の中のダルマさん（願い）に目を入れてくれたのです。

武帝も私と同じなのです。見返りを求めながら行った善行には功德はありませんでしたが、達磨大師の「無功德」という言葉を聞いてから行った武帝の善行は、見返りを求めない真に功德のあるものに変ったのです。つまり達磨大師が武帝の心の中のダルマさん（釈尊の第一義の実践の成就）に目を入れてくれたのです。

2 怒りが残っているのでは？

J さんと K さんの会話です。

J 「第 3 章 4 鬼怒川と雲」のところで「8 の字の雲が上下にわかれて、鬼怒川の鬼が魂になり、戦国武将や自殺者や水難事故者の魂が成仏した」と書かれていますが、鬼が魂になっても鬼怒川の「怒り」が残っていては「^{こんどがわ}魂怒川」ですから、依然として「^{いか}怒る魂の流れる川」

と言うことで、戦国武将たちの魂は成仏していないのではないかと思いますのです。Kさんはどう思いますか？

K Jさん。これで成仏しているのです。

J わかるように詳しく説明して頂けますか？

K この物語で仏は「鬼怒川に魂が授けられた」と語っています。単に、雲によって鬼が魂に変わったと言う解釈に留めるべきではないのです。なぜなら、鬼怒川が魂怒川になったくらいでは、魂怒川の中には怒りだけでなく、良く観ると鬼も依然として残っているからです。まるで、どんなに心を浄めて行っても怒りや鬼の心をゼロにすることができないように。

大切なのは、怒りや鬼の心が頭を^{もた}擡げて来たとき、己の心の紋様を冷静に自覚し、これを抑える魂の働きが必要なのです。この魂こそが「^{にき み たま}和御魂」で仏の境地である穏やかな魂なのです。

J 雲が鬼怒川に吸い込まれていった光景を観て、どうして怒りや鬼の心を抑える魂が戦国武将たちに授けられたと解釈することができるのでしょうか？

K 私は栃木県出身ですが、この物語を読んで、日光の風景の中に、実に正確に釈尊の説かれた「^{け こんきょう}華嚴経」の世界が構成されていることに驚いたのです。神仏の働きを強く感じました。

J 具体的にはどう言うことですか？

K 華嚴経の^{きやうしゆ}教主である「^{び る しゃ な ぶつ}毘盧遮那仏」は「^{こうみょうへんじやう}光明遍照」と訳され、^{あまね}遍く世界を照らす太陽の光を表しています。ですから「日光」が「毘盧遮那仏」を表しています。

「日光国立公園」は「華嚴経（仏）の世界」を表しています。

そして、水は^{ちゆうぜん じ こ}中禅寺湖→^{だい や}華嚴の滝→大谷川→鬼怒川へ流れます。流れる「水」は「華嚴経の教え」を表しています。

華嚴経の中で最も重要な教えの1つである、菩薩が悟りに至るまで

の境地を段階的に説いた「十地品」は、金剛蔵菩薩によって語られています。

金剛蔵菩薩とは、ダイヤモンド（金剛石）のように堅い不退転の意志をもって悟りを求めて行じている菩薩のことで「大谷川＝第3章 4のSさん」が「金剛蔵菩薩」を表しています。

「十地品」に説かれている悟りに至るまでの10段階の境地とは、次の(1)～(10)を言います。

- (1) 歓喜地（菩薩行に大いなる喜びを感じることになること）。
- (2) 離垢地（戒律を守り煩惱から離れ清浄な心になること）。
- (3) 発光地（仏法が本当に自分のものとなって知恵の光によって輝くようになること）。
- (4) 焰慧地（知恵の火によって煩惱を焼き尽くすことができるようになること）。
- (5) 難勝地（身に降り掛かる難問や障害を知恵の光によって克服できるようになること）。
- (6) 現前地（目の前に現れる一切のものが仏の知恵によって輝くようになること）。
- (7) 遠行地（自分だけの悟りを求める心から離れ、人々を救うために慈悲の道を歩むようになること）。



華嚴の滝

Shutterstock_1066227137

(8) 不動地（決して退転することのない境地となり、自然に菩薩行を実践できるようになること）。

(9) 善慧地（真理を深く体得し、相手に応じて自在に法を説くことができるようになるこ

と)。

(10) 法雲地 (常に諸仏の説く大法の雨を全身に受けることができるようになること)。

最高の境地が (10) の法雲地で、この境地に到達した菩薩は (1) ~ (9) までの境地をすでに身につけていると言われています。

この物語の 8 の字の「雲」が「法雲地」を表します。

これらの要素を日光の風景の中に貼り付けてゆきます。

華嚴経の世界である日光国立公園内に降った毘盧遮那仏の大法の雨が、中禅寺湖に満々と湛えられています。

この大法が落差 100m の華嚴の滝から大谷川である金剛蔵菩薩に伝授されます。

金剛蔵菩薩は、ダイヤモンドのように堅い不退転の意志をもって悟りを求めて菩薩行に入ります。そして大法の雨から成る華嚴の滝に打たれながら毘盧遮那仏の説く教えの真髓を極めてゆきます。

やがて 10 種(m)の菩薩行を実践・成就した金剛蔵菩薩は (1) 歓喜地の境地に入ってゆきます。さらに 10 種(m)の菩薩行を実践・成就して (2) の離垢地に入ってゆきます。このように次々に菩薩行を実践・成就しながら高い境地を目指して華嚴の滝の 100m を上ってゆきます。

遂に 100 種 (m) の菩薩行を実践・成就した金剛蔵菩薩は最高の境地である (10) 法雲地の境地に辿り着きます。

しばらく中禅寺湖の水面で禅をとりながら毘盧遮那仏の教えの真髓を味わいます。

やがて法雲地の境地を完全に自分のものにした金剛蔵菩薩は、ゆっくりと立ち上がり、暴れていた竜頭の滝の竜を鎮め、これを従え (これに乗って) 下流の鬼怒川へ下ってゆきます。

鬼怒川は、戦国武将たちが繰り広げる戦によって流された血や、自

殺者や水難事故者の怒り狂う魂から流れ出た血によって、鬼が怒った形相で血が流れる悲惨な川となっていました。

この川に、金剛蔵菩薩は毘盧遮那仏から伝授された大法を注ぎ始めます。くる日もくる日も休むことなく大法を注ぎ続けてゆきます。

やがて、毘盧遮那仏の教えに目覚めた何人かの魂は、ダイヤモンドのように堅い不退転の意志をもって悟りを求めて菩薩行に入ります。これらの魂はやがて 10 種(m)の菩薩行を実践・成就し (1) 歓喜地の境地に入ってゆきます。このようにして 100 種(m)の菩薩行を実践・成就した魂は最高の境地である (10) 法雲地の境地に辿り着きます。

戦国武将や自殺者や水難事故者の魂は次々に目覚め法雲地の境地に入り、常に諸仏の説く大法の雨である 8 の字の雲を、全身に受けることができるようになったのです。

私はこのような実に美しく、かつ壮大な光景を思い浮かべることができましたので、8 の字の雲が鬼怒川に吸い込まれて行ったことで、戦国武将や自殺者や水難事故者の魂は成仏したと思えるのです。

第 17 章

最も苦しいときに実践する

1 大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲れますか？

L さんは「第 1 巻」を読んで「大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲りましょう」という言葉がとても強く心に残りました。

L さんは、自分でも実践できそうな気がすると思う思いと、どんな状況に置かれてもと言うと実践するのは困難ではないか、と言う思いが交差していました。

そんな中、L さんは次のような夢を観ました。

L さんは独身の男性ですが、夢とは不思議なもので、夢の中の L さんはなぜか 3 人の子どもを抱える母子家庭のお母さんでした。

胸に^{しこ}瘤があることを感じた L さんは病院へゆきました。診察の結果、^{にゅうがん}乳癌（あくまでも夢）であることが告げられました。幸い早期発見であったので、手術を受けて取り除けば命に別状はないと先生から言われました。しかし、入院して手術となると、収入は断たれ失費は^{かさ}嵩むし、どうやって 3 人の子どもを育ててゆけば良いのかと途方に暮れてしまいました。

暗く沈んだ気持ちで帰宅の道を歩いていました。すると貧しい M 老婆に^{ふん}扮した仏が道に倒れていました。L さんには不思議に老婆が仏であるとわかったのです。仏が語り掛けてきました。

仏 私は数日前から何も食べていないのです。少しく良いですから、お金を譲って頂けませんか？

L お気の毒に存知ます。しかし、私も子どもたちに食べさせるのに精一杯なのです。今はお譲りできるお金はないのです。どうか許してください。

仏 あなたは、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることはできないのですか？

L すみません。私には実践できそうにありません。仏さんに大きい方、好ましい方、楽な方を譲らなかったことが理由で地獄に落とされるとしても、子どもたちを飢え死にさせるわけにはゆかないのです。ですから、今はお金を譲ることはできません。仏さんにお金を譲ってくださる方が後からこられることをお祈りします。

仏 Lさん。私はあなたが人にお金を譲ることができる状況でないことは承知していました。私は、あなたの心の紋様が観たくて試したのです。

あなたは、3人の子どもと病気を抱え、すでに小さい方、好ましくない方、辛い方を受け取っているのです。そのような状況でありながら「お金を譲れなくて申し訳ありません」と言い、そして「お金を譲ってくださる方が後から来られることをお祈りします」と言ってくれました。このような心の紋様は、仏の目から観れば、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることと同じ価値があるのです。

Lさんがしばらく歩いてゆくと、貧しいN老人に扮した仏が道に倒れていました。仏が語り掛けてきました。

仏 私は数日前から何も食べていないのです。少しく良いですから、お金を譲って頂けませんか？

Lさんは次のように考えました。

『仏さんは私が人にお金を譲ることができる状況でないことは承知してくれている筈だ。だから、今回も「お金を譲れなくて申し訳ありません」と言って、そして「お金を譲ってくださる方が後からこられることをお祈りします」と言えば、仏さんは許してくださるだろう』と。

そして答えました。

L お気の毒に存知ます。しかし、私も子どもたちに食べさせるのに精一杯なのです。今はお譲りできるお金はないのです。どうか許してください。

仏 あなたは、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることはできないのですか？

L すみません。私には実践できそうにありません。仏さんにお金を譲ってくださる方が後からこられることをお祈りします。

仏 L さん。私はあなたが人にお金を譲ることができる状況でないことは承知していました。しかしそのような状況であっても、飢え死にしそうな人を救ってゆくのが菩薩の修行なのです。

「お金を譲れなくて申し訳ありません」と言い、そして「お金を譲ってくださる方が後からこられることをお祈りします」と言ってくれる心の紋様はとても素晴らしいです。

しかし私は、L さんにはこの心の紋様に留まって欲しくないのです。大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ると言う実践は、最も苦しいときにできてこそ、本物なのです。L さんにはこのような更に高い境地を目指して欲しいのです。

L さんがしばらく歩いてゆくと、貧しい O 婦人に扮した仏が道に倒れていました。仏が語り掛けてきました。

仏 私は数日前から何も食べていないのです。家では子どもたちがお腹を空かせて待っているのです。少しくらい良いですから、お金を譲って頂けませんか？

L さんは次のように考えました。

『もし「お腹を空かせて待っている子どもたちのために少しでも良いからお金を譲ってください」と言って、路頭を彷徨い疲れ果てて道

に倒れ、通行人の足下^{あしもと}に^{すが}縋り付いて救いを求めているのが私であるとしたならば、と思うと O 婦人を見捨てるわけにはゆかない。私の持っているお金の半分以上を譲って上げよう』と。

L さんが財布の中身を調べると、1 万円札 1 枚と千円札が 1 枚入っていました。大きい方を譲るとなると 1 万円を譲ることになります。L さんは「残った千円ではどうやって 3 人の子どもを食べさせたら良いのか？」と急に不安になり、思い直して次のように答えました。

L 今はお譲りできるお金は千円が精一杯です。私も子どもたちを食べさせてゆかなければならないのです。どうかこれで許してください。

仏 ありがとうございます。私はあなたが人にお金を譲ることができる状況でないことは承知していました。この千円を譲ることは、神仏の目から観れば、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることと同じ価値があるのです。このご恩は決して忘れません。

夢とは不思議なもので、L さんがしばらく歩いてゆくと、最初に出合った貧しい M 老婆に扮した仏が再び道に倒れていました。仏が語り掛けてきました。

仏 私は数日前から何も食べていないのです。少しく良いですから、お金を譲って頂けませんか？

L お気の毒に存知ます。しかし、私も子どもたちに食べさせるのに精一杯なのです。これ以上お譲りできるお金はないのです。どうか許してください。仏さんにお金を譲ってくださる方が、後からこられることをお祈りします。

仏 ありがとうございます。その言葉だけで十分です。

L さんがしばらく歩いてゆくと、2 番目に出合った貧しい N 老人に扮した仏が道に倒れていました。仏が語り掛けてきました。

仏 私は数日前から何も食べていないのです。少しく良いですから、お金を譲って頂けませんか？

L お気の毒に存知ます。しかし、私も子どもたちに食べさせるのに精一杯なのです。今はお譲りできるお金はないのです。どうか許してください。

仏 あなたは、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることはできないのですか？

L すみません。私には実践できそうにありません。仏さんにお金を譲ってくださる方が、後からこられることをお祈りします。

仏 L さん。私はあなたが人にお金を譲ることができる状況でないことは承知していました。しかしそのような状況であっても、飢え死にしそうな人を救ってゆくのが菩薩の修行なのです。大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ると言う実践は、最も苦しいときにできてこそ、本物なのです。L さんにはこのような更に高い境地を目指して欲しいのです。

L さんがしばらく歩いてゆくと、3 番目に出合った貧しい O 婦人に扮した仏が道に倒れていました。仏が語り掛けてきました。

仏 私も子どもたちも数日前から何も食べていないのです。少しく良いですから、お金を譲って頂けませんか？

L さんは、もし、私が O 婦人の立場であったらどうだろうか？ と考え、残りの 1 万円を O 婦人に譲りました。

仏 ありがとうございます。私はあなたが人にお金を譲ることができる状況でないことは承知していました。あなたは、持っていたすべてのお金を私に譲り、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ると言う修行が今成就したのです。

L さんには今持っているお金はありません。しかしとても^{すがすが}清々しい気分になっていました。



光り輝く世界への扉
shutterstock_1918663799

家に着き玄関を開けました。中から「お父さん、いや、お母さんお帰りなさい」と言って、子どもたちが出迎えてくれました。子ども

たちの姿を観て L さんはとても驚きました。なぜならそこに立っていたのは、道

で倒れていた M 老婆と N 老人と O 婦人であったからです。

やがて 3 人は元の子どもの姿に戻りました。子どもたちは L さんの手を引いて家の奥へ導きます。奥の^{とびら}扉が開くと、そこは光り輝く仏の世界だったのです。

L さんはそこで夢から覚めたのです。仏は、持っているすべてのお金を人に譲ることができるようになるまで、L さんに夢を観続けさせていたようです。

L さんはこの夢から次の①～⑥の真理を学ぶことができました。

- ① （道で倒れ）救いを求めているのは、自分の子どもたちであると思いなさいと仏は教えているのです。
- ② 「お金を譲れなくて申し訳ありません」という言葉や「お金を譲ってくださる方が後からこられることをお祈りします」というように、人を思いやる言葉は、仏の目から観れば、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることと同じ価値があるのです。
- ③ 小さい方、好ましくない方、辛い方を受け取っている現状を受け

入れる・耐えることは、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることと同じ^{イコール}なのです。

④ 金額や大きさが大切なのではなく、譲るとき心の紋様が大切で、精一杯の布施こそが、大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ることになるのです。

⑤ 大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ると言う実践は、最も苦しいときにできてこそ、本物なのだという事。そして、人はこのような高い境地を目指して精進しなければならないのです。

⑥ 大きい方、好ましい方、楽な方を人に譲ると言う 1 つの修行課題を成就できたならば、その修行者は、光り輝く仏の世界に辿り着けるのです。

2 すべての人を許せますか？

P さんは会社に向かう途中、夜勤^{やきん}疲れから居眠り運転をしていた Q さんの車に^は撥ねられ、両手両足を骨折する全治 6 ヶ月の重傷を負って入院していました。

入院生活が 2 ヶ月ほどになっていました。P さんはベッドに横になりながら、見舞いにきてくれた友人が置いて行った「虹の掛け橋」を読み始めました。読み終わったところで「もし、仏が私の立場だったら Q さんを許せるのだろうか？ 仏はすべての人を許せるのだろうか？」という疑問が湧いてきました。そこへ仏が姿を現しました。

仏 P さん。その質問は自分自身に問うことです。

P それは「自分は Q さんを許せますか？」と問いなさいということですか？

仏 そうです。

P Q さんは、何度も見舞いにきてくれてますからとても誠意のあ

る方ですし、疲れた体を押してまで仕事をするほど真面目な方です。ですから、この事故の加害者と被害者の関係でなく出合っていたなら、とても良い友達になっていたと思います。

しかし、傷が痛み出すと「もしも、Qさんがその日夜勤をしなければ、居眠り運転をしなければ、車の運転をしなければ、・・・・・・・・しなければ」と思い、^{しま}終いには「もしも、Qさんがこの世に生まれてこなければ、私がこんな事故に巻き込まれることはなかったのに」と思うのです。

Qさんを許したい、いや、許さなければいけないと思う一方、決して許せないと言う気持ちも心の中に存在しているのです。

このように、許せないと言う気持ちが残っている以上「Qさんを許せますか？」と言う問いには「できません」と答えるしかありません。しかし、この気持ちは私自身の心をととても苦しめているのです。

仏 「第 15 章 3 ノアの箱船を人に譲れますか？」のところを開いてください。後ろの方に、次のようなイエスのたとえ話が書かれていますね。

＊

ある人に息子が2人いたが、彼は兄のところへ行き「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」と言った。兄は「いやです」と答えたが、後で考え直して出かけた。弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は「お父さん、承知しました」と答えたが、出かけなかった。この2人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか、と。

＊

「人を許すこと」とは「ノアの箱船を譲ること」や「(体がくたくたに疲れた状態であっても、友・隣人・イエスに代わって)ぶどう園へ行って働くこと」と同じです。ですから、このたとえ話は次のように読み替えることができます。

神は、兄のところへ行き「あなたを傷付けた Qさんを許せますか？」と尋ねた。兄は「許せません」と答えたが、何度も頭を下げ謝っている Qさんの姿を観て考え直して許した。神は弟のところへも行っ、同じことを尋ねた。弟は「許せます」と答えたが、傷付けられた腕と足の機能が元に戻らないと聞いて許せなかった、と。

「すべての人を許せますか？」という質問も意味がないのです。返ってくる答えに意味がないからです。なぜなら、命を懸けると言う思いを口に出すことを我慢できる人でなければ、本当に命を懸けることができないように、本当に人を許せる人は、その思いを軽々しく口に出さないものなのです。ですから、口から出る「許せます」と言う言葉には欠片^{かけら}ほどの重みもないのです。

人間にはイエスのたとえ話の兄と弟の心の両面が備わっているのです。これらの心は交互に訪れるのです。それが人間なのです。誰もが許しを請う側に立つことも、そして許しを請われても許せないと答える側に立つこともあるのです。

ですから、許しを請う人を許し、許しを請われても許せないと答える人を許すことができるように、お互いに努めてゆくことが大切なのです。

信仰の良いところは「人を恨んでいる気持ちがある」というような己の心の紋様に気付き、これを反省し、できるだけ恨む気持ちを小さくしようと努める力・心が働くことです。ですから、Pさんのように「許せないと言う気持ちが自身の心をととても苦しめていること」に気付くことが大切なのです。

3 強い愛情ほど良く物を燃やす

RさんとSさんの会話です。

R Sさん。「第9章 5 ご飯が燃える」のところで、盂蘭盆経^{う ら ぼんきょう}の内容を解説している箇所があって「(百味の食べ物を) 供えたときの目連の思いは、母に供えたときの思いも、僧侶たちに供えたときの思いも清らかさに関しては同じです」と書かれていますが、私には目連が母と僧侶たちに同じ思いで供えたとは思えないのです。

S どうしてですか？

R 目連の母が餓鬼の世界に落ちて苦しんでいてもいなくとも僧侶たちに食べ物を供養したと言うのであれば、目連は母と僧侶たちに同じ思いで供えたと観ても良いと思います。ところが、目連は母を救うために、その手段として僧侶たちに食べ物を供養したわけですから、母に対する思いの方が上回っていたと観るべきだと思います。

S そう言われると、自分を目連に置き換えて考えてみても、母に供養するときの思いの方が当然上回っているでしょうね。

では、目連の母のご飯だけなぜ燃えたのですか？

R それは、目連が母を救いたいと言う思い・愛情がとても強かったからだと思います。

愛情は太陽のように暖かく心地良いものだと思います。しかし、心地良い光もルーペで一箇所に集めれば物を燃やすほどのエネルギーに変わります。

母を救いたいと言う目連の思い・愛情は、目連の全身全霊から供えたご飯と言う一点に注がれ、この愛情は太陽の光を一箇所に集めたのと同じエネルギーを持っていたのではないのでしょうか。

仏は、目連の母への愛情がこれほど強いものであると、母に教えるためにご飯を燃やしたのではないかと思うのです。

S なるほど。強い愛情ほど良く物（相手（周囲の人たち）と自分の

身など)を燃やす・焦^こがすと言う(反)真理が説かれているわけですね。

R そうニャン。

S ああ。あなたは「回転^{ずし}寿司」が大好きなニャンちゃんなのですか？

R そうニャン。

S あなたは確か「第 5 巻」で初めて登場するのではなかったですか？

R そうニャン。

S ではなぜ「第 2 巻」で登場してしまったのですか？

R 待ちきれなかったからなのニャン。

S あははは。・・・・・・。わかる気がするニャン。

第 18 章

互いに支え合い、^{まんしん}慢心^{おさ}を抑え合う

1 宇宙の中心に位置する神仏はいるの？

V さんたちが宇宙の中心に位置する神仏について話をしています。
内容は次のとおりです。

V 「第 1 章 1 太陽が手本 その 1」のところで「太陽を導く銀河系の中心の神仏がおられ、更にこの神仏を導く宇宙の主神がおられると考えます」と書かれています。これについて W さんはどう思いますか？

W キリスト教は、天地（宇宙）を創造した神を唯一絶対神とする一神教です。ですから、この神が宇宙の中心に存在していると同時に、神は宇宙の隅々にまで姿を現して^{くま}隈なく光を注ぎ、宇宙の一切の働きを^{つかさど}司^{とうそつ}って（統率して）いると見ています。

一方、仏教は、阿弥陀如来、薬師如来、釈迦如来、大日如来、毘盧遮那仏、観音菩薩、地藏菩薩など多くの神仏が登場する多神教です。ですから、これらの神仏たちが知恵を出し合い補い合って隈なく光を注ぎ、宇宙の働きを協力して司っていると見ています。

しかし、仏教も宗派ごとに見ると、浄土宗や浄土真宗では「阿弥陀如来」、日蓮宗では「釈迦如来（正確には^{く おんじつじょう}久遠実成の釈迦如来）」、真言宗では「大日如来」、華嚴宗では「毘盧遮那仏」が宇宙の中心に位置する神仏であると説いています。（ただし仏教には創造主と言う概念はありません）。

このように、宗教は一神教か多神教かにわかれますが、多くの宗教宗派が、必ずと言って良いほど「宇宙の中心に位置する神仏が存在し

ている」と説いているのです。

私には、宇宙の中心に位置する神仏（以下「主神」）が存在しているのかどうかわかりません。もしかすると、誰も正確には主神の存在はわからないのではないのでしょうか。

V Xさんはどう思いますか？

X 私は主神はおられると思います。主神を支える神仏たちもおられると思います。そして、主神とこれらの神仏たちの間には理想的な秩序が保たれているのではないかと思います。

V 理想的な秩序とは？

X 以下は私の描く理想的な秩序です。

宇宙には 1000 億の銀河が存在していると言われています。この銀河 1 つひとつが神仏で、これらが宇宙を構成し支えているのです。これらの銀河を束ねるのが主神です。主神の持っている愛・知恵・勇氣・希望・徳・エネルギー・質量・力・広がりなど（以下「エネルギー」）は、全宇宙の 1% 程度です。

そして、1 つの銀河が持っているエネルギーは、全宇宙の、

$$\frac{100-1}{100,000,000,000} \div 0.000000001\%$$

で、主神の 10 億分の 1 です。

1 つひとつの銀河は主神の持っているエネルギーには遠く及びません。しかし、束になれば、主神を遥かに凌ぐエネルギー（主神の 99 倍）を持つことになります。

圧倒的なエネルギーを持つ主神は、銀河の神仏たちの慢心や暴走を抑えます。そして、主神は「宇宙の秩序の大部分（99%）を保っているのは 1000 億の銀河の神仏たちで、自分が果たしている部分は 5 円

玉を立てて上から覗いたわずか 1%程度の狭い範囲である」と、自身の慢心を抑えています。これが私の描く理想的な秩序です。

銀河系に目を移します。

銀河系には 1000 億程度の恒星が存在していると言われています。この恒星 1 つひとつが神仏で、これらが銀河系を構成し支えているのです。この恒星を束ねるのが銀河系の中心に位置する神仏（バジルと呼ばれる中心部）です。この神仏の持っているエネルギーは、銀河系の 1%程度です。しかし、1 つの恒星が持っているエネルギーは、この神仏の 10 億分の 1 です。

圧倒的なエネルギーを持つこの神仏は、銀河系内の恒星たちの慢心や暴走を抑えます。そして、この神仏は「銀河系の秩序の大部分を保っているのは 1000 億の恒星の神仏たちで、自分が果たしている部分はわずか 1%程度の狭い範囲である」と、自身の慢心を抑えています。

太陽系に目を移します。

太陽系には、水星や地球や土星などの惑星が存在しています。確かに太陽は惑星と比べると圧倒的なエネルギーを持っています。ですから、太陽は太陽系の全エネルギーの大部分を占めていることは知られているとおりです。

しかし、彗星の源であるオールトの雲と呼ばれる無数の微惑星が太陽系を包んで支えているのです。

これらの惑星と微惑星をすべて合わせると太陽を遥かに凌ぐ(運動)エネルギーになると考えたいのです。

圧倒的なエネルギーを持つ太陽は、太陽系内の惑星や微惑星たちの暴走を抑え、秩序ある運行を司っています。そして、太陽は「太陽系の秩序の大部分を保っているのは惑星や微惑星たちで、自分が果たしている部分はわずか 1%程度の狭い範囲である」と、自身の慢心を抑えています。

私は「互いに支え合い、そして慢心を抑え合う姿」が秩序を保つ理想の姿ではないかと思います。そして、この姿は現実の社会や宗教の世界にも当て嵌^{はま}めるのではないのでしょうか。

V 具体的なケースで説明して頂けますか？

X 会社でのケースです。

社長は誰よりも社員を愛し、知識を持ち、製品開発や販売の実績を持っています。ですから、社員は、誰も「社長の徳には遠く及ばない。社長が手本である。これからも社長を支えよう」と考えるようになります。

一方、社長は「会社を支えているのは、役員や1人ひとりの社員や下請け会社の方々や消費者の方々に、私が果たしている部分はわずか1%程度のものである」と、自身の慢心を抑えています。

このような社長と社員の信頼関係によって会社の秩序が保てるのです。

学校でのケースです。

校長先生は誰よりも生徒を愛し、知識と人格を具^{そな}えています。ですから、先生方は「校長先生の徳には遠く及ばない。校長先生が手本である。これからも校長先生を支えよう」と考えるようになります。

一方、校長先生は「学校を支えているのは、先生方や生徒たちや父兄の方々や地域の人たちや教育委員会の方々に、私が果たしている部分はわずか1%程度のものである」と、自身の慢心を抑えています。

このように、お互いに支え合い信頼し合う人間関係によって学校の秩序が保たれるのです。

仏教の世界を観てみます。

仏教は釈尊が説いた教えです。ですから、仏教の布教に関して釈尊が果たした功績は大です。そして仏弟子である最澄^{さいちょう}さんや空海^{くうかい}さんや

にちれん 日蓮さんや どうげん 道元さんは、どなたも「自分の悟りや果たした功績は釈尊には及ばない」と答えるでしょうから、師匠である釈尊はすべての仏弟子を上回る愛・知恵・勇気・徳（エネルギー）を持っていることは想像できます。

しかし、釈尊 1 人では、^{こんにち}今日のように世界中に仏教を広めることはできなかった筈です。何代にも ^{わた}亘る大勢の仏弟子が、釈尊の教えを学び、書き留め、^{ほんやく}翻訳し、布教したからこそ広まったのです。

釈尊は優しい仏さんですから「^{こうけん}仏教の布教に貢献したのは私ではなく、むしろ私を支えてくれた大勢の弟子たちです。そして最も貢献したのは、弟子（僧侶）たちを支えた無数の名も無い信者さん（衆生）たちです」と、おっしゃられると思います。私が言うのですから多分ね。

このように「互いに支え合い、そして慢心を抑え合う姿」は、いつでも、どこでも当て嵌まる理想の関係ではないかと思しますので、私は、きっと主神とこれを支える神仏たちの関係も、このようなものではないかと思うのです。

V なるほど。そうしますと、**X** さんは、複数の神仏が宇宙の真理と摂理を司っている多神教を支持されますか？

X 「互いに支え合い、そして慢心を抑え合う姿」を形成するためには、複数の神仏が存在する必要があります。ですから、一神教か多神教かを問われたならば、私は多神教を支持する側に属すると言えます。

しかし、一神教も主神のお手伝いをする天使たちがいます。仏教では仏のお手伝いをする菩薩たちも広義に捉えて神仏と観ています。私は天使たちも神仏であると観ていますから、私の目にはすべて多神教に映るのです。

しかし、唯一絶対神が存在したときがあると考えます。つまり、主神しか存在しなかったときがあると思うのです。

V それはいつですか？

X 宇宙誕生（天地創造）のときです。このとき宇宙は1つの塊^{かたまり}で、銀河系が存在していなかったわけですから、主神のみが存在し、主神は唯一絶対神であったと考えます。

以下は、私の想像です。

この主神が宇宙の秩序を保つための真理を定めます。正確に表現するならば、この真理に基づいて宇宙を創造してゆきます。

主神は、無なる空間に自己の持つ膨大なエネルギーを放出し、1000億の銀河（の卵）を創ります。主神はこれらの銀河に自己の持つ99%のエネルギーを与えてゆきます。

成長した、1つひとつの銀河は、主神を手本にして（主神の定めた真理にしたがって）無なる空間に自己の持つ膨大なエネルギーを放出し、1000億の恒星（の卵）を創ります。銀河系の中心に位置するバルジは、これら恒星（太陽も含まれます）に自己の持つ99%のエネルギーを与えてゆきます。

更に1つひとつの恒星は、主神やバルジを手本にして、無なる空間に自己の持つ膨大なエネルギーを放出し、惑星や微惑星の星々を創ります。恒星はこれらの星々に自己の持つ99%のエネルギーを与えてゆきます。

このようにして、宇宙が創られていったのではないかと思います。

ですから、宇宙とそこに存在する真理は唯一絶対神によって創造されたかも知れませんが、銀河系や恒星が創られた今、主神を支え宇宙の秩序を保つための真理を銀河系や恒星の神仏たちが主役となって司っているのではないかと思います。

V なるほど。

X 私は、一神教か多神教かを考えるよりも、どのような世界が理想なのかを考えたいのです。私は「互いに支え合い、そして慢心を抑え

合う姿」が秩序を形成する源であると考えますので、神仏の世界もこのような世界であって欲しいと言ったのです。

V Yさんはどう思いますか？

Y 私は、主神は今は居られないと思います。正しくは、主神はすべての生命体の中に溶け込んでいて、1つの塊のような形では存在していないと言うべきでしょうね。

V それはどうしてですか？ 詳しく説明して頂けますか？

Y 私もXさんの意見と同じように、宇宙誕生(天地創造)のときは、主神は居られたと思います。しかし、太陽は持っているエネルギーのすべてを周りの星々に与え続け、やがて消滅する運命にあるのです。1%のエネルギーを残そうとは考えていない筈です。

太陽は主神の孫弟子ほどに当たる神仏です。孫弟子がこのように与え続けて一生を終えるのですから、主神もすべてを与え続けてやがて消滅するのではないのでしょうか？ そして、主神のエネルギー(生命)は、宇宙に存在するすべての生命体の中で生き続けていると思うのです。

V Zさんはどう思いますか？

Z 私は、自分の持っているものを周囲に与え続けると言う愛の中に神仏がいるのではないかと思うのです。ですから、神仏は、エネルギーや質量と言った形には表現できないと思うのです。全宇宙の1%のエネルギーを持っているとかと言うように、他と比較することができないと思います。神仏は、ただそこに在りて在るものなのかも知れません。

V Aさんはどう思いますか？

A 私は、Wさんの意見と同じように、誰も正確には主神の姿を表現することはできないのではないかと思います。

しかし、主神の姿を、時にはX、Y、Zさんのように捉えるのが、主

神の真の姿に最も近いのではないのでしょうか。

そして、各宗教宗派が説いている主神は同一人物（同一神仏）である筈ですから、宗教間の争いは一日も早く止めて頂き、我々（五霊）のように皆仲良くしてもらいたいと思います。

V なるほど。どなたの意見も参考になります。（五霊の）皆さんどうもありがとうございました。

2 安全なところと危険なところ

Bさんは夏休みに、小学生になる4人の子どもを連れて川へ遊びにゆきました。川幅は100mで、川を中心部ほど深く流れも急でした。

非常に暑い日でしたので、子どもたちは「川に入って遊びたい」と言い出しました。そこで、Bさんは子どもたちでも水遊びができそうな安全な場所はないかと探して歩きました。すると、深さも丁度良く、流れの全くないところで、しかも水が透き通るほど綺麗な場所がありました。

Bさんはここなら安全であろうと考え、子どもたちを手で招いて言いました。「ここで遊びなさい。くれぐれも、ここから先の深くて流れの急なところへは行ってはいけませんよ」と。

子どもたちは「わーい」と歓声を上げながら川の中に入ってゆきました。楽しそうに川の中で遊んでいた子どもたちは、どうしたことか、しばらくすると一斉に泣き出してしまいました。原因は次のとおりでした。

原因 1 川の中に捨てられた空き瓶や缶は、流れの緩やかなところに沈み留まります。Bさんが安全だと思ったところは丁度このような場所だったのです。しかも不幸なことにその上を泥が覆っていたので、

水面から覗いただけではわからなかったのです。1 人目の子どもは泥の中に沈んでいた割れた空き瓶で足を切ってしまったのです。

原因 2 下水道が整備されていない地域の台所から流れ出た^{さんぼん}残飯は、いずれは河川に流入してきます。これも空き瓶や缶と同じように、流れの緩やかなところに沈み溜まります。B さんが安全だと思ったところは丁度このような場所だったのです。しかも不幸なことにその上を泥が覆っていたので、水面から覗いただけではわからなかったのです。この残飯は泥の中の小動物の餌となります。そしてこれらの小動物を餌とするヒルたちがたくさん^{ひそ}潜んでいたのです。2 人目の子どもはこのヒルに吸い付かれてしまったのです。「チュー」って。

(ちょっぴり、余談ですが、)

子供たち B さん、いや、ママ。ヒルは夜、どうなっているんだろー？

B そうね・・・・・・・・それは、ヒルによる、かしら。

原因 3 流れの緩やかなこの場所には、長い間に深さ 30cm ほどの泥が溜まったところできていたのです。3 人目の子どもは足が泥に埋まって抜けなくなってしまったのです。

原因 4 泥が溜まっているところに足を踏み入れれば泥が巻き上がり、水が濁ります。ところがこの場所は流れがないために、一旦濁るとなかなか綺麗に戻らないのです。4 人目の子どもは、この濁った水^{いったん}を誤って飲んでしまったのです。

このように、流れが非常に緩やかで、B さんの目にはとても安全な

ところに映ったこの場所は、実はとても危険な場所だったのです。

勿論、^{もちろん}深くて流れの急なところは危険が一杯です。とても子どもたちが水遊びできる場所ではありません。

しかし、流れの全くないところも実はとても危険な場所なのです。両極端なところは共にとても危険な場所であると言う反真理の存在を子どもたちが教えてくれていたのです。このため釈尊は「中道」を、孔子は「^{ちゅうよう}中庸」と言う真理を説いたわけです。

では、どんな場所が安全なのでしょう？

子どもたちでも耐えることができる、ほど良い流れのあるところは、上流から流れてくる空き瓶や缶や残飯を押し流してくれます。また、このような場所は、足を踏み入れて仮に水が濁ったとしても、流れによって元の綺麗な水にすぐに戻ります。

そして、流れがあるために、油断すれば体勢を崩^{くず}して転んでしまいますから、子どもたちは油断することなく注意しながら遊ぶと言うことを学びながら、大人への階段を確実に歩いてゆくのです。ですから、このような場所こそ安全なところと言えるのです。

人生についても、一見、とても楽で安全と思って選んだ道が、意外に人と衝突したり、思わぬ落とし穴^{せま}が待っていたりと言うように、危険があるのです。このためイエスは「^{せま}狭き門から入れ」と言う真理を説いたわけです。

つまり、冬の風雪に耐えるほど木々の枝並みが美しくなるように、ほど良い試練と言う川の流れの中に身を置く道を選択する方が、実は安全で幸せ、あるいは魂の成長に繋がっているのです。

3 楽な環境、厳しい環境

Dさんは、C工場で、できあがった製品の品質を検査する部署に配

属していました。検査は 20 項目あって、それを 2 人が 1 組となって 5 項目ずつ担当し、計 8 人の検査員で行っていました。D さんは E さんと組んで、検査項目の 6～10 番までを担当していました。

バブル崩壊後の不景気の嵐が吹く中、幸いにも C 工場の生産台数は、^{ゆる}緩やかではあるけれども年々増加の傾向にありました。このため 1 日に^{こな}熟さなければならぬ検査台数も次第に増加してゆきました。

仕事が終わって D さんは E さんに言いました。「お疲れ様でした。今日も疲れましたね。日増しに労働条件が厳しくなるから参りますよね。ある機械を通すだけで検査が一度にできそうな、そんな便利な機械を誰か作ってくれないですかね。そうすると今よりもずっと楽になるのですけどね」と。

すると、1 カ月後、D さんが望んだような便利な検査機器が発明されました。これを使用すれば、人が行うよりも正確で^{じんそく}迅速な検査が行えるとのことで、C 工場にも配備されることになりました。「これで仕事が楽になる」と、D さんは喜びました。

ところが、6～10 番までの検査については、これを操作する社員が 1 人いれば良いことになり、D さんか E さんのどちらかが辞めなければならないことになったのです。

D さんと E さんの勤務成績に差を見出すことができなかったため、工場側は、夫と子どもを抱える E さんが職を失う方が家族への影響は大きいと判断し、独身であった D さんに辞めてもらうことにしたので、D さんもこれを了承しました。

楽な環境を思い描いた D さんは、これとは反対に、職を失って、不景気の嵐が吹く就職難の厳しい環境の中に立つことになってしまいました。

人生もこのように、楽な環境を目指して進む道は、厳しい環境への入り口へ繋がっていて、返って厳しい環境に耐えて進む道を選択する

方が、意外に楽な環境への入り口へ繋がっているのです。

この物語は、更に「4 仕事を選ぶ」へ続きます。

4 仕事を選ぶ

D さんはいつまでもくよくよできないと思い直し、仕事を探すために職業安定所を訪れました。窓口の職員 F さんは親切に該当しそうな仕事を 5 つほど紹介してくれました。

D さんはこれらの求人内容の資料を頂いて家に帰り、テーブルに並べ 5 社のうちいずれを選ぶべきか検討しました。

D さんとしては、会社の将来性も考慮して、今度こそ定年まで勤めることのできる仕事を慎重に選びたいと考えていましたので、容易に結論が得られず、数日が過ぎてゆきました。

何気なくテレビを点けたら「四国八十八箇所 お遍路の旅」が放送されていました。その中で、レポーターがお遍路さんたちに、カラオケのマイクを向け、遍路の旅に出ることになった理由を尋ねていました。お遍路さんからは、歌いながら、次の①～⑧のような答えが返ってきました。

- ① ♪ 亡くなった肉親を供養するために。♪
- ② ♪ 肉親を亡くした深い悲しみから立ち直るために。♪
- ③ ♪ 医者に見放された病気の快復を祈願するために。♪
- ④ ♪ 世俗から離れて穏やかな心を取り戻すために。♪
- ⑤ ♪ 歩けば何かを発見できるのではないかと考えて。♪
- ⑥ ♪ 弘法大師の修行された跡を辿りながら、清らかな霊場の精気に触れたいと思って。♪
- ⑦ ♪ 何か心を引かれるものがあって。♪
- ⑧ ♪ 職を失い、これからどのような仕事を選んだら良いか、その答

えを探すために。♪

Dさんは、⑧の人のように、自分と同じ悩みを持った人が、その答えを探すために遍路の旅に出ていることを知ったのです。そのとき、Dさんは強い力に突き動かされ、無性に遍路の旅に出たいと思うようになりました。

今まで四国に足を踏み入れたことのないDさんは、巡拝の作法や心得を学んでから歩き遍路に移ろうと思い、観光会社が企画した1～23番札所までのバス巡拝に参加しました。

その間、先達の^{せんだつ}Gさんや婆さんたちから巡拝の心得を親切に教えて頂きました。

23番札所で皆と別れ、結願の^{けちがん}88番札所を目指して、Dさん1人の歩き遍路の旅がスタートしました。

Dさんは、この旅で「お大師さんに出合い、これからどのような仕事に進んだら良いのか、その答えをじかに教えてもらいたい」と思っていました。

3日目あたりから、膝が^{ひざ}痛み始め階段を下るときは金剛杖に全体重を預けるようにして下りてくるほどでした。やがて、平らなところでも膝に負担を掛けないように膝を伸ばしながら^{おおまた}大股で歩かなければならないほど膝の痛みは深刻になりました。しかし、Dさんは痛みを^{こら}堪えながら、ひたすら歩き続けました。

すると、不思議なことに、次第に痛みが和らいでゆくのを感じました。完全に痛みが消えることはありませんでしたが、耐えられる痛みに変わっていました。

Dさんは神仏の^{かご}加護を強く感じるようになりました。しかし、お大師さんは姿を現してはくれませんでした。Dさんの心の中にも、どのような仕事に進んだら良いのか、の答えは浮かんできませんでした。

歩き遍路に入って〇〇日目に、Dさんは遂に八十八番大窪寺に辿り着いたのです。無事に辿り着けたことを報告するため、大師堂の前に立ちました。すると、今までの苦勞が蘇ってきました。

次の札所までの道順がわからず、人に尋ねたことも何度もありました。喉が渇き困っていたときに、お茶やジュースや果物の接待を受けたことが何度もありました。酷い雨のときは、軒先を借りて雨宿りさせてもらったこともありました。膝が痛んで思うように歩けなかったり、距離感を誤ったりして、宿坊まで辿り着けず、カラオケルームで歌いながら眠らぬ夜を過ごしたこともありました。食堂が見付からず空腹の状態で歩き続けたこともありました。蛇や狼に噛まれたり山賊にお金をとられたり、と言った怖い夢を見たこともありました。

このような苦勞を味わっただけに、それを乗り越えて無事に辿り着けた感動で涙が止めどなく流れ、Dさんはこれを抑えることができませんでした。

そしてこの感動の中で「どのような仕事に進んだら良いのか」の答えに辿り着くことができました。

この答えは、仕事を求めて職業安定所の門を叩いたときから、Dさんの目の前に存在していたのです。自分にとって都合の良い仕事を求める心が、その答えを覆い隠していたために観えなかったのです。遍路の旅に出て人々の優しさに触れ、穏やかな心を取り戻した今、その答えが観えるようになったのです。

Dさんが困ったとき、周囲を観回せば、すぐ傍に助け船を出してくれる①～⑤のような親切な方々が大勢いたのです。

① 職を失ったとき、親切に相談に乗ってくれて、該当しそうな仕事をいくつも（5つ）紹介してくれた職業安定所のFさん。

② 巡拝の作法や心得を親切に教えてくれた、先達の老人たち。

③ 次の札所までの道順を、遠くから^{カラオケのマイク}拡声器を使って、親切に教えてくれた人たち。

④ 喉が渴いていたときに、お茶やジュースや果物をくれたお接待さんたち。

⑤ 激しい雨の日に、雨宿りをさせてくれた人たち。

Dさんは、このような多くの人たちの優しさに囲まれて生きているのだと言うことに気付いたのです。

この遍路の旅も Dさんの一人旅ではなかったのです。お接待の方々との同行二人だったのです。ですから、お接待をしてくださった方々こそ、お大師さんだったのです。旅の中でお大師さんとは何度も出合っていたのです。そして、膝の痛みが和らいだのは、お大師さんが金剛杖となって Dさんを背負ってくれたお蔭^{かげ}なのだと気付いたのです。

Dさんが四国に入ったときから、いや、遍路の旅に出ようと決心したときから、お大師さんは常に Dさんを守り導いてくれていたのです。

Dさんはどんな仕事を選ぶべきなのか？

その答えは「やりたい事で、かつ自分を必要とする人たちのお手伝いができる仕事を選ぶこと」だったのです。

「どのような仕事を選ぶべきか」の答えは「どのような生き方をすべきか」の中に存在していたのです。

「私の助けを必要とする人たちのお手伝いをしながら、カラオケを楽しんで生きる」これが、Dさんが辿り着いた答えなのです。

遍路の旅に出る前の Dさんは、自分にとって最も好条件を提示してくれる会社を選ぼうと考えていました（霊格が向上しない反真理的行為）。しかし、今の Dさんは、自分を最も必要としてくれる会社を選ぼうと考えるようになりました。自分が会社を選ぶのではなく、会社から選んでもらおうと、考えが 180° 転換したのです。このような考え方が周りの多くの人々を幸せにする真理的行為なのです。

第 19 章

罪を背負う

2000 年の初夢

H さんは、1999 年から 2000 年に変わるとき、聖書を読みながら新年を迎えたいと思い、遠くで除夜の鐘^{じよ や かね}が鳴っているのを聞きながら、布団^{ふとん}に入って聖書を読んでいた。

聖書に次のように書かれているところがありました。

『夜が明ける頃、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いて居られるのを見て「幽霊だ」と言って怯え^{おび}、恐怖のあまり叫び声^{さけ}を上げた。イエスはすぐに彼らに話し掛けられた。「安心しなさい。私だ。恐れることはない」。すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、私に命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」。イエスが「来なさい」。と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気が付いて怖くなり^{こわ}、沈み掛けたので「主よ、助けてください」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ^{つか}「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。そして、2 人が乗り込むと、風は静まった。舟の中にいた人たちは「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝^{おが}んだ』と。

H さんは、この箇所を読んで「いくら神の子であるイエスであっても、水の上を歩くことは不可能ではないか。この話は信じられない。きっと作者の作り話であろう」と、思いました。

H さんは、このような疑問を持ちながら、いつしか眠りに入ってゆきました。そして夢を観ました。これが、2000 年の初夢となりました。

夢の内容は次のようなものでした。

Hさんは大きな川の岸に立っていました。岸には立て札があって次のように書かれていました。

「これが三途^{さんず}の川です。こちらの岸は此岸^{しがん}（輪廻転生を繰り返す迷いの世界、人間の世界）です。向こう岸が彼岸^{ひがん}（悟りの世界、仏の世界）です。閻魔より」と。

Hさんはワンと同じように泳ぎには自信がありましたので、犬掻き^{いぬか}で彼岸に渡ろうと、川の中に入ってゆきました。ところが、体が沈んで泳ぐことができなかったのです。これはどうしてだろうと思い、Hさんは岸に上がって体を観回しました。すると、背中に石が背負わされていることに気付きました。

Hさんは背負っていた石を降ろし^お再び川の中に入ってゆきました。ところが、これでも体が沈んで泳ぐことができませんでした。Hさんは、岸に上がって体を休めては再び川に入って犬掻きで渡ろうと繰り返すのですが、同じように沈んで、決して泳ぐことができませんでした。

Hさんは、濡れた体で途方^{とほう}に暮れながら立て札の文字を観詰めていました。すると、閻魔大王が現れHさんに優しく語り掛けてきました。
閻魔 背負っていた石は、あなたがこの世で犯してきた罪の重さを表しているのです。この石を背中から降ろすことはあなたの自由です。つまり「犯した罪は、世の中が悪いために、やむを得ず犯したもので自分の所為^{せゐ}ではない」と言い訳することも自由だと言うことです。

しかし、あなたの行為によって迷惑を被った人や動物たちがいる限り、あなたの罪はこの世に現に存在しているのです。つまり、石が此岸に残っている限り三途の川を渡ることは決してできないのです。

H 閻魔さん。私は彼岸に渡ることができない人なののでしょうか？

閻魔 Hさん。あなただけが石を背負っているのではないのです。誰

もが罪を犯していて、必ず石を背負っているのです。罪を償い、石を消し去ることができれば、誰でも彼岸に渡ることが許されるのです。

H どうやったら石を消すことができるのですか？

閻魔 あそこに見える道を石を背負いながら進んで行ってください。あれは「心を磨くための修行の道」です。そして、ぐるっと一周する形で、この立て札のところに繋がっているのです。

修行の旅を終え、無事にここへ戻ってくることができたならば背中の石は消えている筈です。

H わかりました。それでは行ってきます。

閻魔 Hさん。ちょっと待ってください。修行の道^{みちのり}則は長くて、そして決して平坦^{へいたん}ではないのです。必要なものを5つ言ってください。用意してあなたに差しあげます。これらは、修行の道を歩くときに必ず役に立つ筈です。

H それでは、次の5つのものをください。

- ① 雨具となる傘をください。
- ② 怪我をしたときのために塗り薬をください。
- ③ 険しい道を歩くために杖をください。
- ④ 喉が渴いたときのために水の入った水筒をください。
- ⑤ お腹が空いたときのために弁当をください。

閻魔 わかりました。あなたが望んだものは、すべてこの頭陀袋^{ずだぶくろ}に入っています。これを首に下げて行ってください。

H では行ってきます。

Hさんは、閻魔大王から言われた道を歩み始めました。

しばらく歩いたところで、雨が激しく降ってきたので、Hさんは頭陀袋から傘を取り出して広げました。すると、背中に石を背負い、首から頭陀袋を下げた修行者（以下の登場人物はすべてこのような姿をした修行者です）のIさんが木の下で雨宿りをしていました。

とても激しい雨でしたので、大粒の雫^{しずく}が枝を伝って I さんの体を濡らし、I さんは寒さに震えていました。H さんは近づいて「私の傘に入ってください」と言いました。

H さんと I さんは1つの傘の中で、仲良く並んで歩いてゆきました。すると、突然、強い風が吹き、折れた枝が飛んできて傘に当たり、傘に穴が空いてしまいました。穴から雨の雫^{しずく}が落ちてきました。

H さんは「I さんは先ほどまで雨に濡れ、体が冷え切っている。これ以上濡れて風邪^{かぜ}をひいては大変だ」と思い、穴の空いた傘の部分を自分の方に回しました。

やがて、雨が上がり青空が戻ってきました。H さんは傘を I さんに差しあげて、修行の道を進んでゆきました。

しばらく歩いたところで、道の窪^{くぼ}みに足をとられて H さんは転んで膝^{ひざ}をすりむいてしまいました。頭陀袋から薬を取り出して膝に塗ろうとしたら、同じように転んで倒れていた J さんが「私も膝をすりむいてしまいました。できたら私にもその塗り薬を少し分けてもらえませんか?」と言ってきました。H さんは快く引き受け、J さんの膝に薬を塗って上げました。そして、H さんも自分の膝に薬を塗りました。それでも薬が半分ほど余ったので、H さんはそれを J さんに差しあげて、修行の道を更に進んでゆきました。

やがて、険しい山道に差し掛かりました。先ほどすりむいた膝が少し痛むので、H さんは頭陀袋から杖を取り出しました。

山の中腹にきたところで、持っていた杖が折れてしまったらしく、K さんが足を引きずるようにして歩いていました。杖は H さんにとっても痛む膝を支える大切なものでしたが、K さんがとても気の毒に思えてならなかったので、H さんは杖を K さんに差しあげました。そして、修行の山道を痛む膝を抱えながら登ってゆきました。

日差しが強くなってきたために喉の渴きを覚えた H さんは、水を飲

もうと頭陀袋から水筒を取り出しました。すると、喉が渴いて道に座り込んでいた L さんが「できたら水を少し分けてください」と言ってきました。H さんは快く引き受け、先に L さんに水を飲んでもらいました。そして H さんも水を飲みました。それでも水が半分ほど余ったので、水筒を L さんに差しあげて、修行の道を更に進んでゆきました。

やがて、H さんは山の頂上に辿り着きました。素晴らしい景色が広がっていました。ほっとしたら、急にお腹が空いてきたので、この景色を観ながら食事にしようと思い、頭陀袋から弁当を取り出しました。すると、お腹を空かせて座り込んでいた M さんが「できたら私に少し分けてください」と言ってきました。H さんは快く引き受けました。

弁当を開けたらパンと焼き魚が入っていました。H さんはそれぞれ半分に分けようとしたら、いずれも 6 対 4 に切れてしまいました。H さんは「M さんは相当お腹が空いている様子なので L さんに大きい方を食べて頂こう」と思い、自分は小さい方を取って残りを M さんに差しあげました。

食事を終えて H さんは修行の道を進んでゆきました。

しばらくゆくと、足を痛めて道に座り込んでいる N さんに出会いました。差しあげる塗り薬も、杖も今の H さんにはありませんでしたが、このまま見捨てて通り過ぎることはできないと考えた H さんは、N さんを背負ってゆくことにしました。

やがて、急に背中が軽くなったので、H さんが振り向くと、背負っていた筈の N さんの姿も石もなくなっていることに気付きました。そして、正面に目を戻すと、そこには三途の川が広がっていました。いつの間にか、H さんは立て札のところに戻ってきていたのです。閻魔大王が H さんの前に姿を現し語り掛けてきました。

閻魔 H さん。あなたは、見事に心の修行を成就し、この世で犯した

罪を浄め、背負っていた罪の象徴である石を消し去ることができたのです。

修行に旅立つときに、あなたの望むものを頭陀袋の中に入れて手渡しました。この頭陀袋の中身は、どれも修行の旅に欠かせない大切なものばかりでした。あなたにとって命の綱とも言えるものです。しかし、これこそが、あなたの心を縛ってきた欲望であり、この世で犯してきた罪を表していたのです。つまり、この重さはあなたが背負っていた石と同じ重さなのです。そして、これを必要とする人を、私はあなたの前に次々に現して、あなたが譲れるかどうかを問うたのです。あなたが、譲った分に応じて背中の石も軽くなった筈です。

あなたは、次の①～⑥の順序で、六道輪廻^{ろくどうりんね}の世界に登り、悟りの世界に入ってきたのです。

① 傘を I さんに譲り、あなたの魂は地獄から餓鬼の世界へ入ってきました。

② 塗り薬を J さんに譲り、餓鬼から畜生^{ちくしょう}の世界へ入ってきました。

③ 杖を K さんに譲り、畜生から修羅^{しゅら}の世界へ入ってきました。

④ 水の入った水筒を L さんに譲り、修羅から人^{にん}の世界へ入ってきました。

⑤ 弁当を M さんに譲り、人から天^{てん}の世界へ入ってきました。

しかし、H さん、そこからの修行が大切なのです。なぜなら、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天は、依然として六道輪廻の迷いの世界である此岸に他ならないからです。

私は、あなたに 5 つのものを与え、地獄から天界まで導いてきました。私があなたに与えられるのは 5 つまでなのです。それから先、つまり、六道の世界から脱して三途の川を渡るためにはどうしたら良いのかと言う答えは、H さん自身が探し出さなければならなかったのだ

す。

私は、あなたに①傘、②塗り薬、③杖、④水、⑤弁当を差しあげました。これらを①I、②J、③K、④L、⑤Mさんに譲って、この時点で、頭陀袋の中は空っぽになりました。

一見空っぽに観える頭陀袋の中には、神仏の目から観れば、まだ、傘、塗り薬、杖、水、弁当も残っていたのです。これが実相の姿なのです。

なぜなら、Hさんは、傘、塗り薬、杖も使ったのです。水も飲んだし、弁当も食べたのです。これらの恩恵はHさんの体の中に生きるエネルギーとなって存在していたのです。つまり、これらの恩恵が齎すエネルギーが頭陀袋の中に残っていたのです。

私は、Hさんが、傘、塗り薬、杖を使ったことや、水を飲んだり弁当を食べたりしたことを非難しているのではないのです。これらの物を使ったり食したりしないでは、この修行の旅（人生）を歩むことができないからです。

私は、Hさんに「生きることによって、誰もが、知らないうちに少しずつ、神仏から与えられた塗り薬や水などの恩恵を頭陀袋の中に蓄えてしまっていて、そのエネルギーを人に^{えこう}回向（役立てることを）していない」と言う人間の^{げんざい}原罪とも言うべき姿、実相の姿を観詰めて欲しかったのです。

あなたが頭陀袋の中身を使い切ったときに、私はあなたの前に、足を痛めて道に座り込んでいるNに姿を変えて現れたのです。あなたは、膝の痛みが残っていたにも^{かかわ}拘らず、私を観捨てずに背負ってくれました。

あなた自身が受けた塗り薬や水などの恩恵・エネルギー（頭陀袋の中に蓄えられていたエネルギー）を、私を背負うことによって使い切ってくれたのです。このとき、神仏の目から観て初めて頭陀袋が空っ

ぽになったのです。そして、背中の石も消え去ったのです。

⑥ 膝の痛みに耐え、あなたの身を私に捧げた功德によって、あなたの魂は六道輪廻の世界から抜け出すことができたのです。

H さん。あなたは自由に三途の川を渡って彼岸の世界に入ることができます。さあ、自慢の犬掻きで彼岸の世界に渡ってください。

H さんは少しずつ川の中に入ってゆきました。今度は体が沈むことなく自由に泳ぎ回ることができました。H さんは彼岸を目指して犬掻きを続け、遂に辿り着きました。

そこは、美しい花々が咲き誇り、^{ほこ}芳^{かぐわ}しい香りと、清らかな音楽が流れる光の世界でした。

H さんは「光の温泉」に浸かりながら、これまでの疲れを癒しました。百味のご馳走^{ちそう}も味わいました。カラオケもコメディ映画も楽しみました。

十分疲れを癒した H さんは、この彼岸の世界である極楽浄土を司っている阿弥陀如来が法を説いている宮殿に入ってゆきました。阿弥陀如来は、H さんでも理解できるよう、たとえ話を言いながらわかり易く法を説いていました。

H さんはこの教えを聞いて、日常の生活の中で見過ごしてきた 1 つひとつの現象の中に、膨大な神仏の教えが存在していることを知ったのです。この日から H さんは毎日、阿弥陀如来の説く法を聞くために宮殿を訪れました。そして学んだことを実践し、体で理解するよう努めました。

やがて 2 千年が経過しました。H さんは次第に、此岸の世界に戻って、此岸の人たちが背負っている罪を自分が背負うことで、彼らがこの彼岸の世界に渡ってくることができるならば、そうしたいと思うようになりました。H さんは阿弥陀如来の前に出て、この思いを伝えま

した。

H 阿弥陀さん。私はこの彼岸の世界で、何不自由なく過ごさせて頂いております。そして、毎日、阿弥陀さんのありがたい説法も聞かせて頂きました。これ以上の幸せはないと思える日々をすでに 2 千年も味わってきました。

しかし、私が彼岸の世界に渡ってきってから 2 千年も経過すると言うのに、此岸の世界で私と共に修行の道を歩いていた I さんや J さんたちは未だに彼岸の世界に渡ってきていません。私は、この幸せを此岸の世界で苦しんでいる彼らにも味わってもらいたいのです。私が此岸の世界に戻って彼らの罪を背負いますから、代わりに彼らを彼岸の世界に招いてくださるようお願いします。

阿弥陀 え！ あなた自らですか？

H え！

阿弥陀 いや、わかりました。H さん。あなたの願いを聞いて差しあげます。あなたが此岸の世界に戻ることを許します。

H ありがとうございます。それでは行ってきます。

阿弥陀 H さん。ちょっと待ってください。此岸の世界で苦しむ人たちを救う道則は長くて、そして決して平坦ではないのです。必要な物を言ってください。用意して差しあげます。それらは、必ず役に立つ筈です。

H それでは、次の 5 つの物をください。

① 傘がなくて困っていた人がいました。枝が当たっても決して破れることのない丈夫な傘をください。できれば心の中に降る雨も^{しの}凌げるものを。

② 怪我をして困っていた人がいました。どんな怪我でも治すことができる塗り薬をください。できれば心の傷も癒すことができるものを。

③ 杖が折れて困っていた人がいました。決して折れない金剛杖をく

ださい。できれば折れた心も支えることができるものを。

④ 喉が渴いて困っていた人がいました。すべての人の喉の渴きを潤^{うるお}すことのできる水の入った水筒をください。できれば心の渴きも潤すことができるものを。

⑤ お腹が空いて困っていた人がいました。すべての人の空腹を満たすことのできる弁当をください。できれば愛に飢えた心も満たすことができるものを。

阿弥陀 わかりました。その他に必要な物はありませんか？

H え！ 要求できるのは5つまでではないのですか？

阿弥陀 彼岸の世界では、いくらでも要求できるのです。

H 此岸の世界では、要求できる品数^{しなかず}に制限があったのですが。

阿弥陀 10人いても9個のまんじゅうしか用意されていないように、此岸の世界では要求できる品数に上限があります。なぜなら、彼らの欲望は際限がないから、神仏たちがこれを抑える必要があるからです。

此岸の世界にいた頃のHさんも、閻魔さんから修行の旅に必要な物を尋ねられたとき、自分に必要な視点から、5つの品を選びましたね。

しかし、彼岸の人たちは、今のHさんのように、人に必要な物は何かと言う視点で品を選んでいて、自身の欲望は入り込んでいないのです。ですから、神仏たちは、真に人を救おうと思っている人たちにはむしろ、その願いを成就させるために必要な物を際限なく与えるのです。

しかし、ここで説明を加えて置きますが、実は此岸の世界でも、その人にとって必要な物はすべて神仏たちによって用意されているのです。つまり、10人いれば10個のまんじゅうが用意されているのです。しかし、人間の目では9個しか見えないのです。10個目のまんじゅうは神仏の目と心をもって観たときに初めて観えてくるものなのです。

Hさんが六道の迷いの世界を脱するためには6つのものが必要であ

ると観てとった閻魔さんは、一見すると H さんにはこの内の 5 つの品しか用意しなかったかも知れません。しかもこれらはすべて形があり目に見える物です。しかし、閻魔さんは 6 つ目の品も、ちゃーんと用意していたのです。それは何であったのかを観てゆきます。

閻魔さんが用意した 5 つの品は、心を磨くための修行の旅に必要な物ばかりです。ですから、これらは心を磨くための道具です。この道具を使う機会（道場）が必要なのです。その機会がなければ心を磨く修行ができないからです。

そして、閻魔さんは常に H さんの^{そば}にいて、次の①～⑥のように、試練を与えると同時に修行が無事に成就できるよう観守っていたのです。

① 閻魔さんは、激しい雨を降らせ、そして傘に穴を空けました。傘を持たない I さんを見捨てずに傘の中に入れてあげることができるかどうか、そして、穴の空いていない好ましい方を I さんに譲れるかどうかと言う試練を与えたのです。同時に、その試練は H さんが我慢して耐えれば、耐えることのできるぎりぎりのものに和らげられていたのです。

② 閻魔さんは、道に窪み（人生の障害物のようなもの）を作り、修行の旅人たちを^{つまず}かせました。自分も怪我（人生に^{らくたん}落胆・未来に失望・心に傷を負う）をしている状態であっても、転んで倒れている J さんを見捨てずに塗り薬を譲ることができるかどうかと言う試練を与えたのです。同時に、H さんの怪我也、これからの修行に耐えられるぎりぎりのものに和らげられていたのです。

③ 閻魔さんは、旅人たちの前に険しい山道を用意しました。自分も痛む膝を抱え、辛い山道で心が折れた状態であっても、足を引きずるようにして歩いている K さんを見捨てずに杖を譲ることができるかどうかと言う試練を与えたのです。同時に、H さんの膝の痛みも、これ

からの修行に耐えられるぎりぎりのものに和らげられていたのです。

④ 閻魔さんは、誰もが喉の渇きを覚えるような強い日差しを旅人たちに注ぎました。自分も喉・心が渇いた状態であっても、水を L さんに分けてあげられるかどうかと言う試練を与えたのです。同時に、その試練は H さんが耐えられるぎりぎりのものに和らげられていたのです。

⑤ 閻魔さんは、山頂に辿り着いたとき旅人がほっとして、必ずお腹が空くように場面を設定しました。自分もお腹が空いていた状態であっても、M さんに弁当の半分を譲れるかどうかと言う試練を与えたのです。同時に、その試練は H さんが耐えられるぎりぎりのものに和らげられていたのです。

⑥ 閻魔さんは、与えた傘、塗り薬、杖、水、弁当を H さんから没収しました。何も持たない H さんが、膝の痛みに耐えて、自分の身を使って、N さんに扮した閻魔さんを背負えるかどうかと言う試練を与えたのです。同時に、その試練は H さんが耐えられるぎりぎりのものに和らげられていたのです。

閻魔さんが用意した 6 つ目の品は何か？ それは、H さんの心を磨くための修行の道場であり、H さんが乗り越えることのできるぎりぎりの課題や試練です。これらのものは、神仏の目から観れば、閻魔さんの慈悲心・愛に他ならないのです。ですから、閻魔さんの慈悲心あるいは閻魔さん自身が、H さんのために用意した 6 つ目の品です。

同様に、一見、10 人いて 9 個のまんじゅうしか用意されていないようにも、目には見えないけれども 10 個目のまんじゅうが存在しているのです。では、この 10 個目のまんじゅうは何か？

9 個のまんじゅうを 1 つに丸めて、改めてこれを 10 個に分けたり、まんじゅうをそれぞれ 10 等分して 90 個にしたものを、1 人が 9 個ず

つ取ったりするとか、9個のまんじゅうを10人で分けて食べる数学的方法は、ちょっと知恵を働かせればいくらでも思い付くほどあるものです。

問題なのは、10人全員が、その分割方法で納得するかどうかなのです。

中には、次の①～④のように反対する幼児のような未熟でお馬鹿な人が出てこないとも限らないのです。

① 私は（働きづめで）2日間何も食べていないから、できれば1個丸々食べたい。とか。

② 10人が出し合って9個しか集まらないと言うことは、数学的に検証すれば1つも出していない人がいる筈^{はず}だ。私は2個出したのだから、少なくとも1個を食べる権利はある。とか。

③ 子どもと大人とでは食べる量が違うのだから、大人である私は1個丸々食べたい。とか。

④ いつも一生懸命皆のために働いて貢献^{こうけん}している者が優先して食べるべきで、役に立っていない者が我慢すべきだ。とか。

このように、均等に分割する方法に、1人でも反対するお馬鹿さんが登場すると、もう収拾^{しゅうしゅう}がつかないのです。

9個のまんじゅうを10人で分かち合うことは、その場にいる10人全員に等しく修行が掛かっているのです。10人がすべて冷静になって成熟した神仏の心に成らなければ9個のまんじゅうを分かち合うことは絶対にできないのです。

もし、9個のまんじゅうを10人で分かち合うことができたならば、そこには、真理的行為に対する神仏からのご褒美^{ほうび}と言う名の摂理の働きによる、愛や平和や調和や秩序や希望と、分かち合って食べたまんじゅうの美味^{びみ}が存在しているのです。これこそが10個目のまんじゅうなのです。

目に見える 9 個のまんじゅうは、お腹を満たしてくれますが、10 個目のまんじゅうは心を満たしてくれるものなのです。

このように、此岸の世界でも、その人にとって悟るために（彼岸に渡るために）必要なものはすべて神仏たちによって用意されているのです。

話を戻しますが、H さんが、此岸の世界で苦しむ人たちを救うために要求した、破れない傘、どんな怪我でも治すことができる塗り薬、折れない金剛杖、すべての人の喉の渇きを潤すことのできる水、すべての人の空腹を満たすことのできる弁当は、この頭陀袋の中に入っています。これをあなたに差しあげます。これらは、必ず役に立つ筈です。

H ありがとうございます。

阿弥陀 H さん、この他には必要なものはないのですか？

H 私の知恵では、此岸の世界で苦しむ人たちを彼岸の世界に導くために、この 5 つの品以外に何が必要なのか、思い付かないのです。どうか、阿弥陀さんの目から観て、不足しているものを私に授けてください。

阿弥陀 わかりました。・・・・・・では、（旅・修行・人生のお供^{とも}に）カラオケのマイク、いや、舟を授けます。

H さん。あなたは、此岸の世界の人たちの罪を背負うと言いました。でも、罪の象徴である石をあなたが背負っても、代わりにあなたがその罪の償いを終えるまでは、石は消えないのです。つまり、石が此岸に存在している限り、此岸の人たちは決して三途の川を泳いで渡って彼岸の世界に辿り着くことはできないのです。

そんなときに、この舟が役に立つのです。この舟はどんなに罪の重い人が乗っても決して沈むことがなく大舟^{おおぶね}に乗った気持ちにさせる丈

夫な舟です。この舟に乗って此岸の世界に行って、此岸の人たちを乗せて戻ってきてください。

H ありがたく使わせて頂きます。では行ってきます。

阿弥陀 気を付けて行ってらっしゃい。第一霊さん。

Hさんは舟に乗って此岸の世界に戻り、岸の立て札に舟を繋ぎ止めました。そして阿弥陀如来から頂いた頭陀袋を首に下げて、心を磨くための修行の道に入ってゆきました。

しばらく歩いたところで、雨が激しく降ってきたので、Hさんは頭陀袋から傘を取り出して広げました。すると、2千年前と同じように、Iさんが木の下で雨宿りしていました。Hさんが近づいて尋ねました。

H 以前私が差しあげた傘はどうしたのですか？

I あのかときは大変お世話になりました。頂いた傘は大切に使わせて頂いたのですが、何年も使っているうちに、何度も風に飛ばされてきた枝に当たってぼろぼろに破れて使えなくなってしまったのです。

H このような雨の降るところで2千年も過ごしていたのですか？

I そうなのです。私はこの雨の降る世界からどうしても抜け出せないのです。どうか私を彼岸の世界へ連れて行ってください。

H わかりました。あなたを必ず彼岸の世界に渡らせて差しあげます。私と一緒に修行の道を進んでゆきましょう。この傘は決して破れない傘です。Iさんはこの傘を持ってください、その代わり背中の石は私が背負いますから(この2つの重さは同じ。以下の交換物も同じ重さ)。

やがて、雨が上がり青空が戻ってきました。Iさんにとって2千年ぶりの青空でした。

しばらく行ったところで、道の窪みに足をとられてIさんが転んで膝を擦りむいてしまいました。Hさんが頭陀袋から薬を取り出して膝に塗ってあげようとしたら、2千年前と同じように転んで倒れていた

J さんが「私も膝を擦りむいてしまいました。できたら私にもその塗り薬を少し分けてもらえませんか？」と言ってきました。Hさんは近づいて尋ねました。

H 以前私が差しあげた塗り薬はどうしたのですか？

J あのかきは大変お世話になりました。頂いた薬は大切に使用して頂いたのですが何度か使っているうちになくなってしまったのです。

H このようなところで2千年も過ごしていたのですか？

J そうなのです。私は歩き始めるとすぐに窪みに足をとられて怪我をしてしまって、なかなか前に進めないのです。それでこの世界からどうしても抜け出せないのです。どうか私を彼岸の世界へ連れて行ってください。

H わかりました。あなたを必ず彼岸の世界に渡らせて差しあげます。私たちと一緒に修行の道を進んでゆきましょう。この塗り薬はどんな怪我でも治すことができるのです。Jさんはこの薬を持ってください、その代わり背中の石は私が背負いますから。

やがて、険しい山道に差し掛かりました。山の中腹にきたところで、持っていた杖が折れてしまったらしく、2千年前と同じようにKさんが足を引きずるようにして歩いていました。Hさんは近づいて尋ねました。

H 以前私が差しあげた杖はどうしたのですか？

K あのかきは大変お世話になりました。頂いた杖は大切に使用して頂いたのですが、使っているうちに折れてしまったのです。

H このようなところで2千年も過ごしていたのですか？

K そうなのです。やがて杖は折れてしまうために、この世界からどうしても抜け出せないのです。どうか私を彼岸の世界へ連れて行ってください。

H わかりました。あなたを必ず彼岸の世界に渡らせて差しあげます。

私たちと一緒に修行の道を進んでゆきましょう。この杖は決して折れない金剛杖です。Kさんはこの杖を持ってください、その代わり背中の石は私が背負いますから。

日差しが強くなってきたため喉の渇きを覚えたHさんたちは、水を飲もうと頭陀袋から水筒を取り出しました。すると、2千年前と同じように喉が渇いて道に座り込んでいたLさんが「できたら水を少し分けてください」と言ってきました。Hさんは近づいて尋ねました。

H 以前私が差しあげた水筒はどうしたのですか？

L あのとときは大変お世話になりました。水は大切にに使わせて頂いたのですが、この場所はなかなか雨が降らないのです。ですから、そのうちに水はなくなってしまったのです。

H このようなところで2千年も過ごしていたのですか？

L そうなのです。私は歩き始めるとすぐに喉が渇いてしまって道に座り込んでしまうのです。それでなかなか前に進めず、この日差しの強い世界からどうしても抜け出せないのです。どうか私を彼岸の世界へ連れて行ってください。

H わかりました。あなたを必ず彼岸の世界に渡らせて差しあげます。私たちと一緒に修行の道を進んでゆきましょう。この水筒の水は、すべての人の喉の渇きを潤すことができるのです。Lさんはこの水筒を持ってください、その代わり背中の石は私が背負いますから。

やがて、Hさんたちは山の頂上に辿り着きました。素晴らしい景色が広がっていました。ほっとしたら、急にお腹が空いてきたので、この景色を観ながら食事をしようと思い、頭陀袋から弁当を取り出しました。すると、2千年前と同じようにお腹を空かせて座り込んでいたMさんが「できたら私に少し分けてください」と言ってきました。Hさんは近づいて尋ねました。

H 以前私が差しあげた弁当はどうしたのですか？

M あのと看は大変お世話になりました。弁当は少しずつありがたく頂いたのですが、この場所は周りの景色を^{さえぎ}遮る草や木々も生えていないので、食べることのできる草も木の実もとれないのです。ですから、そのうちに頂いた弁当はなくなってしまったのです。

H このようなところで2千年も過ごしていたのですか？

M そうなのです。私は立ち上がろうとすると、すぐにお腹が空いてしまって、また道に座り込んでしまうのです。それでなかなか前に進めず、この山頂からどうしても抜け出せないのです。どうか私を彼岸の世界へ連れて行ってください。

H わかりました。あなたを必ず彼岸の世界に渡らせて差しあげます。私たちと一緒に修行の道を進んでゆきましょう。この弁当は、すべての人の空腹を満たすことができるのです。

弁当を開けたら1個のパンと1匹の焼き魚が入っていました。**H**さんたちはそれらを天に掲げ感謝しながら仲良く分け合って食べましたが、どんなに食べてもなくなることはありませんでした。大食漢の**M**さんもさすがに満足そうに立ち上がりました。残った魚の骨を集めたら小さな山ができあがるほどでした。

H **M**さんは弁当を持ってください、その代わり背中の石は私が背負いますから。

Hさんたちは、どこまでもひたすら修行の道を進んでゆきました。雨の日には、**I**さんが傘を広げ、皆で仲良くこの中に入って道を進んでゆきました。転んで怪我をする人がいたときには、**J**さんが薬を塗ってあげました。険しい山道のところでは、**K**さんが一番辛そうな人に金剛杖を貸していました。喉が渴いた人には**L**さんが水を飲ませていました。お腹が空けば、**M**さんが持っている弁当を、皆で仲良く食べました。

そして、^{ついで}遂に H さんたちは、舟の繋がっている立て札のところに辿り着いたのです。H さんは皆に言いました。

H ここで皆さんとはお別れです。皆さんは、この舟に乗って、阿弥陀さんが待っている彼岸の世界に渡ってください。この舟は必ず皆さんを無事に彼岸に運んでくれる筈です。

I さんたち 5 人は、舟に乗り込んで彼岸の世界を目指して漕ぎ出しました。H さんは、5 人が無事に彼岸の世界に辿り着くことを神仏に祈りながら彼らを見送っていました。次第に舟の姿は小さくなり、やがて視界から消えてゆきました。

H さんは、背中を振り返ると、依然として 5 人の罪の象徴である石が残っていたので、これを消し去るために再び修行の道に入ってゆこうとしました。そのとき、閻魔大王が姿を現し H さんと呼び止めました。

閻魔 H さん。もうこれ以上、修行の道を歩む必要はありません。あなたも、彼らの後を追って彼岸の世界へ渡ってください。

H 閻魔さん。ありがとうございます。私は阿弥陀さんのおられる彼岸の世界で 2 千年間も過ごさせて頂いたのです。もうそれで十分です。

この此岸の世界で迷いながら苦しんでいる人がいる限り、私はこの人たちを観捨てて、彼岸の世界に渡ることはできません。それに、私にとってここは、彼岸の世界と同じ、あるいはそれ以上の喜びを与えてくれるところなのです。

確かに彼岸の世界は、美しい花々が咲き誇り、芳しい香りと、清らかな音楽が流れる光の世界でした。百味のご馳走も味わいました。

しかし、この此岸の世界で I さんたちと、1 つの傘で雨を凌ぎ、同じ薬で互いに傷口を癒し合い、1 つの杖を互いに譲り合い、同じ水筒の水を飲み、弁当を分け合いながら食べたときの喜びは、彼岸の世界

で味わった喜びと比較しても決して劣るものではありません。私には、此岸も彼岸も差はないのです。

私は、三途の川の両岸である此岸と彼岸は、実は三途の川を囲むように繋がっているのではないかと思います。ですから、三途の川はガリラヤ湖のような湖になっているのではないかと考えているのです。

私はここに残り、1人でも多くの方が彼岸の世界に渡れるよう、その橋渡しをしたいと思います。そして、どうしても渡れない人がいたならば、この此岸の世界でも、互いに分かち合えば彼岸の世界と同じ喜びを味わうことができる浄土^{じょうど}の世界であることを説きたいと思います。

閻魔 Hさん。もう良いのです。あなたは、この此岸の世界で成すべきことをすべて終えたのです。Iさんたちの罪は、すべての人間の原罪の象徴だったのです。これをすべてあなたは背負ったのです。ですから、もう、この此岸の世界に残っている人はいないのです。あなたが最後なのです。そして私の役目も終わったのです。私と一緒に彼岸の世界に渡ってゆきましょう。

H 私の背中には、まだ石が残っているのです。この状態でも、犬掻きができるのでしょうか？

閻魔 あなたは水に触れることなく三途の川を飛んでゆけるのです。

H 本当ですか？

閻魔 本当です。背中を観てください。

Hさんはゆっくりと振り返りました。石が背負わされている筈の背中には大きな翼が生えていたのです。

H 閻魔さん。これはどうしたことでしょう？

閻魔 人が犯した罪は、その人自身にとっては、上から押さえつける重りとなって^の押し掛かってくるものです。マイナスの徳分のようなも

のです。

ところが、人のマイナスの徳分（罪）を何の見返りも求めず背負ったとき、これが反転して背負った人にとっては、プラスの徳分（翼）となるのです。

罪 $\xrightarrow{\text{人の罪を背負うと反転して}}$ 喆 となって罪の文字

が翼に変わるのです。

イエスは、人類が犯した原罪を背負っているのです。ですから、これらの罪は彼の背中で翼となっているのです。だからイエスは水の上を歩くことができたのです。

信仰が篤^{あつ}い人とは、すべての人を救いたいという思いが強い人なのです。

ペトロが沈み掛けたのは、このときのペトロは、まだイエスほど、この思いが強くなかったからなのです。

H さん。いや第一霊さん。さあ、私と一緒に彼岸（あなた）の世界に渡ってゆきましょう。

H さんは、犬掻きしたい気持ちを抑えて閻魔大王と共に三途の川を飛んで彼岸の世界に入ってゆきました。

ここで、H さんは夢から覚め、腕時計を観たら 1 月 3 日でした。これが 2000 年のとても笑える初夢でした。

第 20 章

後にいる者が先になり、先にいる者が後になる

1 南泉和尚、猫を斬る

Oさんは「碧巖録」を読んでいました。これは、中国の禅の高僧たちの物語の中から、雪竇重頤が選んだ公案 100則に宋の圓悟克勤が後に注釈を加えたもので、大切な禅のテキストとなっているものです。

その第 63 則に「南泉和尚、猫を斬る」という公案が書かれていました。内容は次のようなものでした。

『南泉禅院の東西両院の雲水（修行僧）たちが、1匹の猫を挟んで「猫にも仏性があるのか、それともないのか」について言い争っていた。そこへ、農作業の作務を終え、手に鎌を持った南泉和尚が通り掛かり、その猫を捕まえて言った。「猫を挟んで、そのようなことを言い争う暇があるならば、道に適う一句を言ってみよ。もし、言うことができたならば、この猫は斬らない。しかし、言うことができなかったときは、猫を斬る」と。これを聞いた雲水たちは、皆驚いた。雲水たちは、猫の命が掛かっていないときには、自由に自分の考えを言っていたが、猫の命が掛かった途端に、誰も一言も発することができなかった。南泉は、しばらく待っていたが、一句も出てこないのを観届けると、猫を斬った。

夜になって、高弟の趙州が戻ってきた。そこで、南泉は趙州に昼間のでき事を話した。それを聞くと、趙州は草履を脱ぎ、それを頭の上に乗せて出て行った。これを観た南泉は「もし、昼間、趙州がいたならばあの猫を救うことができたのに」と言った』。

Oさんはこれを読んで、僧侶は戒律によって殺生することを厳しく禁じられている筈なのに、高僧である南泉が、なぜ猫を斬ったのか、

その理由がわかりませんでした。Oさんは「たとえ弟子たちに法を説く名目があっても、猫を斬るべきではなかったのではないか」と思いましたが、何か大きな理由があるのかも知れないと考え直し、その理由を探ろうと、修行を重ねました。やがて1年が経過しました。しかし、依然として理由はわかりませんでした。思い悩んでいると、仏がOさんの前に姿を現してくれました。

仏 Oさん。何をそんなに思い悩んでいるのですか？

O 南泉がどうしてニャンコを斬ったのか、その理由がわからないのです。

仏 Oさん。趙州がなぜ、草履を頭の上に乘せて出て行ったのかわかりますか？

O わかりません。

仏 では、猫を捕まえた南泉が「道に適う一句を言ってみよ」と言った場面に、もしOさんがいたら、何と答えますか？

O 何と答えて良いのか、わかりません。

仏 Oさん。これらの答えがわかったときに、南泉がどうして猫を斬ったのか、その理由を話してあげるニヤーン。

仏はそう言って姿を消してゆきました。

読者の皆様も「趙州がなぜ、草履を頭の上に乘せて出て行ったのか？」そして南泉が「道に適う一句を言ってみよ」と言った場面に、もし皆様がいたら、何と答えますか？ この公案の答えを探ってください。

答えがわかった方は、以下を読み進めてください。

それから、1年が経過しました。その間、Oさんは、この公案を1日も怠ることなく考え続けました。そして遂に、Oさんなりの答えに

辿り着きました。再び仏が O さんの前に姿を現しました。

仏 答えがわかりましたか？

O 私なりの答えには、辿り着きました。

仏 そうですか。それでは聞かせてください。

O ^{さんせんそうもく}山川草木に至るすべてのものが、仏の法を説いていると観ることが出来ますから、仏性のないものは存在しません。したがって、議論するまでもなく猫にも仏性は存在しているのです。しかし、この仏性を活用しなければ仏性があるとは言えません。ものを持っていても、それを活用しなければ持っていないのと同じだからです。

たとえば、次の①～⑤のとおりです。

① 自動車を持っていても、これを全く活用しなければ、持っていない人と同じなのです。むしろ、持っていると返って、維持費が掛かる上、車庫のスペースも必要です。さらに、処分するときには、その経費も必要となります。

② お金を持っていても、この内の△△円を死ぬまで活用しなければ、この△△円はなかったのと同じです。

③ 両親から買ってもらった玩具^{おもちゃ}を子どもたちが全く活用しなかったならば、この玩具は初めからなかったのと同じです。

④ ♥♥の知識がありながら、これを全く活用しなかったならば、♥♥の知識を全く持たない人（たとえば私）と同じです。

⑤ 仕事のできる部下（あるいは役に立つ夫）がいても、その能力を見抜けず、全く活用しなかったならば、この部下（夫）はいないのと同じです。

このような観点から「趙州がなぜ、草履を頭の上に乘せて出て行ったのか」を考えたときに、その理由がわかったのです。

草履は、足に履^はいて初めて活用されたと言えるのです。草履を持つ

ていても、帽子のように頭に被^{かぶ}って裸足^{はだし}で歩いていたのでは、草履を持っていないのと同じです。

趙州は、草履を頭に乗せることによって「雲水諸君、この猫が説く仏の説法を理解しなさい。これこそがこの猫の仏性です。しかし、この猫が説く仏法を理解できたからと言って、猫にも仏性があることを理解できたと言う思いに留まってははいけません。大切なのは、この猫から学んだことを、修行・人生の中で実践し活用して初めて、猫が説く仏法と言う名の仏性が活用され、猫にも仏性があると言えるのです」と語っていたのだと思います。

そして、猫を捕まえた南泉が「道に適う一句を言ってみよ」と言った場面に、もしも趙州がいたならば、趙州は「和尚さん、鎌は稲を刈ったり、草を刈ったり、枝を下したりするために使う物です。ですから、猫を斬るために鎌を使うのは、草履を帽子のように使うことと同じですから、これでは鎌の持つ本来の仏性（仏の願い・真理）と一致しない使い方ではないでしょうか」と言って、南泉が猫を斬るのを諫め、猫の命を救ったのではないかと思います。

仏 それでは、南泉に「道に適う一句を言ってみよ」と、Oさん自身が問われたならば、何と答えますか？

O 私は、前述の趙州と同じ内容で答えたと思いますが、もしも、猫に仏性があるのかないかを遊び半分の気持ちで延々と議論している雲水の1人であったならば、と言う仮定でお答えします。

私は「猫に仏性があるのかないかを議論している暇があったら修行すべきでした」と言って南泉和尚に頭を下げて道場に戻ります。

仏 ほう。それはなぜですか？

O 南泉の問いは「猫を挟んで、そのようなことを言い争う暇があるならば、道に適う一句を言ってみよ」と言うものでした。つまり、南泉は「そんな暇があるならば、さっさと道場に戻って修行しなさい」

と雲水たちを促^{うなが}していたのです。

ですから、雲水の立場でこれに応（答）えるならば「わかりました」と言っ^て、指摘されたことを素直に反省し、道場に戻って修行に入るのが、この場^ばの道（道場）に適った一句であると思うからです。

仏 あははは。

○ 私、何か可笑^{おか}しいこと言いましたか？

仏 ○ さん。いや大地霊さん。さすがです。あなたの答えは完璧です。南泉も趙州も、ここまでの答えと解説は用意していなかったでしょう。あなたは2年で、この公案だけでなく「碧巖録」に納められている他の99則も解かれたようですね。その答えはいずれも、人類が100万年修行しても辿り着けない完璧な答えです。

私はあなたに「公案」を出すべきではなかったようです。なぜなら、あなたが答えた「公案」は、あなた以上の答えを人類が見出すことは不可能でしょうから、もはや「公案」でなくなるからです。

話を戻します。「道に適う一句」について、あなたの答えを語ってくれましたので、約束どおり「南泉がどうしてニャンコを斬ったのか」その理由を話してあげるニャーン。

○ よろしくお願ひします。

仏 雲水たちが誰1人、道に適った一句を答えられなかったからこそ、この物語が公案となったのです。もし、雲水が見事に答えてしまっていたならば、その答えに多くの修行者が縛られてしまいますから、公案としては成り立たないのです。

答えられなかったために「自分こそが、この猫の命を救うことができる一句を探ってみせる」と、多くの雲水たちは、そう意気込んで修行に精進し、この関門を突破してきたのです。

ですから、これまでに100種類も、1000種類もこの場に適った一句が生まれているのです。つまり、猫の命はこれらの1つひとつの中

に見事に蘇^{よみがえ}っているのです。そして、1人ひとりの修行者の思いの中に「鎌を振り翳^{かざ}した南泉に、首元を押さえられている姿」として、猫は今でも生き続けているのです。

更に、この公案は、仏性をあらゆる角度から捉える「無門関」の「趙州無^む字^じ」の公案へ繋がってゆくのです。

私は、この公案を通して、多くの雲水たちに「そのものに備わっている仏性は、それを活用して初めて仏性があると言えるのだ」と言う真理を学んで欲しかったのです。

その場に趙州がいないようにしたのも、雲水たちに答えさせなかったのも、私の意志なのです。ですから、この猫は南泉に斬られる運命にあったのです。

ではこの猫は何物なのか？ 答えは仏なのです。つまり私の化身なのです。

鎌を持った人が猫を捕まえようとしてもできないのです。なぜなら、猫は素早く殺気を感じて逃げてしまうからです。もし、捕まっても、爪^{つめ}を立てたり、噛^かんだりしますから、雲水たちが答えられない間、猫をずーっと捕まえて置くことは不可能なのです。

ところが、この猫は鎌を持った南泉に素直に捕まり、そして逃げようともせず、斬られたのです。これが、猫は私自身である証^{あかし}です。

「南泉はなぜニャンコを斬ったのか？」答えは「私自身が猫の姿となって現れ、南泉（たち）を動かし、そして南泉に斬らせたから」なのです。それは、どうしてか？ この物語を公案として多くの修行者に取り組んでもらいながら、仏性があるとかないとはどう言うことなのかを学んで欲しかったからなのニャン、にゃん、ニャーン。

2 形が違ふ

PさんとQさんの会話です。

P 「第19章 2000年の初夢」の最後のところで、

罪 → 人の罪を背負うと反転して 𐄂 となって罪の文字

が翼に変わるのです。

と書かれています。罪を反転させた文字は、翼を広げている姿に見えなくもないのですが、翼と言う文字とは形が違うと思うのです。Qさんはどう思いますか？

Q 私は神仏と対話している人なんている筈がないと思っていました。しかし、この物語を読んで、この登場人物であるHさんは、もしかしたら本当に神仏の心がわかるのではないかと思います。なぜなら、私には罪を反転させた文字は、肩から翼が生えて大きく羽ばたいている姿に観えるからです。それに、この物語には神仏の働きを強く感じるのです。

^{もちろん}勿論、互いに人の罪を背負い合う世界が実現すれば、世の中がとても平和になることは私にも容易に想像できます。しかし、それを実践することもまた、大きな困難が待っていることを容易に観てとることができます。ですから、人にこのことを呼び掛けたとしても、多くの人は「理想と現実のギャップ」を知っていますから、この呼び掛けの声は、やがて消えてしまうと思います。

しかし「これを実践したならば、三途の川を飛んで天国（悟り）の世界に入れる」保証が、もし神仏から得られたならば、多くの人が目覚め、これを実践しようと努めるのではないかと思います。そして、この物語にはその力があるように感ずるのです。

罪と言う文字が翼を反転させた文字であったならば、この物語を読む前に多くの人が気付いていたのではないかと思います。罪を反転さ

せた文字が、翼と似ているようで違った形をしているからこそ、この物語を読んで感動する人がいるのではないかと思います。

それに、罪を反転させた文字と、翼の文字の違いは、おおむね下の部分が「𠂔^{もう}」であるか「異^い」であるかの違いではないかと思います。このことから、翼と言う文字の下部分は、罪を反転させた文字の下部分とは異なるものであることを「翼」と言う文字自身が語っているような気がするのです。私は、ここにも神仏（マホメッ△さん）の働きを強く感じるのです。

3 ブラックホール

RさんとSさんの会話です。

R 「第1章 1 太陽が手本 その1」のところでは「大きく・重い物質を掻^かき集めてしまった星は、惑^{まど}う星や、ブラックホールにしかなりえないことを、大宇宙自ら法を説いて示しているのです」と書かれています。第11章 6 ペンネームの由来」のところでは「銀河系の中心から周りの星々に注がれている愛を上回って、周囲の星々から銀河系の中心に感謝が戻っているために、ブラックホールとなっているのです」という趣旨のことが書かれています。この2つの文章は矛盾していると思うのですが、Sさんはどう思いますか？

S 確かにこの2つの文章だけを比較すると、一方は「自ら周りの物質を掻き集めている」と言っており、もう一方は「自らは周りに物質を放出しているが、これを上回る物質が周囲から感謝として戻ってきている」と言っていますから、両者が矛盾していることは明らかです。

私は、ブラックホールの現象は大宇宙の営みそのもので、善悪を超越した存在、つまり善とか悪とかはないと思います。この現象をどのように捉えたら良いのかが大切だと思うのです。

ですから、ブラックホールを「物質を掻き集めている現象」と捉える見方も「周りから物質が注ぎ込まれている現象」と捉える見方も、どちらも可能で、それらを適切に使い分けることが大切だと思うのです。

R 具体的にはどう言うことですか？ わかり易く説明して頂けますか？

S ブラックホールをお金がたくさん集まる現象に置き換えた、次のたとえ話で説明します。

億万長者の T さんは、^{くるま}車の^{タイヤ}車を作っている会社の社長さんで、得た収益の大部分を福祉事業に寄付されている方です。この T さんを見ている U さんがいます。

U さんと T さんが、それぞれ次のように考えたとします。

U 「T さんは皆が安心できる商品を安く提供し、しかも得た収益の大部分を福祉事業に寄付しているから、周囲から感謝の形でお金が次から次へと入ってきて、あのような億万長者になったのだ。まるで、周囲から感謝が戻ってくるブラックホールのような」と。

T 「私は、今年もブラックホールのようにお金をたくさん掻き集めてしまった。私のところにお金が集まった分、お金が足らなくて困っている人がいるに違いない。得た収益を、商品の値段を下げたり、品質を向上させたり、従業員の給料を上げたり、福祉事業に寄付したりして、世の中にもっと還元しなければならない」と。

S このように、T さんの周囲にいる人たちは「億万長者の T さんの善行を評価する心」で、一方 T さん自身は「まだまだ世の中にお金を還元しなければ、と戒める心」で、それぞれブラックホールの現象を捉えたならば、真理的行為の報いとして、彼らには幸せな未来が訪れるのです。

しかし、もしも、U さんと T さんが、それぞれ次のように考えたと

したならばどうでしょう。

U 「Tさんは、福祉事業に寄付しているのは形ばかりで、得た収益の大部分は豪華な犬小屋を建てたり、高性能のカラオケのマイクを買ったり、贅沢な私生活のために使っている。Tさんがお金を集めている姿は、まるで、周囲のあらゆる物質を掻き集めているブラックホールのようなだ」と。

T 「私は得た収益の大部分を、商品の値段を下げたり、品質を向上させたり、従業員の給料を上げたり、福祉事業に寄付したりして使っている。だからブラックホールのように、周囲から感謝の形でお金が次から次へと集まってくるのは当然だ」と。

S このように、Tさんの周囲にいる人たちは「億万長者のTさんを妬む心」で、一方Tさん自身は「充分お金を周囲に還元しているので、私のところにお金が集まってくるのは当然だ、と慢心する心」で、それぞれブラックホールの現象を捉えたならば、反真理的行為の報いとして、彼らには不幸な結果が訪れるのです。

R なるほど。1つの現象にも、様々な解釈が可能で、これを神仏の心と知恵で観ないと、人を妬んだり、自身の慢心を抑えられずに暴走したりする危険があるのですね。

しかし、もしも、神仏の心と目であらゆる現象を捉えることができたならば、これらから学び取ることは無数に存在するのでしょうかね。

S すべてが光り輝いて観えるとは、そう言うことです。

4 「ぶどう園の労働者」のたとえ

Vさんは聖書の中の「ぶどう園の労働者」のたとえと言うところを読んでいた。そこには、次のように書かれていました。

『天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇^{やと}うために、夜明けに出掛けて行った。主人は、1日につき1デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。

また、9時頃行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので「あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう」と言った。それで、その人たちは出掛けて行った。主人は、12時頃と3時頃にまた出掛けてゆき、同じようにした。5時頃にも行ってみると、他の人々が立っていたので「なぜ、何もしないで1日中ここに立っているのか？」と尋ねると、彼らは「誰も雇^{やと}ってくれないのです」と言った。主人は彼らに「あなたたちもぶどう園にゆきなさい」と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督^{かんとく}に「労働者たちを呼んで、最後にきた者から始めて、最初にきた者まで順に賃金を払ってやりなさい」と言った。そこで、5時頃に雇^{やと}われた人たちがきて、1デナリオンずつ受け取った。最初に雇^{やと}われた人たちがきて、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも1デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。「最後にきたこの連中は、1時間しか働きませんでした。まる1日、暑い中を辛抱^{しんぼう}して働いた私たちと、この連中とを同じ扱いにするとはいけません。主人はその1人に答えた。「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたは私と1デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰きなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、私の気前^{きまえ}の良さを妬むのか」このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる』。

Vさんはこれを読んで「善行による徳積みに応じて果報が得られ、これによって天国に辿り着ける順番も自ずと決まってくるべきではないか。それに、後から修行を始めた者の方が早く天国に辿り着けると

言うのであっては、平等と言う秩序が崩れてしまうのではないか」と言う疑問が湧き上がってきました。

そこで、日頃から尊敬している先輩の W さんに尋ねました。

V 先にきた者から先に帰り、そして長い時間働いた者は、それに応じた報酬^{ほうしゅう}を受け取るのが社会の秩序を守るための大切な約束ごとではないかと思うのです。ですから「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」と言う聖書の言葉には、私は賛成できません。W さんはどう思いますか？

W 確かに、人間の価値観（物差し）で測ったとしたら、この聖書の言葉は納得できないでしょうね。でも、多くの人たちの価値観と異なるからこそ、これが人知を超えた教えとして輝くのです。つまり、イエスが語ったこの言葉を理解しようとして、多くのクリスチャンが心を磨くように努めるからです。そしてこれが理解できたとき、聖書に書かれている 1 つひとつの言葉が、心の奥底にまで沁^しみ渡ってくる喜びを味わうことができるからです。

V では、聖書のこの言葉は何を語っているのでしょうか？ わかり易く教えて頂けませんか？

W V さん。聖書の言葉の 1 つひとつが、イエスの問い掛けなのです。これは、イエスが V さんに問いかけているのです。

これを読んで私が悟ったことは私の悟りでしかないのです。ですから、私が悟った内容を V さんに語っても、V さんが心から納得できるとは思えないのです。V さん自身が納得する答えを自ら探って頂きたいのです。

答えに辿り着いたとき、この箇所だけでなく、聖書全体から発せられているイエスのメッセージや思いを、読み取ることができるようになります。

V わかりました。答えに辿り着けるよう心を磨いてきます。

（公案）読者の皆様も V さんと一緒に上記「ぶどう園の労働者」のたとえ話を通して、イエスは人類にどのようなメッセージを発信しているのかを読み解いてください。

答えがわかったと思われる方は、以下を読み進めてください。

1 年が経過し、V さんは W さんを訪れました。

V 私なりに答えに辿り着きましたので聞いてください。

W わかりました。では、お願いします。

V 人を妬まずに「後にいる者が先になる」ことを認めるような広い心、優しさに満ち溢れた心になりなさいと説かれていることに気付いたのです。そして、このような心の紋様にならないければ、決して天国に入ることができないということです。

W そうですね。ここでは、天国はどのようなところであるかが、たとえ話で説かれていますからね。参考までに、私は、次のように理解しているのです。

ここで言う主人とは、イエスです。ぶどう園は教会を、広場は教会の外を、契約（約束）は洗バプテスマ礼を、労働は信仰生活を、賃金ふくいんは福音を、監督は神父（牧師）を、労働を終えて 1 デナリオンの報酬を受け取るとは天国へ入ることを表します。

ですから、このたとえ話は次のようになります。

V え！ W さん。そんなことして罰ばちは当たらないのですか？

W 大丈夫。イエスは「第 3 巻」で登場しますが、とてもお茶目ですから。それに罰が当たらないように著者が守ってくれます。だから安心。ちなみに「虹の掛け橋」を著者に無断で修正したり解説したりすることは御法度ごはつとですが「聖書」は善想念で行う場合は、これが可能であることが「第 4 巻」まで読まれば納得できます。では、続きを話

します。

『天の国は次のようにたとえられる。イエスは、「信仰生活に入るよう」、呼び掛けるために、夜明けに出掛けて行った。そして、洗礼を授け天国に導くために、人々を教会へ招いた。

また、9 時頃行ってみると、何もしないで教会の外に立っている人々がいたので「あなたたちも教会に行きなさい。洗礼を授け、ふさわしい福音を説いて聞かせよう」と言った。それで、その人たちは教会へ入って行った。イエスは、12 時頃と 3 時頃にまた出掛けてゆき、同じようにした。5 時頃も行ってみると、他の人々が立っていたので「なぜ、何もしないで 1 日中ここに立っているのか？」と尋ねると、彼らは「誰も信仰生活（→天国）^{から}へ導いてくれないのです」と言った。イエスは彼らに「あなたたちも教会にゆきなさい」と言った。夕方になって、イエスは神父（牧師）に「人々を呼んで、最後にきた者から始めて、最初にきた者まで順に天国へ入れてやりなさい」と言った。そこで、5 時頃に洗礼を受けた人たちがきて、まず、天国へ入って行った。最初に洗礼を受けた人たちがきて、もっと素晴らしい天国の世界に入れるだろうと思っていた。しかし、彼らも同じ世界であった。それで、イエスに不平を言った。「最後にきたこの連中は、洗礼を受けてからまだ 1 時間しか信仰生活に入っていない。まる 1 日、辛抱して信仰生活を送った私たちと、この連中とを同じ扱いにすることは」。イエスはその 1 人に答えた。「友よ。あなたに不当なことはしていない。私はあなたを天国へ導くと約束したではないか。これ以上の世界・果報はないのです。自分の果報を受け取って黙って天国へ入りなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように最上の天国へ入れてやりたいのだ。天国の世界に入れる者を私が自由に選んではいけないのか。それとも、私の気前の良さを妬むのか」このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる』と。

W Vさん。あなたは、洗礼を受けてから、まだ1年しか経っていません。私は、20年前に洗礼を受けているのです。しかし、私は、Vさんのように私の後に洗礼を受けた方々が、迷うことなくイエスが待つ天国に辿り着けるのを観届けてから天国に入りたいのです。私だけが特別にこのように思っているのではなく、クリスチャンであれば、そう思うようになるのです。

キリスト教は2000年の歴史があるのです。2000年前にイエスから洗礼を受けた使徒たちの聖人がおられるのです。この人たちの目から観れば、私もVさんも、たとえ話の中の5時にイエスに導かれ、1時間しか信仰生活を送っていない人と同じなのです。

これらの聖人のように、キリスト教の夜明けと同時に信仰生活を送っている古いクリスチャンほど、後から洗礼を受けた人々が天国に辿り着けるのを観届けるまで、天国に入ろうとはせずに活動が続いているのです。イエスはこのような人たちが集まる天国の世界を説いているのです。

人は、誰もが、自分は最も早いうちから労働に従事していると思いがちです。しかし、それは慢心です。

誰よりも早く会社へ出勤して働き始めたつもりでも、良く考えれば、この会社を設計し、建ててくれた人たちがいるのです。休むことなく電気や水道を供給してくれている人たちもいるのです。道路を整備してくれた人もいれば、通勤のための交通機関を動かしている人たちもいるのです。法令を整備し、社会の秩序を守っている人たちや、……この宇宙を創造してくれた神もいるのです。

人はすべて「この聖書のたとえ話の、5時にきてたった1時間しか働いていない者」であると謙虚に自覚すべきなのです。

ここで、Vさんに質問します。プランクトン、魚、ネズミ、犬、猿、

人類では、誰が最も早く天国へ辿り着けると思いますか？

V 天国に辿り着くためには、神仏の教えを理解し、心を浄める修行を成就しなければならないと思います。しかし、プランクトン、魚、ネズミ、犬、猿が心の修行をしている姿を観たことはありません。ですから、人類が最も早く天国へ辿り着けると思います。

W では、人類の次に天国へ辿り着けるのは誰だと思いますか？

V 人類の次に知恵のある猿だと思います。

W 次は？

V 犬、ネズミ、魚、プランクトンの順番だと思います。

W Vさん。このことから、何か気付きませんか？

V Wさん。わかりました。

生物は、プランクトン→魚→ネズミ→犬→猿→人類と進化してきました。ですから、地球の夜明けの時代から、働き出した生物の順番は、この進化の順番と同じです。

植物プランクトンは、多くの生物が地球上で生活できるように、地球の夜明けから酸素を作り続けているのです。しかも彼らは、動物プランクトンや魚たちの餌^{えさ}となって一生を終え、さらに死後は石炭（動物プランクトンは石油）などの化石燃料に変わって、とことん他の生物の役に立ち尽くすのです。

ですから、真理的観点で捉えた順番から言えば、最も早くから地球上の生物たちの役に立って働いている植物プランクトンが、最初に天国へ入ってゆく資格がある筈です。

しかし、最も早く、地球上での修行と言う労働を終えて天国へ入ることができるのは、理不尽^{りふじん}にも「この聖書のたとえ話の、5時にきてわずか1時間しか働いていない者」つまり人類なのです。

W そうです。神仏は、プランクトンたちには、天国へ入るのを辛抱^{しんぼう}してもらっているのです。なぜなら、プランクトンたちがまず天国へ入

って地球上から姿を消してしまつては、食物連鎖の上位にいる生物(魚、ネズミ、犬、猿、人類)は生きてゆけないからです。

人類が最も地球上で労働した時間が短いにも拘らず、最も早く天国へ入ることを神仏から許されているのです。いや「人類は最も後からきて働きもせずに、プランクトンや魚たちが長い時間を掛けて秩序あるものに整えてきた地球環境を散々破壊しているにも拘らず、最初に天国へ入ることを神仏から許されている」と表現するのが正確なのかも知れません。

このことから、神仏や他の生物たちの人類に対する「愛」がいかに深いかを知るべきです。

多くの生物の犠牲の元に、人類は最初に天国へ入れてもらえるのですから、人類は地球上のすべての生物に対して尊敬の念を抱き、そして、もっと謙虚になるべきです。戦争やテロの応酬や領土問題や経済紛争に現^{うつ}を抜かしている暇^{ひま}はないのです。このたとえ話を通して、これらのことがイエスから人類へのメッセージ(公案の答え)なのです。

「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」のは、真理的ルールに反しているから、けしからんと言っている人は、本人は気付いていないでしょうが「プランクトンや魚たちが天国に入るまで、真理的ルールにしたがって、私は天国に入りません」と言っているようなものです。これが実相の姿です。ですから、このような頑固でお馬鹿で素直さがない心の紋様の人では、決して天国へは入れないとイエスから言われると思います。

あとがき

私は子どもの頃、ナポレオンの伝記を読んだことがあります。それによると、ナポレオンが少年だった頃、夕立が上がった空に現れた七色に輝く大きな虹を掴^{つか}もうとして、どこまでも追い掛けて行ったそうです。「さすがはナポレオン、人と違うな」と、子ども心に、つくづく感心したのを記憶しています。

私は、ナポレオンのように虹を追い掛けて行ったことはありませんが、子どもの頃からずっと、虹には強く引き付けられるものを感じていました。

「虹の真ん中に立ったらどんな世界が観えるのだろう」とか「虹を^{てのひら}掌に乗せてみたいな」とか、叶いそうもない夢を描いたものでした。

しかし、この決して叶わない夢こそが「虹の掛け橋」の物語を書く原動力の1つになっていたことは確かなようです。

今、私はこれをアパートの自室で書いています。アパートの名前は「グリーンハウス」と言います。虹の中心を貫く色はグリーンです。つまり「グリーンハウス」は虹の真ん中を表していると、勝手に想像することが許されるならば、私は今、まさに虹の真ん中に立って観える世界を本に書いていると言えるのではないのでしょうか。

これもまた手前味噌^{みそ}ですが、両手でパソコン（キーボード）を打ちながら「虹の掛け橋」と言う虹を描いているわけですから、虹を掌に乗せていると言えるのではないのでしょうか。

願いは、自分自身で叶ったと感じたときに叶っているもので、いくら周りの人から「あなたの願いは私の目から見れば、叶っているように見えますよ」と言われても、本人が願いは未だに叶っていないと感じているうちは叶っていないものです。ですから、私の場合は、あくまでも自己満足の世界ですが、知らないうちに願いは叶っていたので

す。

ナポレオンも、おそらく、フランスに勝利を齎して国民から祝福されながら凱旋門がいせんもんをくぐったときに、頭上に輝く虹を掴むことができたのではないかと思います。

人は誰も、何かしら、叶いそうもないような夢を抱いて生きているのではないのでしょうか？ この夢を諦あきらめずに追いかけて行ったら、それはその人の自己満足の世界での話かも知れませんが、必ず夢は叶うのではないかと思います。

しかし、このときに注意しなければならないことがあります。慢心してはならないということです。

ナポレオンは自ら「皇帝である」と名乗り、いつしか平和を忘れて周辺の国々に戦を仕掛けてしまったのです。そして最後は戦に敗れ、セント・ヘレナ島へ流され、そこで寂さみしく一生を終えたのです。ナポレオンは、凱旋門をくぐったときに掴んだ虹を「皇帝であると名乗った」その慢心によって手放してしまったようです。偉大な人や巨人ほど、背を屈かがめながら凱旋門をくぐるべきだったのではないのでしょうか。

人は願いが叶ったり、悟ったりしたときに、つい有頂天になってしまうものです。これは人間である以上誰もが経験することです。しかし、この慢心によって痛い目に遭あって、人は慢心の怖こわさを身に沁しみて味わうのです。

人は「慢心を覚え」「反省し」「また慢心を覚え」「そしてまた反省し」と、これを交互に繰り返すのです。そしてやがて心の修行を成就して、決して慢心を覚えない心の紋様に整えることができるのです。

人は悟ったときこそが最も危険な状態であると言う反真理を自覚できず、自分こそ「神である」とか「キリストである」とか「メシア（救世主）である」とか「仏（仏陀）である」と思ったり言ったりしてしまい、この慢心によって、暴走を招き、折角せつかく掴んだ虹（神仏の本当の

悟りや知恵)を手放してしまうのです。ナポレオン自ら反真理に関する法を説いて教えているのです。

ナポレオンは今、神仏の前に^{ひざまず}跪き、自身が抱いていた慢心を深く反省しているのではないかと思います。そして、神仏から「本当の悟りや知恵」と言うものが、どう言うものかを教えてもらっているのではないかと思います。そして、ナポレオンは、今度こそ本当に虹を掴んだのではないのでしょうか。

私は、心の修行を始めて間もない頃、霊界での(生活の)記憶が少しだけ^{よみがえ}蘇り、悟りの境地のようなもの(今から振り返ると悟りとはほど遠い慢心の^{かたまり}塊)に取り憑^つかれ、我慢^{がまん}できずに、仏に「仏典も聖書もコーランも^{れいくん}霊訓も^{むきゅう}無窮の過去に読んで知っている内容ばかりです。私は何者ですか？」と尋ねたことがあります。

仏は次のように語り、私を優しく諭^{さと}してくれました。『そのような質問をすること自体、慢心している証拠です。しかし、あなたはいつしか我慢できずに、私にそのような質問を投げ掛けてくるだろうと思っていました。そこで私は、あなたが納得するよう、あなたの名前に印を付けてきました。あなたの名前は「孝^{たかし}」と書きます。この文字は「土^{つち}の子^こ」と言う順で書きます。あなたは「土の子」なのです。神が土(アダマ)から人(アダム)を創ったことから、この「土」は「人」を表します。つまりあなたは「人の子」なのです。今は煩惱多き人間と言うことです。しかし、成長して心の修行が成就したとき、あなたは「土」^{から}→「大地」(すべての生物から踏みつけられながらも、これに耐え、かつ頭^{こうべ}を低く垂^たれ、安らぎを与える縁の下^たの力持ち的存在)と成ることを人生の目標に怠らず精進・努力するのです』と。

ここまで「虹の掛け橋」をお読みくださりありがとうございました。多くの方々に支えられて「第2巻」を書きあげることができたことを、

ここに深く感謝申し上げます。

21 世紀中に、民族や宗教間の紛争のない平和で調和と秩序のとれた
世界が創造・確立されることを念じつつ筆を止めます。